
俺、ツインテールになります。4.5
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。

水沢　夢

イラスト　春日　歩


水沢夢 [イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。4.5

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


「んっ……」
「ふふ……ここじゃ
誰かに見られちゃいますよ?」


愛香――
俺のツインテールを、
お前の心に焼き付けてくれ!!

目次

俺、ツインテールになります。4.5

水沢夢
[イラスト]春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。
テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

ダークグラスパー
眼鏡を愛するアルティメギル
首領直属戦士。
善沙闇子（いいすなあんこ）の名でアイドル活動をしている。

ＤＲＥＡＭ□ＳＴＡＲＴ：小ちっちゃな頑張り屋さん。

　おっぱいが大きいことに後悔はない。
　むしろトゥアールは、その胸の大きさと等しき雄大な誇りを持って生きてきた。
　だがもしも、自分がテイルレッドと同じくらい幼い少女だったら……抱きついたり、ちゅーしたりといったスキンシップを、想い人の総そう二じは照れずに受け容いれてくれたのではないか？
　そしてもしも自分が幼い女の子だったら……自分は、幼い少女を好きだっただろうか？

「トゥアールさんの大人っぽさが羨うらやましいですわ……」
　ツインテール部部室で、憂うれいを帯おびた溜ため息いきをつく慧え理り那な。
　彼女は彼女で、幼い見た目の自分に悩んでいる。
　けれど、トゥアールのほうこそたまに羨ましく思っている。
　頼れる同年代の女の子ではなく……可か愛わいい年下の女の子として、思い切り総二に甘えてみたいと──。
　ツインテール部部室に慎ましい破裂音が木こ霊だまし、部屋の中にピンクの煙が濛もう々もうと立ち込めていった。
　そのピンクの煙の中心で、けほけほと咳せき込みながら、涙目になる小さな女の子は……異世界からやってきた科学者、トゥアールだ。
「ひゃわわ～、また研究に失敗しちゃった～」
　年の頃ころは、小学校に上がるか上がらないかぐらいだろうか。

くりっとした瞳ひとみと、きめ細やかな長い銀髪。
丈の合っていないだぼだぼの白衣に身を包み、袖そでからはやっと少し出る程度の指先。
そこには、過剰な科学反応で中身を空からにした三角フラスコが握られていた。
小っちゃな科学者さんには、三角フラスコがよく似合う。
しかし、落ち込んではいられない。大好きなお兄ちゃんのために、今日もトゥアールちゃんは研究を頑張るのだ。
すぐに次の実験に取りかかるべく、壁の薬品棚へぱたぱたと走っていく。
「うーん、うーん、届かないよう……」
薬瓶びんを取ろうと薬品棚の前に踏み台を三つほど重ね、それでもお目当てらしき最上段には手が届かず、爪つま先さき立ちでうんと背伸びをするトゥアール。
—ああ、危ない！
バランスを崩して倒れたトゥアールは……背中から、力強い両腕に支えられた。
「ふふ、気をつけるんだぞ。でも、トゥアールはおっちょこちょいで可か愛わいいなあ」
振り向いたトゥアールの顔が、ぱあっと綻ほころぶ。総そう二じが風のように駆けつけ、トゥアールを助けてくれたのだ。安あん堵どしたトゥアールだが、はっとして顔を真まっ赤かにした。



「そ、総二お兄ちゃん……トゥアールのおっぱい、触ってるよう……」
　自分を抱き留とめた総二の両手が、後ろから胸を鷲わし掴づかみにしていたのだ。
「ん？　ああごめん、気づかなかった……でもトゥアールの小さいおっぱいなんて、触っても気づかないぞ？」
　総二はあっけらかんとして悪びれず、それどころかくすぐるようにトゥアールの胸を揉もんできた。
「やぁん……お兄ちゃん、手がえっちだよう……」
　身をよじるトゥアール。しかし、総二お兄ちゃんに力では叶かなわない。
　今も総二に喜んで欲しくて、おっぱいが大きくなる薬を作ろうとしていたのに。
　女心に疎うとい鈍感なこの総二お兄ちゃんは、誰だれよりもかっこよくて優しい。
　トゥアールは、お兄ちゃんが誰よりも大好きなのだ。
「まったく、トゥアールは子供だなあ……」
　トゥアールは力の緩んだ隙すきに総二お兄ちゃんにぎゅっと抱きつき、可愛く抗議する。
「む～！　トゥアール、子供じゃないもん！」

「はい!?　言われなくったってわかってるわよ！　何急に媚こび媚びの声出してんの!?」
　慧え理り那なと尊みことが帰った部室。愛あい香かの突っ込みで、トゥアールは我われに返った。
　どうやら、白昼妄想の深みにはまっていたようだ。
「小ちっちゃな私が可か愛わいすぎるのがいけないんですよ！　ああもう、いつまで待ち望んでも小っちゃな妹キャラが現れてくれないから、

ついに私がなってしまったんですね……!!」
　許すまじ蛮族。これから総そう二じと、めくるめくこちょこちょプレイに突入しようという時に。
　愛香は眉まゆを顰ひそめ、トゥアールの悲ひ憤ふんを訝いぶかしがる。
「脳味噌が収縮しちゃったの!?　あんたを見渡して一体どこに小さい要素があんのよ!!」
「それはすみませんねえ！　真っ先に小さい要素が目に飛び込んでくる愛香さんには酷でしたか!!」
　売り言葉には、買い言葉ではなくワンパンで。ノータイムで拳撃を繰り出す愛香。
　だが、幼さ成分を自らの体内で生成し活力と変えた今のトゥアールには、その拳こぶしは遅すぎた。
「見切りました！　サイエンス回避!!」
　明らかに卓越した己が体術のみで愛香の攻撃を回避しながら、トゥアールは科学の賜たまものだと言い張る。
「私が今までどれほど気が遠くなるぐらい、愛香さんの攻撃を受け続けてきたと思っているんですか!?　見開き一ページにつき一つの技を紹介したとしたら、文庫本一冊ぐらいに製本して出版できるぐらい多彩な殺人技を、全て己が身体からだ一つで耐えきってきたんですよ!!」
「これから末永く続刊しそうね、その本」
「あああああああああああああああああああああああああああああああ早くも重版出来しゆつたい!!」
　動きを見切られたなら、さらにその上を行く動きで活路を開く。脳筋の真骨頂が炸さく裂れつする。

　愛香に吹き飛ばされながら、トゥアールは思う。

　妄想で幼くなってなお、ツインテールにできない自分。
　決して後悔していないわけではない。しかし、世界を守るという果たし得なかった夢は、総二たちが叶かなえてくれている。
　ならばこれからの自分の科学は、そんな総二たちに夢を与えるものでありたい。

　……だからどんなに深刻なダメージを受けても、この大きな胸の下の鼓動は、止めてはならないと──。

第一話　集え、秘密基地へ。

　エレメリアンとの戦いを終え、静けさを取り戻した大地に佇たたずむ。
　柔らかな風にそよぐ、自分のツインテール。
　地球という惑星ほしの息吹を身体ツインテールに感じ、俺の心は、生きているという実感に歓喜する。
　不意に、涙が零こぼれそうになった。
　見慣れたはずの空を振り仰ぐとほら、こんなにも色鮮やかに輝いている。
「はいはい、帰るわよ」
「え、ああ」
　げんなりした表情の仲間、テイルブルー……幼馴染おさななじみの愛あい香かに促うながされ、俺は戦闘場を後にした。同じく仲間のテイルイエロー……学園では先輩の、神しん堂どう慧え理り那な生徒会長も続く。
『ツインテールにうっとりしてるレッドちゃん可か愛わいかったのに、風ふ情ぜいのわからない人ですね愛香さんは!!』
「トリップしてエスカレートしていきそうだから止めたのよ！　充分待ったわ!!」
「まあまあブルー、今日の相手はなかなか手て強ごわかったですから、少しは落ち着く時間があっても――」
　通信でサポートしてくれた頼れるブレイン、トゥアールといつもの喧けん嘩かを始める愛香。そしてそれをなだめる慧理那。戦闘中によだれ

を垂らしながら俺に絡みついてきた時とは打って変わって、穏やかな表情だ。
　この光景が、俺たちの日常だ。俺たち――ツインテイルズの。

　俺は観み束つか総そう二じ――一五歳、陽よう月げつ学園高等部一年生。
　ツインテールが好きなことにかけては世界中の誰だれにも負けないという自負はあるが、それ以外は目立った取り柄えも無い、普通の学生だ。
　そんな俺は、高等部に入学したこの春、人生の大きな転機を迎えた。
　ツインテール好きが高じて――と、言えるのかどうかはともかく……自分自身のツインテールへの愛を大きな力へと変えて、ツインテールの戦士、テイルレッドに変身。
　異世界からやって来た怪人たちの集団・アルティメギルからこの世界のツインテールを守るため、日々戦っている。
　俺がテイルレッドに変身するためのアイテム、テイルブレスを託してくれたのが、アルティメギルに自身の世界を侵略された、かつて自身もツインテールの戦士として戦っていた女の子、トゥアールだ。
　無数に存在する異世界では、科学レベルもピンからキリまである。
　スマートフォン一つでほぼあらゆることができてしまうぐらい進んだこの世界の科学も、数千万階調のグラデーションの中の一ドットにも喩たとえられる平行世界の中では、全くの駆け出しのようなものらしい。
　トゥアールの持つ超科学力はまさに魔法と言っても遜そん色しよくなく、俺や仲間たちは、彼女のサポートに日々助けられている。
　彼女の最高傑作である、ツインテール属性を核にした強化服、空想装そう甲こうテイルギアは言うに及ばず、万能端末トゥアルフォンなどの各種ツール。

　中でもそのスケールに圧倒されたのは、俺の家の地下深くに僅わずか一晩で建設された、ツインテイルズ秘密基地だ。
　自分の家の地下に、秘密基地がある人はいるだろうか。
　避難用のシェルターを自宅に備えている富豪はいると聞く。映画などでは、自社ビルの地下に秘密の研究施設を持つ大企業が描かれたりもする。
　しかし、何の変哲も無い中二病喫茶の地下深くに、人智を超えた超科学の結晶たる広大な地下基地が存在するなど、誰だれも考えはしないだろう。
　実に深さ一〇〇〇メートルという地下に建設されたこの基地が、俺たちツインテールの戦士、ツインテイルズの拠点。
　今や、アルティメギルとの戦いの後方支援になくてはならない存在だ──。

　　◇

　戦闘が人里離れた場所だったので、今日は一般人に撮影されることもなく。
　ブルーが発動した髪紐属性リボンの属性玉エレメーラオーブによる飛行能力で転送ポイントまで移動し、俺たち三人は基地へと帰還した。
　基地奥のゲートを抜け、コンソールルームへ入室すると、三人一斉に変身を解除。
　赤青黄の三色の光が弾はじけ、戦いから身を守ってくれた装甲はブレスへと戻る。
　俺は小さな女の子の姿から、男の姿へ。慧え理り那なは逆に小さな姿に。
　愛あい香かは全く変わらない。

それぞれ元の姿になり、誰ともなしにそれぞれの定位置が決まっていた、中央テーブルを囲む椅い子すへ座る。

「今日のエレメリアンはしつこかったわねー」

おそらく俺たちの中では最多の撃破数を誇り、敵であるエレメリアンからも恐れられている愛あい香かが、椅い子すの背もたれを倒しながら伸びをした。

虹にじのアーチにも似た美しい曲線を描くツインテールとは裏腹に、伸びをすると胸から腕までが戦車の砲塔にも似た力強い一直線となる。

幼馴染おさななじみの愛香はそんな自分の胸の小ささを非常に気にしており、対照的に豊満な胸を誇るトゥアールがやってきてからは、それが加速してしまった。

昔は俺も、完かん璧ぺきなツインテールを持つ愛香が胸の小ささを妙に気にするのがおかしくて、たびたびからかったりしたのだが……一応、「そこまで気にすんなよ」というニュアンスを含んだ励ましのつもりでもあった。

しかし、それは男特有の配慮の足りなさだったというか……第三のテイルギアを製作する折、愛香が自分の貧乳を本当に洒しゃ落れにならないほど気にしていたとわかって以降は、できる限り触れるのを自じ粛しゅくしている。

ちなみに愛香……テイルブルーがエレメリアンに恐れられている理由は、戦闘力が主ではない。情け容よう赦しゃのない戦闘スタイルと、胸のことを指摘されるとさらにもう一段階上の暴走状態へと変貌する恐怖からだそうだ。

そして、そんなテイルブルーを世間ではヒーローではなく畏い怖ふの対象としている。

自分でもそのことを気にしているふしがある愛香だが、遠えん慮りょ

なくいじってくるトゥアールに対しては手加減がない。日々のじゃれ合いを見て、俺は二人が親友なのだと実感する。

「トゥアールさん、昨日お話していた件、よろしいですかっ？」
　遅れて着席したトゥアールに、戦闘直後の疲れも見せず慧え理り那なが提案した。
「はい、この基地の説明でしたね」
　快こころよく頷うなずくトゥアール。
　テイルギアなどの説明は受けていたものの、慧理那はこの地下基地をじっくりと見て回る機会が今まで無く、それを熱望していた。が、慧理那は夜八時には眠くなるということもあって平日には難しく、日曜日の今日、ゆっくりと説明を受ける約束をトゥアールとしていたのだ。
　何やら説明の準備をしているトゥアールを余よ所そに、慧理那は感慨深げにコンソールルームを見回した。
「……観み束つか君。守り抜いていかなければなりませんわね、この秘密基地を。ヒーローものだと秘密基地は大体第一話か、最終話近辺で破壊されてしまうものですから……！」
　複雑な表情で決意を新たにする慧理那。
　ヒーローファンである慧理那はヒーロー番組のお約束を重んじ、それが自身の戦術に活いかされたり、俺たちへのアドバイスとなったりすることも多い。
　しかし、その手の番組は俺も見てはいるのだが、今聞いたお約束についてはあまり心当たりがない。
「……最終話はまだわかるけど、何で第一話しよつぱなで爆破されるんだ……⁉」
「インパクトと、絶望を乗り越え戦っていく姿を描くためだと思いますわ！」

様々な大人の事情も見え隠れするような気がするが……。
ともあれ、そのヒーローファンぶりが高じて元々ツインテイルズの大ファンだった慧え理り那なが、ツインテールに導かれるように俺たちツインテイルズの一員、テイルイエローへと変身したのは、まさに運命だったのだろう。変身したての頃ころに紆う余よ曲きよく折せつあったが……自分自身のツインテールを信じることでそれを乗り越えた慧理那は、今では頼もしい仲間だ。
あとはまあ、愛あい香かと同じように気になる点があるとすれば……若干、脱ぎ癖ぐせがあるところだろうか。それは彼女の戦闘スタイルと完全にシンクロし、ある意味ではテイルイエローとは切っても切り離せない相棒のような存在。
慧理那自身がそれを受け止めているのだから、俺もできる限り応援するというスタンスだ。

「では、この地下基地のスペックについて、まずはおさらいしましょう！」
トゥアールが壁面に設置されたコンソールパネルの前に立ち、大おお仰ぎように指を振りかざしてボタンを押す。
「…………」
「「…………わ」」
俺は絶句し、愛香と慧理那が頬ほおを赤らめる。
巨大なメインモニターに、上う階ちの風ふ呂ろ場ばでシャツを脱ぐ俺の姿がでかでかと映し出された。
「おっと、間違いました……今のはお気になさらず」
おほほほ、と手で口くち許もとを隠して笑いながら、ボタンをもう一押し。戦せん慄りつの映像が消える。
お気になさらずと言われて、わかったよで済ませていい映像だっただ

ろうか。進歩した科学がもたらす光と闇やみを目まの当たりにし、俺は苦悩する。
「大丈夫よそーじ、あとであのモニターごと消滅させるから」
　このように対抗者カウンターを引き受ける愛香の思考が極端だから、俺からはいつも何も言えないんだよな……。
「ではあらためて」
「どーせまたあのやたら長い説明でしょ……？」
　やれやれ、と手の平を振る愛香。気にせずトゥアールは操作を続行した。
　完全破壊ターミネートの宿命を背負ったモニターが、この先待ち受ける己が運命も知らずに任務を全うしようとしている。
　モニターに、基地の概要が映し出された。

ツインテイルズ秘密基地 －アイノス－ 概要

制作者：トゥアール

（Ｂ90□W57□Ｈ86　この３サイズを見てから三日以内に制作者にいやらしいことをしないと大変なことが）

【ギガレイヤースチール】　基地の外装を覆おおう多層多重合金素材。軟性と剛性を兼ね備え、この金属そのものが免震機能の役割を果たし、マグニチュード９相当の地震の直撃でも一切の振動を内部に伝えない。

【クリスタルラバーコーティング】　最高峰の対探査システムであり、現存するあらゆるレーダー機器による外部からの探知を阻害する。

【ライフリングコクーン】　自給自足カリキュレーターの総称。基地そのものが巨大なシェルターとしても機能し、万一外部と切り離されても数十年は生活できる。

【テイルオペレートシステム】　基地の頭脳であるメインコンピュータ。各テイルギアのシステムと連動しており、稼働状況を〇・〇〇一秒のタイムラグ無しに伝送する。

【属性力エレメーラ探査器サーチヤー】　感情が高まった場合や戦闘態勢に入ったエレメリアン特有の属性力エレメーラ波長を探知する装置の総称。基地や後述の衛星などに搭載されており、各種デバイスへとデータを転送する。

【人工衛星群】　打ち上げたメイン人工衛星は、テイルオペレートシステムと強固にリンクしている。サブ衛星と連携することで属性力エレメーラ探査器サーチヤーの精度を上昇させ、瞬時にエレメリアン出現を探知する。平時は、幼い子供たちの健すこやかな生活を見守る。

【アンチアイカリペアードシステム】　ＢＡＮＺＯＫＵの攻撃で破損した箇所を特定し、半自動で修復する。

【アンチアイカシステムＥＸシリーズ】　基地内部に特化した対ＢＡＮＺＯＫＵ用迎撃装置。制作者が身体からだを張って獲得したＢＡＮＺＯＫＵの格闘データを集積し、防御システムを構築。また、最適な攻撃システムも自動で選択する。

【アイカアストラルアタック（ＡＡＡ）システム】　基地の任意の位置で展開するスピーカー。ＢＡＮＺＯＫＵの最大の弱点である貧乳を瞬時に、かつ的確に罵ののしることができる、肉体ではなく精神への攻撃に重きを置いたシステム。

「何で後半あたしの対策ばっかになってんのよおおおおおおおおおおお!!」

「匿とく名めいで説明したのにあっさりバレたおあああああああああああああああああ!!」
　モニターに映し出された説明文を律儀に一通り読み終わった後──「さて」と言わんばかりに仕切り直し、己自身という名の最強の迎撃システムを以もつてトゥアールへ颯さつ爽そうと襲おそいかかる愛あい香か。
　システム名が全く匿名じゃないから、そりゃバレるよな……。説明文の特定の単語も、申し訳ないが愛香以外に心当たりがないし。
「制作者紹介からして不幸の手紙みたいなしょうもない文面で、どうしてくれんのよ、あたしも見ちゃったじゃない!!」
「さては脳内で私にいやらしいことをしましたね!?　肖像権の侵害で訴えましゅごああああああああああ!!」
　問題は、いたずら目的の不幸の手紙と違い、三日というリミットを待たずして確かに大変なことになっている点だ。……トゥアール自身が。
　愛香の言う通りこの説明文、基地が完成して一番最初に来たその日に見せてもらった時とは、色々変わってるな。特に後半の説明。
　おそらく、本来する必要のなかった内側からのテロ対策を迫られ、バージョンアップしたのだろう。
「基地の内部、半自動修復してたんだなあ……」
　しみじみと呟つぶやく。
　愛香とトゥアールの喧けん嘩か場所ベスト３に入るここが、いつも真新しいことに合が点てんがいった。そのシステム、同じくベスト３に入ってる俺の部屋にもつけてくれないかな……凄すさまじい頻ひん度どで破壊されるから……。

　見み逃のがしてしまいそうだったが、基地の名前を初めて目にしたことにも気がついた。
「この基地って、アイノスって名前だったのか。由来はあるのか？」
　とても優しい、いい語感だと思う。
　システム化するまでもなく自らの肉体も半自動修復されるトゥアールが、けろっとして立ち上がりながら、嬉うれしそうに俺に歩み寄ってきた。
「ヒントは、『総そう二じ様とトゥアールちゃんの』と前につけると……うふふっ、これ以上は秘密ですっ」
「わからいでか、何が愛の巣じゃアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
「追加攻撃てんどんッッ!?」
　このように、愛香とトゥアールは昼夜、場所を問わずじゃれ合っている。
　学校内で生徒たちがこの光景にとうの昔に慣れているのは言うに及ばず、最近は通学路でマダムたちもすれ違いざまに微ほほ笑えみかけてくれるようになってしまった。
「そうそう、最後の方に書いてるＥＸとかいうやつ、あたしが片っ端から見つけて壊しといたから文面修正しといた方がいいわよ」
「……どうりで……基地が私を守ってくれない……と……」
　トゥアールの無念の声も、くぐもって聞こえる。首から上が天井に突き刺さっているので無理もない。
　野生の勘で本来不可視のはずの設置位置を察知して、自動防衛システムを次々に潰してたのか、愛あい香かは……。
「ギガレイヤースチール……ふむふむ」
　慧え理り那なもすっかり二人のじゃれ合いには慣れてしまい、微笑ましく見守るようになったため、シーズンが終わってプラグから外された

エアコンのコンセントのようにトゥアールが天井から垂れ下がっていても特に何もリアクションはせず、基地スペックの暗記に夢中だ。
　ヒーローのスペックや設定の丸暗記は、慧理那の特技だという。
　特に好きなシリーズ物に限って言えば昭和から逆算し、ジャンプ力やキック力といった細かい数値から個々の必殺技の名前に至るまで、全作全登場人物のデータを暗記しているらしい。頼もしい限りだ。

　慧理那はこの基地が破壊されることを危き惧ぐしていたが、もしそれがあるとしたら、極大化した二人のじゃれ合いによって、内部から自壊する結末なのではないだろうか……。

　　◇

　社会科見学よろしく引率のトゥアールの後に続きながら、基地内部の説明を受ける。
　コンソールルームを一歩出た先は、知らないうちにどんどん新しい機能や設備が拡張されている。一度説明を受けているといっても油断はできない。
「この基地そのものが、人間に限りなく近い思考ロジックプログラムで制御されていますので、私と一緒に考え、拡そ張だっていくんです。演算速度はこの世界最高のスーパーコンピュータ八〇億台分に相当します」
　慧理那と一緒に、俺も感嘆の声を上げる。
　俺も男だ、こういうわかりやすいスペック比較には心惹ひかれるのだ。
「もっとも今は、その思考リソースのうちの半分近くは、愛香さんへの対策に割かれていますけどね」

　えへへ、と悪戯いたずらっぽく笑うトゥアール。
　……俺の幼馴染おさななじみって、スーパーコンピュータ四〇億台分フル回転させて対処しないといけない女の子だったの？
「そんなことしてる余裕があったら全部エレメリアン用に割り当てればいいでしょーが!!」
「プログラム自身が決断したので、私には止められないんです!!」
　エレメリアン打倒のために作られた高度な自動思考プログラムが、その半分ものリソースを愛あい香か対策に割いたのか……。あくまでコンピュータの独自の判断だとはいえ、全エレメリアンと対等の脅威を自分一人に抱いだかれてしまったという事実を、愛香はもう少し重く受け止めてはくれないだろうか……。

「この先突き当たりが、私の自室と、隣接して研究室ラボがあります。日夜、エレメリアンや愛香さんを倒すための研究をしているんですよ！」
「わあ」
　トゥアールの自信たっぷりな説明に、ぱあっと顔を綻ほころばせる慧え理り那な。手放しで感心していい台詞せりふだったかなあ……。
　横を窺うかがうと、愛香はケロッとしている。
　困ったことに、好敵手の存在に喜ぶやつだから、悪戯いたずらはともかくトゥアールが自分を倒そうとしていること自体は喜んでいるフシさえあるんだよなあ、愛香は……。
　コンピュータに危き惧ぐされることは、何だそれと反発はしても、自分に向かってくること自体は歓迎する、というわけだ。
　こういうのも、複雑な乙おと女め心、というのだろうか。
「そうだ、私の部屋を見ていきませんか、総そう二じ様？　内側から八重の電子ロックとかかけたりしませんから！」

いいことを思いついた、とばかりに手を叩たたき、トゥアールが俺の上着の袖そでを引っ張る。
「うーん、でも女の子の部屋に……」
「私のおっぱいと同じ柔らかさのクッションがありますよ！」
遠えん慮りよする俺を余よ所そにスライド式のドアが開き、トゥアールの部屋が目に飛び込んできた。
科学者らしく、様々な実験器具が満載の部屋を想像していたのだが、それは隣接している研究室にしっかり整理されているのだろう。
すっきりとまとまっていて、自己主張しすぎないお洒しや落れな小物やインテリアでまとめられた、綺き麗れいな部屋だった。女学生というより綺麗好きのＯＬさんを想像してしまう。俺たちと同い年なのに大人びた雰囲気の、トゥアールにピッタリの部屋だ。
「ほら、このクッションです！」
部屋の中央から持ってきたクッションが、俺に手渡される直前──愛香が俺の肩を掴つかんで阻んだ。
「このクッション、あたし触ったことあるけど……大した触り心地ごこちじゃなかったからスルーしていいよ、そーじ」
「おっぱいピラミッドの最下層どころか下降しすぎて地球のマントルまでブチ抜いた貧乳が何でそこまで上から目線なんですか⁉　負け惜しみにしては言われたこちらが哀しくなるんですけど⁉」
トゥアールの叫び声が廊下にこだまする中、クッションは慧え理り那なの手に委ゆだねられていた。
「わぁ……」
クッションを両手で弄もてあそび、その感触に驚嘆する慧理那。
そして自分の胸にそっと手を触れ……ううう、と呻うめいていた。
そんな慧理那を見た瞬間、自らも基地同様リペアードシステムが発動したのか、トゥアールは大ダメージをものともせず完全回復していた。

　さらに通路を進み、横開きの大きめな扉の前に立つ。
「そしてここがトレーニングルームです。スポーツジムと同じように、トレーニング機器、プール、スパを完備しています。お好きな時に利用してくださいね」
「………………え、ええ！」
　慧理那のツインテールの遠えん慮りょ具合を見て、気を使っているのがわかった。
　あれは多分、自分の家にもプールやジムがあるんだろうな……。
「総そう二じ様にもご利用をお勧めしていますのに、いつも愛あい香かさんが邪魔するから……」
　ジト目で愛香を非難し、口を尖とがらせるトゥアール。
「あんたのテリトリーでそーじをお風ふ呂ろになんて入れられるはずないでしょ!!」
　そもそも俺のテリトリーであるはずの自宅もどんな状況下にあるか、さっきコンソールルームで片へん鱗りんを垣かい間ま見てしまったんだが。
「はい、慧理那さん。この機会に、トゥアールちゃん特製トレーニングウェアを差し上げますね。サイズは完かん璧ぺきにピッタリで、慧理那さんにジャストフィットですので！」
　スポーツジムの初回見学特典のようなノリでトゥアールが慧理那に渡したのは、レオタードタイプのトレーニングウェアだった。テイルイエローに合わせてか、薄黄色を基調にしている。
「ありがとうございます、トゥアールさん」
　何な故ぜサイズが完璧にピッタリでジャストフィットなのか……深く考えると恐ろしいが、慧理那は疑いなく受け取った。
「ほんの少しの発汗でめっちゃ透けますので、総二様と一緒にトレーニ

ングする時とかに最適ですよ！」
「……え」
　何故かうっすらと口角が上がる慧理那。
「あんたはそーいうしょうもない発明ばっかしてる暇ひまがあったらもう少し世のため人のためにその頭を使ったらどうなの⁉」
「人類の科学技術は、戦いとエロの双そう璧へきへの探求と共に発展してきたんです！　私のスタンスは人類史から見ればむしろ非常にオーソドックスじゃないですか‼」
「よいしょ…………会長！　そんなの突っ返しちゃっていいんだよ⁉」
　ピンと背はい筋きんを伸ばさせたトゥアールを担かついでバーベル上げ下げ運動をしながら、愛あい香かは慧え理り那なにクーリングオフを促うながした。かけられる側も呼吸を合わせてはじめて成立する高度な技は見事だが、あれはトゥアールにダメージはあるのか？
「い、いえ……いただいておきますわ。せっかくのプレゼントですもの、大切にします」
　ちらちらと俺の方を見ながら、慧理那はトレーニングウェアを抱き締めた。
　少し汗をかいたら透けてしまう服………トレーニングでは使いづらいと思うんだけど……。

『やめるんだ、貧乳！　暴力はいけない！　その胸と同じように、真まっ直すぐに生きようじゃないか‼』

　天井からスピーカーが出現し、熱血ヒーローじみた合成音声で愛香を糾きゆう弾だんした。そして、力強く改心を促す。
「よ、よく言いました……！」
　あの疑似バーベル技は傍はたで見ているよりダメージがあるらしく、

息も絶え絶えに自身の作品を讃たたえるトゥアール。
　あれが説明の最後にあった、ＡＡＡアイカアストラルアタツクシステムか……。
「言われなくてもあたしは真っ直ぐに生きてるわ！」
「その胸と同じく――――」
　渾こん身しんの宣言にベストタイミングで続いたトゥアールの合いの手も虚むなしく、愛香によるバーベルの投とう擲てきにより、ＡＡＡシステムの一つはあっさりと破壊されてしまった。
　合成音声の訴え一つで愛香が心変わりするのなら、この基地もここまで自己修復と進化を繰り返しはしなかっただろう。

　俺たちにも見せられないらしい開かずの間をちょくちょく挟みつつ、基地案内は続く。
　ふと思い出したように、トゥアールが提案した。
「そうそう、ここまで色々機能を紹介してきましたが……他にこの基地に何か必要なものがあったら、どんどん言ってくださいね、何でも作りますから！」
「必要なもの……？」
「ええ、未み春はる将軍の希望で作った設備もすでにいくつかあるんですよ！」
「面倒でも、できれば俺に報告してくれると助かるな、そういうのは……」
　これからさらに基地を案内される中に、それはあるんだろうか。
　俺の不安を余よ所そに愛あい香かは腕組みして苦笑し、
「映画館作ってって言ったら作ってくれるわけ？」
「映画ならコンソールルームのモニターをシネマモードにすれば３Ｄでも楽しめますが、専用の部屋が必要でしたら」

　冗談半分の発言をあっさりと返され、愛香は呆あきれていた。
「そういえばたまにあそこで映画観みてたわね、あんた……」
「現存する映像作品はだいたい購入済みです。愛香さんも一緒に〝パッケージだけ気合いの入ったどこかで見たようなディザスター映画シリーズ〟をノンストップで一〇〇時間ぐらい観ますか？」
「イメージで勧めないでよ、こう見えてもあたし、映画は恋愛モノばっか観るんだから」
　照れくさそうに頬ほおを掻かく愛香。
　瞬間、突とつ如じよとして壁や天井がパネル状に開き、中から無数の銃機器が展開して愛香へと砲口を定めた。
　トゥアールははっとして、
「基地のプログラムが脅威を覚えて自己進化しちゃったじゃないですか、何でそういうホラーな発言をするんですか愛香さんは！　恋愛映画からもっとも遠い、痛快殺人鬼アクションのモンスター役のくせに!!」
「それはこんな感じかしら……？」
　モンスターによる痛快殺人鬼アクションの実演が始まった。
　チェーンソーや斧おのといった武器の代わりに愛香に振り回されるトゥアールによって、自己進化した基地の防衛システムが今またスクラップへと帰していく。
　ＣＧ全盛時代に役者が肉体のみで紡つむぎ出す至高の映像美を見つめながら、慧え理り那なはぽん、と手を叩たたいた。
「ノンストップ鑑賞会でしたら、わたくしのコレクションの特撮ヒーロー劇場版シリーズを皆さんと一緒にしたいですわ！」
「あ、ああ」
　慧理那はやっぱり、ヒーローものの劇場版がメインのようだ。
　俺は無難に大作アクション、愛香が恋愛モノ、トゥアールはＢ級パニックが好みで、慧理那は特撮ヒーロー映画。けっこう好みが違うもの

なんだな。
「どーしてところどころで乙おと女めぶりたがるくせに腕力という最大の弊へい害がいを封印しようとしないんですかこの蛮族はああああああああああああああああ!!」
「あんたは人より頭がよすぎるからＢ級をあえて好む……同じことよ！　結局人はフィクションに、自分にないものを求めてしまうものなのよ!!」
「悔しい！　愛あい香かさんごときに私自身もよくわからないでいた好みのジャンルの理由を看かん破ぱされて悔しい!!」
　そして、そろそろ止めた方がいいだろうか。自慢のムービーアーカイブに自ら主演となって加わりそうな、目の前で撮影中の映画を。

　トゥアールの案内で何回か角を曲がって廊下を歩いていると、途中から回廊そのものが禍まが々まがしいフォルムに変質し始めた。
「おわっ……!?　何だ!?」
　近代的な雰囲気をまとっていた乳白色の壁は、グラデーションで静脈血のような赤黒さへと変わっていく。同時に、踏み進む足への負担がまるで考慮されない、人里離れた洞穴のような角張った床が現れた。
　所々から怪物の角つののような棘とげが屹きつ立りつし始め、やがては色だけでなく壁の模様までもが、張り巡らされた静脈のようなおどろおどろしい網目となっていく。
　その果てに目の前に現れたのは、重厚かつ巨大な門だった。
「な、何だここは……」
　科学の粋すいを結集したオーバーテクノロジーの塊かたまりである基地の只ただ中なかで、この異質。
　長きにわたり生者を拒こばみ続けた地獄の入り口に、生命あるままに初めて訪れたような緊張感を覚える。

「あ、開けてよろしいですか？　トゥアールさん」
　トゥアールの首しゆ肯こうを確認し、おそるおそる扉に手を触れる慧え理り那な。
　彼女の細腕で押しただけで、そのいかにも重量のある門はあっさりと、しかし勿もつ体たいつけたようにゆっくりと開き始めた。
　錆さび付いた音だけが、人工的に用意されたような不自然さで鳴り響いている。
　地上からの光がおこぼれで差しているだけの、地獄を再現した世界。
　室内からは、そんな印象を受ける。
　入り口から生物の生皮で編あまれたかのようなおどろおどろしい絨じゆう毯たんが一直線に延び、その果てには、数段の階段で底上げされたスペースに建こん立りゆうされた、巨大な玉座があった。

「――ついに、ここまで辿たどり着いたのね」

　肘ひじ掛けに肘を預け、退屈そうに顔を手にもたれさせていた何者かが、俺たちへ向けて不敵な賞賛を投げかけてきた。
　特に障害も無く、俺の自室から逆算しても徒歩十数分で辿り着けるラストダンジョンで待ち構えていた黒幕は―
「何やってんだ、母さん……」
　悪の女幹部コスに身を包んだ、俺の母さんだった。
「……つまり、ここ、未み春はるおばさんの趣味で作ったってこと？」
「自分の胸と同じように平らな壁をぺたぺたと触りながら、愛あい香かはそう呟つぶやいた」
　疑問に答える代わりにモノローグのように補足したトゥアールを、腕力で壁に塗り込める愛香。
「つーかここ、母さんの提案で作ったって……女幹部ごっこのためだけ

にしちゃ、大がかりすぎるだろ⁉」
「私のためだけじゃないわよ」
　母さんは人差し指をピンと立てて得意げに答えた。
「テイルギアは精神力をエネルギーにして稼働する装そう甲こうでしょう？　だったら、常に心身ともに穏やかでいられるよう、リラックススペースが必要だと思って。みんなのために、トゥアールちゃんに作ってもらったの！」
　ヒーローなどに代表される非日常に憧あこがれて育った俺の母さんは、発想が一般人のそれではなく、戦闘やオプショナルパーツの開発などにあたって的確なアドバイスをすることが多い。
　自らの夢や願いを臍へその緒おを通して俺に託したと語ったものの、ご覧の通り今でも大半は母体に残留しているようだが……。
「俺たちじゃなくて、完全に母さんのためだけのリラックススペースだろ、ここ……」
　マントを翻ひるがえし、玉座から立ち上がる母さんへ、か細い不服申し立てをする。
　その時、玉座へと続く絨じゆう毯たんの半ばへと小さな影が躍り出──そして、叫んだ。

「テイルオン！」

　この部屋に入ってから若干うずうずしているように見えた慧え理り那なだが、予感は的中し、母さんの眼前でブレスをかざして変身してしまった。
「確かにとても素敵な気分転換になりますわ、ここでならいつでも最終決戦の雰囲気を堪能できますもの‼」
　少し大人びた声に変わった慧理那だが、発言内容に変身前後の差はな

い。
「でしょう慧理那ちゃん!?　――いいえ、テイルイエロー!!」
　そしてヒーローごっこにつき合ってあげる優しい親御さんの雰囲気を醸かもし出しつつその実自分が一番楽しんでいる母さんもノリ始め、二人はしばらく口上の応酬をしていた。
　ああ、少なくとも慧理那のリラックススペースとしては機能するのか、ここ……。
　それを見つめながら、愛香は冷静に突っ込んだ。
「……おばさん、あたしたちが来るまでずっとあそこで待ってたの……？」
「基地の案内をするということだけお伝えしたので、先回りしていらしたのでしょう」
　……うちの喫茶店、今営業時間のはずなんだけどな。
「でも、おばさんの『リラックスが必要』ってアイディアは、正しいと思うな」
　愛あい香かがノリノリの二人を見つめながら呟つぶやく。
　確かにその通りだな、たまにはリラックスが必要だ。……常に闘争心が全開の愛香は特に。
「次来るまでにそういう休憩所のアイディア、ちょっとあたしも考えておくから。よろしくね、トゥアール」
「えええええええこれだけ基地にダメージを与えておいて普通にこれからも活用する気満々とか正気ですか!?　次の戦闘から愛香さんだけ歩いて出撃してほしいくらいなんですけど!?」
　基地拡張のアイディアか。せっかくだし、俺も何か考えておくか。
　次来るまでといいながら、すでに何か思いついているように薄く笑っている愛香が、妙に不安を煽あおるが……大丈夫だろうか。

第二話　ツインテール・メンテナンス。

　放課後、帰宅途中にトゥアールがエレメリアンの出現を探知した。
　桜さくら川がわ先生の運転する車で合流した慧え理り那なと一緒にトゥアールの転送ペンで基地に転送し、鞄かばんを置くなり即変身。
　かくしてツインテイルズは、最短の動きで現場に急行する。
　基地の転送ゲートから各地に点在する出現ポイントに飛び、そこからエレメリアンの出現場所に向かうのが基本だが……今回は、その出現ポイントから現場までかなり遠かった。
　こういう時便利なのが、フォースリヴォンを翼状のパーツに変形させて空を飛ぶことのできる髪紐属性リボンの属性玉エレメーラオーブだ。
「急いでくれ、ブルー……！」
　……ただし、属性玉変換機構エレメリーションを使うのが苦手な俺は、文字通りおんぶに抱っこなのだが……。
「だったら二人も髪紐属性リボン発動すればいいでしょ、何でいつもあたしが運搬役なのよー！　特にイエローは普通に使えるでしょ！」
「レッドが掴つかまるのならわたくしもそれに従わなければならないのですわ、はあはあ」
　俺はだいたいいつもサーカスの空中ブランコのようにブルーに手を掴まれて飛ぶのだが、今日はイエローがただ掴まるのではなく俺の腰に抱きついており、かなりバランスが悪い。
　航空力学的観点から考えれば、最悪のフォーメーションと言えるだろう。
　ブルーは諦あきらめ半分に溜ため息いきをつく。

　俺にできるのは、高空の厳しい風に負けず凛り々りしくたなびくブルーのツインテールと、はあはあしながらも気品を失わないイエローのツインテールを見守ることだけだ。
　すまん、ブルー。

　現場は猫との触れ合いをコンセプトにしたアミューズメント施設。
　その敷地内に着地し、エントランスへと走ると、そこにエレメリアンの姿があった。
　猫耳のヘアバンドをした従業員のお姉さんたちが数名、エレメリアンに迫られて困惑している。
「にゃーん」
　酒焼けしたおっさんのような野太い声を上げ、でっぷりとした猫を思わせるエレメリアンが仰あお向むけに地面を転がる。
　……何かあの仕草、見覚えがあるぞ……。

「そこまでですわ、エレメリアン！」
「むっ、何なに奴やつ⁉」
　一見完全降伏のポーズだが、腹を天に向けたままエレメリアンは威勢よく問い返してきた。
「ツインテイルズ参上です‼」
　特に前準備もなかったので俺とブルーはイエローの構えに合わせられなかったが、とりあえずエレメリアンの注意を引き付けることはできた。
　被害に遭いそうな人を逃がすのが、現場に到着して何よりも優先的にやるべきことだ。自分たちに注意を向けるのが一番手っ取り早い。
「ほっほおおお猫耳が似合いそうな幼子！」
　猫のエレメリアンは俺の姿を認めるや、巨体を存分に飛び跳ねさせて

喜びを表した。
「テイルレッド、お前には名乗ろう！　俺は猫耳属性キヤツトのキャットギルディだ!!」
「……それ以外の名前だったら逆にびっくりだよ」
　そもそも何な故ぜ俺にだけ名乗る。
「さあおいでおいでテイルレッド、素敵な猫耳を授けようぞ!!」
　猫がちょいちょいと手を振って人間を呼ぶ。今の状況はシュールすぎて俯ふ瞰かんしたくない。
「何言って……」
　俺の言葉を遮さえぎるように、数名の女性が近寄ってきた。
「見たーい!!」
「つけてつけて!!」
　早く避難して欲しいのだが、従業員のお姉さんたちが何かを期待している。
　ブルーが前に進み出ると、お姉さんたちは惜しい、とばかりにぞろぞろと退避していく。
　現場に残ろうと粘る人に凄すごんで強制的に避難させる……汚れ役をブルーは買って出てくれているのだが、どうも一般人も報道などでその様子を見ているせいか、慣れ始めてる気がする。
　しかし、キャットギルディか……属性とモチーフが完全に一致しているのは、ラビットギルディ以来だな。
　俺ににじり寄って来たキャットギルディはブルーの姿に気付き、恐れ戦おののいた。
「ひいいっ!?　貴様、タイガギルディ様の仇かたき、テイルブルー!!」
　やっぱり、あの仰あお向むけのポーズはタイガギルディ直伝か。タイガギルディは自分を補充部隊の隊長みたいな話をしていたが、その部隊の戦士だろうか。

「……タイガギルディ？　いたっけ、そんなの」
　ブルーが首を傾かしげる。
「お前が倒したスクール水着の属性の奴やつだよ‼」
　口上など随分と勿もつ体たいつけていた割りに、ブルーが速攻で倒してしまったが。
「スクール水着……ああ、あの属性玉エレメーラオーブ、結構便利だよね。地面とか泳げて」
　対戦相手と記憶することなく、自分が使用する能力として認識している……。
　こんな非情さをまとわなければ、戦いとはできないものなのだろうか。
　キャットギルディは覚悟を決めたように、ブルーの前で深く腰を落とし、構えた。
「……フ、フン、テイルブルーよ。いかに修羅といえど所しよ詮せんは貴様も女。本能には抗あらがえまいて、クックック」
「な、何する気……許さないわよ⁉」
　何な故ぜか頬ほおを赤らめて後あと退ずさるブルー。
『また始まりましたねむっつりさん。エレメリアンは人間のカラダなんかには興味ないって何度言えば……ブルーはエクセリオンショウツを変な使い方してそうで困ります』
　トゥアールが通信越しに呆あきれているようだが、ブルーはじりじりと後退る。
　キャットギルディは俊敏な動きでブルーとの間合いを詰めると、不敵な笑みを浮かべてしゃがみ込んだ。
「ひゃあっ⁉」
　珍しく可か愛わいらしい悲鳴を上げ、咄とつ嗟さに自分の身体からだを掻かき抱いだくブルーだが──

「ごろにゃーん」
　キャットギルディは、ブルーのテイルギアの爪つま先さきに尻しりを擦こすりつけ始めた。
「…………」
　身体からだの強こわ張ばりを解き、入れ替わりで顔を強張らせていくブルー。
「うおらああああああああああああああああ!!」
「にゃうううううううううううううううううん!!」
　ブルーの凶器つきブーツでの蹴けり上げを、間一髪で回避するキャットギルディ。
「ぬううううう、少女ならば誰だれもが頬ほお緩める愛らしき子猫の顔面をサッカーボールキックとは……聞きしに勝る蛮性！　そこまで女を放棄していたか、テイルブルー!!」
「あたしだって子猫なら撫なでるわよ！　どのツラ下げてそんな図々しいことほざいてんのあんた!!」
　どのツラって、猫面づらだと思うが……。
　エントランスから本物の猫の鳴き声が聞こえ、視線を向ける。
　おそらく客寄せのためにだろう、見えやすいガラス張りのケージに入っている子猫たちが、カリカリと爪つめを立てて脱出を懇願しているようだった。
　戦いが終わった後、ブルーに撫でられるのを恐れるかのように。言葉わからずとも、本能で危険を察知したのだ。心までは飼い慣らされていない、という猫科の矜きよう持じを感じる。
「猫耳より鬼の角つのが似合いそうな貴様に用はない!!」
「地球の裏側までシュートされたいのあんた!?」
　ブルーとキャットギルディの言い争いは続いている。
「……何やって……」

　ふと足に目をやると、イエローが自分のお尻しりを俺の爪つま先さき付近にちょんちょんと当てていた。
　言葉を失う俺を振り返るイエロー。とろけた目が見つめてくる。
　誰でもいい、こんな時どんなリアクションをすればいいのか教えてくれ。

「ええい、お前の相手をしている暇ひまはない！　さらばだ、テイルブルー！」
　戦士としての気概溢あふれるエレメリアンたちは、戦闘中に逃走することは滅多にない。
　おそらく俺たちに、というかテイルブルーに構わず別の場所で作戦行動を続行する、仕切り直しの退却だろう。
　キャットギルディは軽やかにジャンプし、空高く舞い上がった。
　しかし、ブルーはそれを許さない。
「属性玉エレメーラオーブ――兎耳属性ラビット」
　ジャンプ力の強化を発動する兎耳属性ラビットの属性玉エレメーラオーブを使い、ブルーが砲弾のように跳躍する。
　滞空しているキャットギルディに空中で追いつき、その無防備な足首をむんずと鷲わし掴づかみにした。
「にゃ――――――――――――――――っ!?」
　そして力任せに放り投げ、地面に叩たたきつける。
　アスファルトが砕け、破片がまたたびのように宙に舞った。
　キャットギルディの眼前に着地し、ゆっくりと歩み寄るブルー。
「ぐわーっ、よせ、一旦落ち着くのだ、話せばわかる!!」
　異形の怪人が、尻しり餅もちをついて命乞いをしている。
　ブルーはわかったわよ、とばかりに警戒を緩め、リラックスした態度を見せる。

　……と思ったのも束つかの間ま、即座にフォースリヴォンを叩いてウェイブランスを出現させ、頭上で一旋して構えた。
「完全解放ブレイクレリーズ！」
　穂先の展開したランスから放たれた水流が、結界となって敵を捕縛する。
　わかったわよ、楽にしてあげる、の「わかったわよ」だったのか。
「にゃにゃん!!」
　オーラピラーで拘束バインドされ、キャットギルディが野太い呻うめき声を上げげた。

「エグゼキュートウェ――――――――――――――――ブッ!!」

「テイルレッドよ、そのリボン……あと一工夫で猫耳にきっとできる！　きっとだ!!」
　キャットギルディはそれだけ俺に伝え残すと、為す術すべもなく爆散した。

　結局何の出番もなく終わってしまった。俺はイエローに帰ろう、と言おうと振り向いたのだが……イエローは、エントランス横の特設コーナーに目を向けていた。
　そこでペット用品を販売しているらしい。猫のイラストにフキダシで「ご主人様、ちゃんとトイレできるか見てて欲しいにゃん！」と書かれている。いや、それは困るにゃん。
　今日の戦いでイエローがまた妙なアクションを習得してしまったし、後々不安だ。
　爆炎の前に佇たたずみ、属性玉エレメーラオーブを受け止めるブルー。

さっきのお姉さんたち、ブルーが真骨頂を発揮した最後まで見てたら、絶対ダッシュで避難してただろうな……。
そしてエントランスに見える猫たちは、恐怖で愛らしい笑顔を忘れてしまっていた。
今見たことは忘れて、明日からまた人々に笑顔を届けてくれ……。

◇

キャットギルディとの戦いの翌日。今日は、テイルブレスの定期メンテナンスを行う日だ。
テイルギア──俺たちがエレメリアンとの戦いでまとっているこの装そう甲こうは、異世界の超技術とトゥアールの想いの結晶だ。
属性力エレメーラ防衛のための戦闘の要かなめであるテイルギア──それを生み出すテイルブレスは、万全の状態を維持すべく、定期的にメンテナンスが実施されるのだ。
帰宅後、地下基地メインルームに集合した俺と愛あい香か、慧え理り那なはテイルブレスを外し、トゥアールへと託す。母さんもやはり普通に合流してきた。
ひとり、部屋の隅にあるメンテナンスブースへ移動するトゥアール。
作業が終わるまで、俺たちは中央のテーブルに腰掛けて談笑する。慧理那や母さんは、壁の大モニターに矢や継つぎ早ばやに表示されては消えていく難解な文字列やワイヤーフレームを、興味深げに見守っていた。
「う～ん……」
部屋の隅にあるメンテナンスブースから、腕組みをしながらトゥアールが戻ってきた。
「終わったのか？」

　俺が声をかけると、はい、と頷うなずきつつも、トゥアールはほぼ同時に軽く溜ため息いきをついた。そして大モニターを背に、口を尖とがらせる。
「……愛香さんは、いつもテイルギアの使い方が乱暴すぎます！」
「え、あたしだけ？」
　俺や慧理那をちらりと見て、不思議そうにする愛香。
「これを見てください！」
　モニターにも操作端末にも背を向けたまま、後ろ手で易やすタ々やすとタッチタイプ。画面にいくつか新規ウィンドウを表示させるトゥアール。
「ブルーのテイルギアですわね。……まるで、レントゲン写真のようですが」
　慧理那の言うとおり、表示されたのはテイルギアに焦点を当てたレントゲン写真のような映像だ。大小様々なウィンドウに、愛香の生身の部分を黒くして表示したブルーのテイルギアが次々と映し出されていった。
「愛香さんの体をシルエット表示にすると、胸部アンダースーツの直線っぷりがより強調されて恐ろしいですね」
　神妙な表情はそのままに、いつも通り即座に話が脱線する。
　トゥアールが「ね」、と言い終わるが早いか一足飛びで襲おそいかかり、さらなる恐ろしさを叩たたき込む愛香。
〝テイルギアの使い方が〟乱暴すぎる、とトゥアールは抗議したが、その部分を丸々取っ払っても成立するのが恐ろしい。あ、俺も恐ろしいと思ってしまった。
「よく見るとブルーのテイルギア、所々に細かいヒビが入っていますわね」
　小さな身体からだを乗り出してモニターにかじりつく慧理那。映像

データが拡大表示されていてなお、言われなければ気付かなかいほどの各部破損を、次々に見つけて指摘した。
「要するに、あたしの使い方が荒くてブルーのテイルギアが壊れそうになってるってこと？　それは悪いと思うけど……」
　バツが悪そうに頬ほおをかく愛あい香か。
　決して風化させまいと何度もトゥアールが語っていることだが、愛香は初めて変身した時もトゥアールをブッ飛ばしてテイルギアを強奪したらしい。一応その負い目はあるのか、テイルギアに対するアドバイスなどは素直に受け止めるようだ。
「テイルギアって、ある程度のダメージは自己修復できるんでしょう？」
　愛香をフォローするように、普通の主婦は口滑りよく出てこない単語を易やす々やすと出してくる母さん。トゥアールもさすがにそれには同意できずにいた。
「そうですが、それも限度があります……」
　テイルギアの大きな特徴の一つとして、変身時に毎回ゼロから瞬時に生成されるという点が挙げられる。
　ヒーロー番組などではさも常識のようにスルーされているこの瞬間生成という技術だが、いざ自分たちが使用するとなると、どれだけ常軌を逸した技術なのかを実感する。
　戦国時代の武将も、西洋の騎士も、現代の特殊部隊隊員も、要事には甲かつ冑ちゆうや鎧よろいや装備を着こむが、それらはその都度着脱することが必須。
　保管・運用・維持という作業が不可欠なわけだが、本来ならばデメリットと呼ぶことも憚はばかられる「あって当然」のそのリスクを、瞬間生成技術は容た易やすくクリアしてしまう。
　自己修復もその産物なのだろうが、形状記憶にも上限はあるというこ

とらしい。
「特にウェイブブランスはかなりダメージが蓄積されているようです。次に幹部級の強敵と戦ったら、それこそ粉々に砕けてしまうかもしれませんよ」
　武器が完全破壊された場合、変身し直せば修復されているのだろうか……。さすがにその質問は飲み込んだ。そこまで万能ならば、メンテナンス作業自体不要のはずだ。
　仮に再変身すれば修復されるとしても、俺たちは──特に俺はだが、敵の前で変身解除すること自体に致命的なリスクがある。それは選択肢に数えるべきではないだろう。
「大丈夫よ、その時は素手で戦うから」
　愛香は武器を失うという窮地を想像しても、あっけらかんとしている。
「はあ、もう愛香さんに言うことはありません。戦闘中にテイルギアが壊れても自己責任ですからね」
「……いや、感謝はしてるのよ？　思いっきり戦えるのはあんたのおかげなんだから」
「愛香さん。自己責任と言いましたけど……戦闘中にギアが壊れて戦えなくなった時、総そう二じ様や慧え理り那なさんの足手まといになって悔しい思いをするのは、あなたなんですよ」
　いつになく真剣な眼まな差ざしで見据えるトゥアール。さすがの愛香も深く反省したようだ。
「トゥアール……ごめん……」
「少しでも反省しているなら、今夜はゆっくり休んでください。絶対に夜中起きず、しっかり身体からだを休めてくださいね。精神の休息が、余裕のある戦いに繋つながります」
「……うん」

　素直に頷うなずく愛あい香か。

（やべえこの女ちょれえ）

「聞こえてるわそーじの部屋に忍び込むつもりでしょうがああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
「なんで聞こえてるんですか漫画ならベタフラッシュで囲んでいるような心の声がああああああああああああああ!!」
　愛香の攻撃で、トゥアールの周囲にベタフラッシュのホワイト部分だけのような打撃痕がチカチカと刻まれる。
　慧え理り那なと母さんは、トゥアールと愛香のじゃれ合いを見てうふふ、と笑う。
　つられて俺もうふふ、と見守っておく。
「くっ……私の発明をいつも便利がっているくせにこの扱い！　愛香さんが入った時だけシャワーの水圧が四〇倍になるように基地のトイレを改造しておいちゃいますからね!!」
「じゃああんたにはそんな回りくどいことしないで直接……！」
　ぐわっと食ってかかろうとした愛香は、何な故ぜか途中で勢いを止めてしまった。
「……今条件反射でツッコもうとしたら思った以上に下ネタになりそうで、途中で取り下げたでしょう」
　真顔で愛香の肩を叩たたくトゥアール。
「分析するなーっ!!」
「ひどい！　普通に教えてあげただけなのにごあごごごご!!」
　流れるような連続技の只ただ中なかに晒さらされるトゥアール。
「……うぐぐ……私……アルティメギルとの長い戦いの中で数あま多たの変態を見て、倫理観も大部変わりました……。その上で初めてエレメ

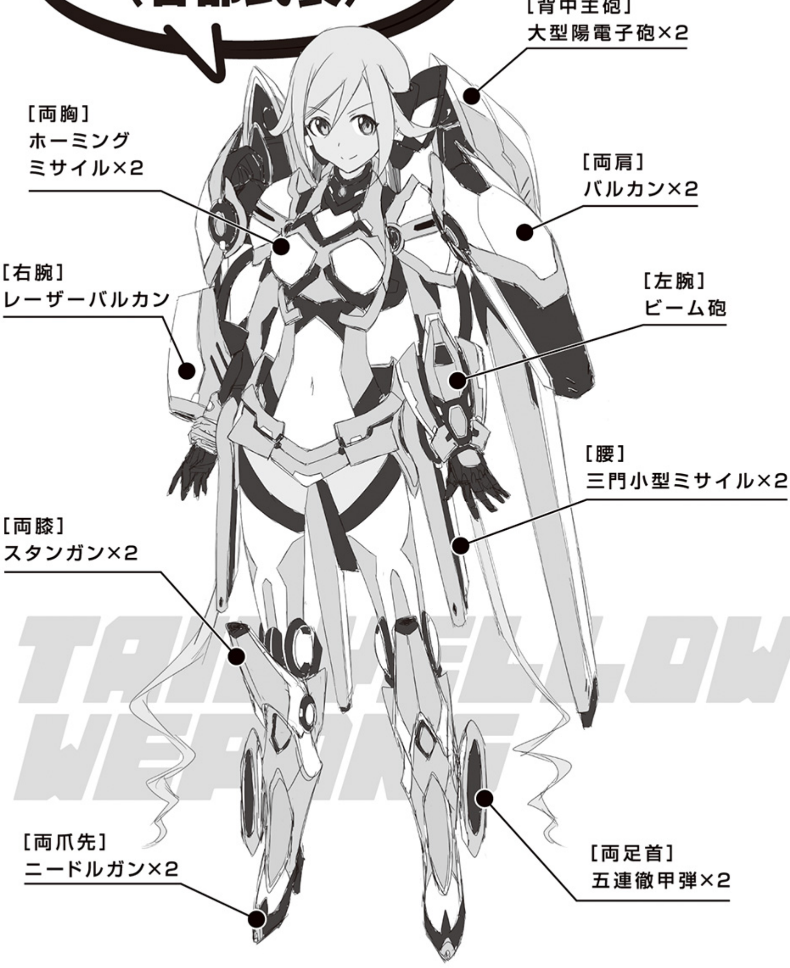
リアンよりひどい変態に巡り会いました！　愛香さん。そう、あなたです!!」
「こっちの台詞せりふじゃアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
「今回ばかりは殴なぐられても引きません輪をかけてこっちの台詞ですぅあああああああああああああああ!!」
　女同士の信念を懸けた戦いが始まってしまった。
　何で秘密基地の中で、世界の命運を懸けたラストバトルじみた雰囲気が形成されてしまっているんだ。
　確かに、腕力では比べるべくもなく愛あい香かに分がある。
　だが、引退したとはいえトゥアールは長き戦いの経験を背負った戦士。
　これは肉体の勝負じゃない、精神の勝負だ――。

「うぼおっ」
　ラストバトルが数分で終わった。
　ファイナルブローで天井まで舞い上がり、顔面から床に突っ込むトゥアール。スカートが捲まくれ上がって下着が丸見えになっている。
「ま、エレメリアンでさえ尻しつ尾ぽを巻いて逃げようとするのにちゃんと真っ向からあたしと戦ってくれるから、トゥアールのそこはすごいと思うわ」
「どのツラ下げてほざきますかこの蛮族……」
　ツッコミまで愛香に似るのは、信頼の証あかし。信頼している者同士、過激なじゃれ合いもご愛あい敬きよう、といったところだが、トゥアールの体力が心配だ。
　テイルギアの前に、自己修復の限界を憂慮すべきはトゥアールそのものなのではないだろうか。

　医者の不養生とはよく聞くが、メカニック担当であるトゥアールもまさに、一番診断メンテナンスすべきは自分の身体からだだと思うのだが……。

テイルギア設定資料 EX01

テイルイエロー（各部武装）



この各武装の全展開に加え、右手にヴォルティックブラスターを持った状態で一斉発射するのが完全脱衣形態（フルブラストモード）である。
なお、両膝のスタンガンはフルブラスト時には小型の雷球に凝縮され発射される。

第三話　自分自身メンテナンス。

　この世界のいずことも知れぬ場所に存在する、秘ひ匿とくされた空間。
　世界の何なん人ぴとの目にも触れぬ、神秘の巨艦。アルティメギル秘密基地。
　その基地の最奥──神秘の深しん淵えんで、一人の少女が一糸まとわぬ姿で佇たたずんでいた。
　神秘の只ただ中なかで少女が白磁の裸身を晒さらす様は、神聖さを相乗させる。
　……はずなのだが……。
「ね、寝坊した……メガ・ネ、着替え出して……」
　年とし端はもいかない少女が、気け怠だるげに全裸で自室を闊かつ歩ぽしているだけだった。
　少女の名は、イースナ。
　アルティメギル首領直属戦士、ダークグラスパーである。
　彼女がこの基地に着任して久しいが、肩書きの厳おごそかさとは裏腹、自室ではあらん限りだらけまくっていた。
「ふわあ……」
「まーたえっちなゲームばっかして……夜更かしするからやで」
　穏やかに注意して近づく大きな人型ロボットは、彼女の相棒兼おかんのメガ・ネプチューン＝Ｍｋ．II。通称メガ・ネ。
　全裸のままバンザイをし、メガ・ネの手で着替えさせられていくイースナ。

そこに色気や艶つやなどはなく、教育テレビでお母さんの手を借りて初めてのお着替えに挑戦する幼子のような微ほほ笑えましささえ感じる。

「何回も起こしたんやで？　午前中はエレメリアンのみんなと会議の予定やからって」

「……眠りが、深かったの……。いい夢は滅多に見ないけど……今日は少し、夢見がよかったから」

押し黙るメガ・ネ。

イースナの夢見が悪いのは、メガ・ネも知っている。

彼女はまだ子供だが、とても複雑な環境にある。

自分なりの信念を持っての行動とはいえ、故郷を滅ぼした仇かたきであるエレメリアンとあえて行動を共にし、せめて自分の愛する属性だけでも護まもろうと戦士になったのだ。

吹っ切ったはずだが、今でも故郷のことを悪夢にみると言う。

だから、イースナにはたくさん友達ができて欲しいと思っている。

もちろんメガ・ネは、自分が一番の支えになりたいと常に願っているのだが──。

「そ、それで……どんな夢やったん？」

ブラを着け終わり、ジャージを羽は織おらせると、イースナはにへらっと笑った。

「私とテイルレッドが、幸せな家庭を築いてた……。赤ちゃんも生まれた」

「──え、どっちが産んだん……」

動揺したのか、普段は童女のような愛らしさのメガ・ネの声が、円熟した低音を帯おびる。

「テイルレッド……が、産んでた」
「あ、あぁ……そっか。レッドちゃん、おっきくなったんやねえ……」
「小ちっちゃいまま、だった」
　聞けば聞くほど積み重ねられていく背徳。
「………………うん……そか……。よかったなぁイースナちゃん……」
　幸せな夢に難癖くせをつけるほど、メガ・ネは無粋ではない。無粋ではないが……あのせいぜい小学校低学年程度の少女が母親になるというのは、いくら夢でもいかがなものか。
　もっとも、細かいことなど考えず家族の温かさを求めた夢だと考えれば、それをイースナが見たことは喜ぶべきだ。
　イースナが家族というものに憧あこがれていることも、メガ・ネは知っているのだから。



「そ、それで……トゥアールさんが、今になって、私に復縁を迫ってきた……。軽く修しゅ羅ら場ばった……」
「復縁て……トゥアールはんは、イースナちゃんが一方的に好き好きーしてただけやん……」
　おかんの優しさで極厚のフィルターに包まれた表現だが、イースナの一方的な好き好きーとは、法に触れるどころか貫ぬき手で突き刺すレベルの重度のストーキングを意味する。
　ともあれ上機嫌なイースナは、寝坊した分を取り返そうと、着替えも早々に神眼鏡ゴッドめがねのブリッジを指で押し上げた。
「……グラスオン……！」
　漆しつ黒こくの光流がイースナの全身を包み、群ぐん青じよう色のジャージが黒い装そう甲こうへと転てん遷せんする。
　屈強な怪人たちが恐れる麗うるわしの女上官・ダークグラスパーへの変身が、瞬時に完了した。
「家庭かあ……。イースナちゃんもいつか、彼氏とかできてまうんかなぁ……」
　イースナが男の子と楽しげに並んで歩いている様を想像したのだろう。嬉うれしさと寂しさが同居したように、しみじみと呟つぶやくメガ・ネ。
「おかんか貴様！　わらわがラブいのはテイルレッドじゃ、男などどうでもよいわ!!」
「でもイースナちゃん、長年大好きやったトゥアールはんからレッドちゃんに気持ちが移ったわけやし、いつか普通に男の子を好きになる可能性も……」
「それこそ夢にも等しき可能性じゃな。テイルレッドと同等の魅力を持った男など、この世に存在するはずもない」
　自分に言い聞かせているのか、それともメガ・ネを励ましているつも

りなのか。
「しょせん夢などすぐに忘れてしまう、その日のご飯のようなもの。いちいち明日の交友関係に悩んでも仕方ない、夢を食はみ、今日の愛に生きるのじゃ!!」
　少し寂しい割り切りだが、夢が一日の活力になるのはいいことだ。
「よし！　気合いも入ったところで、不ふ甲が斐いない部下どもめをビシビシとしごいてやるとするか!!」
　ダークグラスパーはメガ・ネを自室に残し、会議の行われる基地大ホールへと向かった。
　多くの戦士を率いる司令官とは、ただ戦闘力が強いだけでは務まらない。美しきツインテールのように心そのものを惹ひきつける、大きなカリスマ性が求められる。
　それがまだ不足しているダークグラスパーにとって、部下たちと交流を深めるのは大切な仕事だ。
　その一貫としてダークグラスパーは昨日、人間界で流行の兆きざしを見せているという「テイルレッドペロペロキャンディ」を買ってきて、エレメリアンたちにプレゼントしていた。
　テイルレッドを象かたどった五センチほどのキャンディなのだが、これが中々に出来がいい。ＳＤサイズにデフォルメされているとはいえ、ちゃんとテイルレッドに見える。
　それで英気を養わせ、そして自分への敬意を深めるという一石二鳥の作戦だ。
　大ホールのスライドドアを開けた瞬間、得も言われぬもあっとした空気がダークグラスパーに襲おそいかかる。
「ひいっ、何じゃこの不快指数二〇〇％の空間は!?」
　恐る恐る中に入るダークグラスパー。
　薄暗い部屋で、ホールの席に着席したエレメリアンたちは……厳おご

そかに己おのが手の平の上にテイルレッドペロペロキャンディを載せ、一心不乱に見つめていた。
「ふー、ふー」
「ぷふー……」
「ウツクシイ……ウツクシイ……」
　静まった部屋の中、荒い息遣いや野太い賛嘆が粛しゆく々しゆくと木こ霊だましている。
　昨日ここで皆に配ってから、今までずっとこうして眺めていたのだろう。
　だが、か弱きペロペロキャンディがこのむさ苦しさに耐えきれるはずもない。
　大ホールを包む不快な温度──男テンプラチャーは、じわじわと飴あめ細ざい工くを浸食していた。
　そこへ、ダークグラスパーが扉を開けたことでホール内の気圧が変化したのがとどめとなったのだろう。
　テイルレッドペロペロキャンディは一斉に融解し、戦士たちの手の平の上で水飴のようになってしまった。
「ウオオオオオオオオオオオオオオオ────────、テイルレッド─────ッ!!」
　エレメリアンたちは悲嘆し、手に残った水飴に頬ほお擦ずりを始める。
　後に残ったのは、顔面を飴でぬちょぬちょにした強こわ面もての怪人たちである。
「キモいわメルヘン筋肉ども──────────────────────────ッ!!」
「ぐわあああああああああおはようございますダークグラスパー様ああああ!!」
　属性力エレメーラで黒い旋せん風ぷうを巻き起こし、ホール内の戦士

たちへ喝かつを入れる上官。
　床に天井にと痛烈に叩たたきつけられるも、エレメリアンたちは快こころよい挨あい拶さつで上官を迎える。
「貴様ら、それで英気を養って鍛たん錬れんをしておけと言ったであろう！　一晩中凝視しておるなどとは、懐ふところの深いわらわでもドンドン引きじゃ!!」
「お言葉ですがダークグラスパー様、我われらエレメリアンにとって精神集中は立派な肉体鍛錬！　愛と、そしてまさに今胸に押し懐いだいた哀しみが、我らを強くしたことでしょう!!」
　最前列に座るエレメリアンが、べとべとの顔面でかっこいいことを言う。
「たわけ、密度の問題じゃ！　わらわとて今日も夢で精神トレーニングを完了しておるが、一晩でテイルレッドめをしかと妊娠出産させてきたわ!!」
　対抗意識を燃やして、できるだけ黙っておいた方がよい夢をガンガン吹ふい聴ちようしていくダークグラスパー。
「ぬうう、さすがはダークグラスパー様……危うく常識を疑う凄すさまじき蛮勇!!」
　よくはわからないが器の大きさの違いを痛感させられ、極めて粘性の高い顔面で驚きよう愕がくするエレメリアンたち。
「というわけで早速、誰だれぞ出撃じゃ！　わらわの未来の嫁は手て強ごわい、心して戦えい!!」
　自分の攻撃で部下を半死半生にしておきながら、出撃要員を募つのるスパルタ。
　未いまだ良好な関係にほど遠い上司と部下たちは、今日も世界の属性力エレメーラを狙ねらう。

◇

「Ｒｅａｄｙ□□ＰＥＲＯ!!」
　一人の男子生徒の勇ましい掛け声とともに、勢いよく舌を突き出すその他大勢の男子たち。
　放課後早々、クラスの男子がテイルレッド早ペロペロ競争という、競争というよりはもはや狂きよう騒そうを始めてしまった。
　俺は精神の安全のために、速すみやかにツインテール部部室へ退避することを決意する。
「キャンディだから、遠えん慮りよがなくなってるなあ……」
　愛あい香か、トゥアールと一緒に廊下を歩きながら、今もなお教室で行わているであろうサバトを思い出して肩を落とした。
　最近、テイルレッドペロペロキャンディというのが密かに流行らしい。
　テレビでダイエット特集が放送されると、翌日スーパーから当該商品が姿を消すのはよくあることだが……数日前にゴールデンタイムのバラエティー番組で特集されたテイルレッドペロペロキャンディが、瞬く間に世間を席せつ巻けん。
　道を歩けばペロペロ、学校に来てもペロペロ、テレビを見てもペロペロと、なかなかに俺の精神にクリティカルヒットを叩たたき込んでくる。
「あんま落ち込まないでそーじ……レッド自体はともかく、キャンディ一つのブームなんてすぐに終わるわよ」
　放課後もスムージィにツインテールを揺らし、愛香が慰なぐさめてきた。
「いや、俺もテイルレッドペロペロキャンディ自体はすごいと思ってるんだ」

　三九八円というリーズナブルな価格でしっかりとテイルレッドのツインテールの造形にこだわっていることは、素晴らしいと思う。

　ツインテールに向けられた企業努力。物作り大国日本の底力をそこに見た。

「けど──そのツインテールは、ペロペロされて消滅する運命なんだ。消えるために生まれてきたツインテール……そう考えると、やりきれなくてさ」

「あ、うん」

　愛香が白目になってしまった。

「……悪いな、湿っぽい話にしちまって……。これは人が生きるための栄養になるツインテールだって、ポジティブに考えろ……愛あい香かはそう言いたいんだろ？」

「ソウネ」

　何な故ぜか愛香の口から出かけたエクトプラズムを、裏拳で戻すトゥアール。

　そしておもむろに、白衣のポケットから、テイルレッドペロペロキャンディの袋を取り出した。買ってたのか……。

「総そう二じ様のお許しも出ましたし、遠えん慮りよなく私もペロペロしますね！」

　個装パッケージを剥はがして現れたキャンディは、やはりいいツインテールをしている。

「……ん、ちゅ……ふぅ……」

　トゥアールはやけにとろんとした目で、キャンディへと丹念に舌を這はわせ始めた。

「股間から舐なめるなボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

「〝どこから舐めても美お味いしい〟なんてコピーをプリントしたメー

カーを糾きゆう弾だんしてくださぎゃおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　愛香に吹き飛ばされ、廊下のコンクリートの壁を顔面で削岩ペロペロしていくトゥアール。
　ＤＩＹ研究会の皆さんが駆けつけ、砕けた箇所へコンクリートを塗り込めていく。いつも学校の修しゆう繕ぜんご苦労様です……。

　部室に着くと、珍しく慧え理り那なと桜さくら川がわ先生が先に来ていた。
　俺、愛香、トゥアールもそれぞれ席につくと、桜川先生の淹いれてくれた紅茶を飲みながら、しばし歓談する。
　ふと気づくと、愛香が難しい顔で頬ほおをさすっていた。
「どうかしたか、愛香？」
「うーん……？　なんか、歯が痛くて……チクッとするくらいなんだけど」
「虫歯か？　珍しいな」
「なんで愛香さんの分際で歯痛になってるんです！　毎日毎日奥歯を顎あご関節ごと持っていくパンチを放たれている私に申し訳ないと思わないんですか!?」
　トゥアールの訴えはもっともだが、愛香は鍛きたえているおかげか怪け我がや病気を滅多にしない。
　俺の覚えている限り、歯痛を申告するのはこれが初めてのような。
「大丈夫ですの、津つ辺べさん？」
　心配そうに愛香を見つめる慧理那。
　彼女も、心とツインテールが常に健康な印象だ。自分で体調には気を使っているんだろうな……桜川先生たちメイドさんのケアも篤いだろうし。

「さては愛香さんも、テイルレッドペロペロキャンディを舐めましたね」
「一回食べたけど、たったそれだけで虫歯になるわけないでしょ！　身体からだ鍛えてんのよ!?」
　トゥアールは得意げに人差し指を立て、愛香にアドバイスする。
「まあ、一番考えられる原因としては……愛あい香かさんは何を期待してるのか知りませんが、一日の歯磨きの回数が多すぎるせいで、エナメル質を劣化させて歯を痛めているフシがあります。顎あごは鍛きたえられても、歯というものは丈夫にできこそすれ、鍛えられはしないんですよ」
「たまにやってるメディカルチェックでそんなことまで検知されるわけ？　何か複雑……」
　俺は愛香の席に近づき、屈かがみ込んで頬ほおに手を添えた。
「どれ……ちょっと口開けて、見せてみて」
　指を折り曲げて顎にも添え、口を開くように促うながす。見えやすいように斜めを向いてもらうと、愛香の口の中を覗のぞき込んだ。
「ほにゃっ!?」
　愛香は甲かん高だかい声とともに、電流を流されたように身を震ふるわせる。上うわ瞼まぶたで下瞼を高速連打しながら、首を軋きしませ俺を見てきた。
「あんまり首動かすと、見えないから……」
「ひょっと……。ん、ちょっと、待って……近……そんな奥まで見ないで、そーじ……」
　喋しやべって口を閉じてしまったので、今度は多少強引に口を開いてやる。
　途端に顔を真まっ赤かにしてしまう愛香。口の中を見られるのは、そんなに恥ずかしいことだろうか……？

「隙すきあらばソロプレイのネタを採掘しますね、このむっつりトレジャーハンターは」
　テーブルに頬ほお杖づえをつき、呆あきれるようなジト目で愛香を観察するトゥアール。
　さらに身を屈めると、どうにか上の奥歯が見えるようにまではなった。
「んん……？　ああ、ちょっと奥に黒いのが見えるような……」
「ひゅりょくにゃい！　ほく、ひゅりょくにゃいはら!!」
　奥は黒くない、って言ってるんだろうか……いや、やっぱり奥歯にちょびっと黒い点が見える。
「ああ、本当……でもこれなら、削らなくても薬で何とかなる進行ですね……。とっとと歯医者に行ってください」
　トゥアールも俺に肩を寄せるように近づいてくると、愛香の口の中を覗き込んだ。
　しかもさすが科学者、即座に進行度まで看かん破ぱしたらしい。
　面倒そうにしていながらも歯医者に行くように勧める辺り、二人の友情が垣かい間ま見えて微ほほ笑えましい。
「わ、わたくしも見たいですわっ」
　何な故ぜか慧え理り那なも参戦してきた。
　さすがに三人同時に見られては愛香もバツが悪いかもしれない。俺は先に離れようとする。
「……愛香さん、この角度だと穴も総そう二じ様に丸見えですよ」
「や――――――――――――――――――――っ!!」
　トゥアールの言葉に反応して鮮やかにバク宙し、距離を取る愛あい香か。
　鼻の穴……のことだよな。まあ俺も、鼻の穴はガン見されたくはないな……。もう少しデリカシーを持とう。

「変なところで乙おと女めなんですよねえこの蛮族……別に遠えん慮りよしないで毎日この部室で私たちの前で毛でもヒゲでも剃そってもいいんですよ？」
「生えないわよバカ!!」
　それまでお茶の用意をしていた桜さくら川がわ先生が、トゥアールの発言に反応した。
「いや、年を取ってくると女でも薄くヒゲとか生える人はけっこういるぞ……？　一番大事なのはストレスでホルモンバランスを崩さないことだな」
　ためになることなんだろうけど、どうも男の俺が聞くにはリアクションに困る話題だ。
「かといって、そういった産うぶ毛げを過剰に処理するのは逆効果だぞ。私の部下のメイドに膝ひざの裏が毛深くなって悩んでいる子がいるが、多分無理に処理しすぎたのが原因だ」
「へー、ほー、そうですか。まあ私たちティーンエイジャーにはいささかの関係もない話ですね……尊みことさんは気をつけてください」
　桜川先生の話を聞いたトゥアールは、余裕を示すように手をひらひらと振った。
「いや、高校生辺りからすでに目立つ子は目立つらしいが……」
　席に戻った俺は、柄がらにもなく前髪を指でいじいじしながら、明後日あさつての方角を見つめた。
　女性同士のトークが始まると、男一人ではどうにも気まずさでいたたまれない。
「……発毛効果……ではわたくしも、たくさんストレスを感じれば……」
　慧え理り那なが自分のお腹なか……？　のあたりに視線をやってしょんぼりしている。

何な故ぜ発毛を気にするんだ慧理那、君にはそんな立派なツインテールがあるのに。

トゥアールはぽん、と拳こぶしで手の平を打つと、テーブルの上に座ってじわじわと足を拡ひろげ始めた。

「総そう二じ様ぁん……私も、足の付け根が痛くなってきたので愛香さんのように診ていただけますか？　できれば、触診で……」

「──え？　できればショック死したい？　仕方ないわね……」

愛香が開いたトゥアールの足の間に身を滑り込ませ、テーブルから引きずり下ろしてジャイアントスイングを始める。

「あなた歯じゃなくて耳の病気ですよ愛香さんいやむしろ脳のああああああああああああああああああ!!」

私見だが、今まであれだけの攻撃をものともせず受けきってきたトゥアールをショック死させる手段は、愛香にはないと考える。

回転で発生するにわか台風の中、慧理那が遠慮がちに俺に歩み寄ってきた。

「あ、あの観み束つか君、わたくしも歯が痛いように感じなくもないような気がしますかもですわ……。見ていただけませんか？」

「あ、ああ、いいけど」

慧え理り那なはあーん、と可か愛わいらしく口を開け、素人しろうとである俺の検診を待つ。

しかし、慧理那の体調の不慮とあっては、桜さくら川がわ先生が黙ってはいない。

「それは大変ですお嬢様、お見せください」

「いえ、あの、観み束つか君に……」

「むむ、見たところ虫歯はないようですが……」

「そ、そうですか、でも念のため観束君に……」

慧理那と桜川先生が噛かみ合わないやりとりをしていると、

トゥアールのおっぱい
　　　　トゥアールのおっぱい
　　　　　　　　トゥアールのおっぱい

　エレメリアン出現アラートが部室に鳴り響く。
「エレメリアンか……。俺と慧理那で行ってくるよ、愛あい香かは休んでてくれ」
　愛香はスイングしていたトゥアールをその辺に放り投げ、慌あわてて出撃を希望する。
「えっ、そーじと会長と二人で!?　だ、大丈夫よ、歯痛ぐらいで休んでたら女の子やってられないって!!」

「愛香さんあなた、女の子やってるつもりだったんですか……」
　一人の女の子の嘆きは、あまりにも実感に満ち溢あふれたものだった。

◇

　俺、愛香、トゥアール、慧理那と桜川先生は、部室から地下基地へと転送。
　ツインテイルズ三人は、揃そろって速すみやかに変身した。
　出撃ゲートを潜くぐり、転送ポイントである現場近くのビルの上へと飛ぶ。
　エレメリアンの出現場所へはすぐに到着した。イベントホールだ。
「うおおおおおおおおおおおレッドたーん！」
　地面に着地した俺たちの姿を認めるやいなや、周囲に雪崩なだれの如

ごとくギャラリーが集まり始める。

　エントランスに立てかけられた看板を見ると、「日本よい歯コンテスト」の文字。

　一番きれいな歯を競うとか、そんな感じのイベントかな……？

　そして、その前で一際目立つのは、ギャラリーをつぶさに観察している細身の巨きよ躯く。

　いったいあのエレメリアンは、こんな場所で何を狙ねらっていたんだ？

「八や重え歯ばだよね、やっぱり。白い歯？　ピンク色の歯ぐき？　違うよ、八重歯だよ」

　──俺の疑問に、あっさりエレメリアン本人が答えてくれた。

「僕は八重歯属性ダブルトウースのイッカクギルディさ」

　頭部から突きだした螺ら旋せんを描く角つのは、まさに北極圏を支配する攻撃的哺ほ乳にゅう類るいイッカク。

　嬉うれしげな自己紹介からは、爽さわやかさすら感じてしまう。

『虫歯になった途端こんな属性の敵が出てくるなんて、愛あい香かさんってエレメリアンとシンクロしてるんですかね……』

「嫌なこと言わないでよ!!」

　基地からのトゥアールの通信を受け、思わず身を掻かき抱いだくブルー。

　歯が好きなエレメリアンか……確かに、ちょっとだけタイムリーだな……。

　イッカクギルディはくねっとポーズを決め、さらに自己紹介を続ける。

「君たちには……クラーケギルディ様の部隊の生き残りと言えば、理解

が早いかな？」
　なるほど、今回はクラーケギルディ部隊の残存兵が出張ってきたってわけか。
「クラーケギルディ……貧乳部隊の生き残りは、根こそぎ血祭りに上げないとね……」
　ギャラリーの歓声にげんなりとしていたブルーの眼光に、突とつ如じょ鋭い殺気が宿る。
　とりあえず巨乳だろうが貧乳だろうが、どちらに与くみしているエレメリアンでも目の仇かたきにするんだよなあ……。
「ブルー！　いけませんわ、最近ますます世間の皆様に怖がられていますのに……」
「大丈夫よ。あたしの戦いもまた正義だって、いつか伝わるわ」
　イエローは一応世間の評価……唐突に脱衣する戦士として警戒されていることを気にしているのだが、ブルーはもはやだいぶ開き直っているフシがある。
　三人並んだ中から一歩踏み出し、俺はイッカクギルディに指を突きつけた。
「歯が好きだから、歯を競い合う大会を襲撃したってわけか。人々は襲おそわせないぞ!!」
「ううん、でもちょっとがっかりだよ」
　あらためて「よい歯コンテスト」の看板を見やると、イッカクギルディは落胆したような表情を見せた。
「僕は優勝者に言いたいね。そんな綺き麗れいにそろった歯で、何を噛かむのかと。突出した立派な八重歯なくして、歯のトップはとれないよね！」
　しかも、よい歯コンテンストの意義をガン無視し、その滑りのいい口でもって八重歯への情熱を熱く語っている。

「よし、そこの君が準優勝でいいね？」
「えええええ!?」
　ついには道行く女子高生に指を突きつけ、勝手にマイジャッジで表彰する始末。
「八や重え歯ばってさあ……尖とがってるんだよ。でも可か愛わいいんだよ。わかるかい？　その両立って、すごいことだよね？　包丁が可愛いかい？　注射器が可愛いかい？　でも、八重歯は可愛いよね!!」
　イッカクギルディは、ブルーをしげしげと見つめた。
「ん～、ブルーの方はけっこう八重歯ありじゃない？　よし、笑ってよ」
「あはは」
　主張が終わるか終わらないかで、相手の歯をへシ折らんばかりのビンタをお見舞いするブルー。笑い声とは裏腹、目を見開いて真顔だ。
「ぐ歯っ!!」
　歯へのダメージを危き惧ぐする呻うめき声と共に吹っ飛ぶイッカクギルディ。地面を抉えぐり、盛大に転がっていく。
「せっかく歯でいい思い出ができたのに……あんたが見たら上書きされちゃうじゃない!!」
「駄目ですわブルー、過剰な暴力は！」
「キモいやつを制裁したぐらいじゃ、世間はドン引きしないって！」
　言い合いになるイエローとブルー。
「わーん、テイルブルー怖いよー!!」
　見物していた年とし端はもいかない子供が、正義の味方の暴力に怯おびえて泣いている……。
　その間に、起き上がったイッカクギルディは行動していた。
「ね、怖いよねお嬢ちゃん。やばいよね、テイルブルー」
　そして怪人であるイッカクギルディが泣いている子供に近付き、慰な

ぐさめている。なんて構図だ……。
　さすがのブルーも、面と向かって子供に泣かれて凹へこんでいる。
「お嬢ちゃん、にーってして、にーって。お、いい乳歯だねー、抜かずに取っておこうね。八重歯になるよ」
「ほぇ……？」
　カメラマンじみた賞賛誘導で、年端もいかない女の子の乳歯を褒ほめ称えている。
　泣いている子をあやすのはいい。
　しかし、未来ある女の子の乳歯が生え替わることを否定するとは……断じて許せない。
　俺は女の子の前に身を躍らせ、庇かばうように立ちはだかった。
「うーん、テイルレッド、君は八重歯が目立たないねえ……すっごく似合うと思うのに」
　イッカクギルディに歯を観察されるが、俺は信念を返答とぶつける。
「生あい憎にくと、俺に生えてるのはこの自慢のツインテールだけだ」
『変身解除するともう一本立派な下の八や重え歯ばが──』
「このツインテールにかけて、お前たちの好きにはさせない!!」
　トゥアールの通信が挟まれたが、構わずに信念を叫ぶ。
「レッド、もう十分よ。こんな奴やつさっさと……いたっ……」
　糾きゅう弾だんの途中で、ブルーは自分の頬ほおを押さえてよろめく。
『聞きましたか総そう二じ様、貧乳いたが痛いたっ、ですってゲハハハハハ……ハ……』
　ブルーは遥はるか天空へとガンを飛ばした。トゥアールの打ち上げた監視衛星で中継している戦闘映像……不可能なはずのカメラ目線で、殺視線が基地へとお届けされているのだろう。
「帰ったら歯ぐきだけで噛かみ合わせできるようにしてあげるわね、

トゥアール」
　この世で最も恐ろしいデンタルヘルスを提唱する闇やみ歯科医。
『ひいいいいいいいいいいいあなたのそのおぞましきデストロイレパートリーはいつまとめて出版されるんですか⁉』
「フッ……よくわからないけど、君たちのチームワークはバラバラのようだね！　僕の戦法、〝永久八重歯トゥースマイル〟を見せてあげよう‼」
　イッカクギルディは高々と跳躍すると、額ひたいの角つのを高速回転させながら地面に激突。
　なんとそのままアスファルトを砕いて地中に潜ってしまった。
「みんな、武装だ‼」
　俺は咄とっ嗟さにフォースリヴォンを叩たたいてブレイザーブレイドを出現させ、胸の前で構える。
　瞬間、石つぶてを巻き上げてイッカクギルディが地中から飛び出し、ブレイザーブレイドを自慢の角が掠かすめていった。高速回転と跳躍力が相まって、侮あなどれない威力だ。
　しかも、先ほど地中に潜るために見せた跳躍とは比べものにならない高さまで上昇、今度は地面ではなく俺を目掛けて落下してくる。
「レッド！」
　ウェイブランスを突き出して角にかち合わせ、軌道を逸そらすブルー。
　イッカクギルディはバランスを崩しながらも再び地面に潜り、姿をくらましてしまった。
　角をドリルに地下を掘り進み、ジャンプ力もかなりのものだ。
『イッカクは潜水が得意な哺ほ乳にゅう類るいだといいますが……それに跳躍力を合わせて独自の戦法を編あみ出しているようですね』
　地から空へ、空から地へ。その両方をフィールドとして攻めてくる三

次元的な攻撃は、八重歯の如ごとき綺き麗れいな三角形を描く。
　まさに、二度と生え替わることのない永久歯のように終わり無く続く攻撃か！
　ギャラリーが多いだけに、戦いを長引かせたくはないが……。
　次に狙ねらわれたのはイエローだ。
「君に八重歯は今ひとつかもしれないねえ……！　八重歯はいやらしい笑いじゃなく、元気な笑いに似合うからさあ──!!」
「ひどいですわ！　……くっ……!!」
　イエローは間一髪で地中からの攻撃を回避したが、速度で翻ほん弄ろうしてくる敵だけに、重武装の彼女は対処が後手に回っている。
　ならば武装を捨てますわ、となるのが心配だ。なおのこと戦いを長引かせられない。
『……永久八重歯トウースマイルは全て直線の動きです！　空を飛べるわけではないのです、空中での方向転換はできません！　次に飛び上がった瞬間を狙ねらってください!!」
　何度か繰り返された永久八重歯トウースマイルから軌道を分析し、打開策を提示するトゥアール。
「そうと決まればレッド！　フュージョニックバスターで勝負ですわ！」
　俺とブルーに先んじて、イエローが力強く提案した。
「わかった──属性玉エレメーラオーブ、三つ編み属性トライブライド！」
　属性玉変換機構エレメリーシヨンで三つ編み属性トライブライドを発動。
　俺のブレイザーブレイド、ブルーのウェイブランス、
「あふんっ」
　そしてイエローのまとう全武装が強制脱衣パージされ、合身巨大砲ユ

ナイトウエポンとなって浮遊する。
　三つの武装が融合合体し、フュージョニックバスターが完成した。
　ツインテイルズ三人の武装を合体させた超重武器の降臨に、ギャラリーからどよめきの声が上がる。……悲鳴もかなり混ざって聞こえるが……イエローの脱衣と表情のせいか……。
　狙うは周囲に被害を与えない場所──空中!!
　俺たちは三人並んでバスターを構え、イッカクギルディへ目掛け砲口を定めた。
　だが──。
「きつい！　この角度きついってイエロー!!」
　左の定位置についたブルーが、身体からだをくの字に折って訴える。
　宙に浮いているから重量は苦ではないが、俺の身長よりも大きなフュージョニックバスターを空に構えるには、空気椅い子すでさらに限界まで胸を反らさなければならない。
「言われてつい発動したけど、本当に必要だったかこれ……!?」
　真ん中でグリップを握っている俺は二人よりもバランスを取りやすいが、それでも辛つらい体勢だ。
　敵が空中で方向転換できないなら、俺たちの誰だれかがオーラピラーをぶつけて拘束する方が確実だったんじゃ!?
「仕方のないことなのですわ……」
　イエローは目を輝かせて笑っている。駄目だ、これはギャラリーに新武器を披露したかっただけだ……!!
「こうなったらとっとと発射して、レッド!!」
　ブルーに急せかされ、俺はトリガーを引いた。
　発射するだけなら一人でいい武器だが……俺を頭とし、ブルーとイエローを左右の房としてツインテールのように構えることに、この武器の真価があるのだ。

　三色の螺ら旋せん光波が轟ごう然ぜんと発射され、イッカクギルディを捉える。
「その勝利を確信した元気な笑顔……！　テイルレッド、君にはやっぱり、八や重え歯ばが似合ったはずなのに──」
　急墜する削岩機を打ち抜く、ツインテールの輝光。
「ああ……でも、悔しいけど、君たち三人はいい噛み合わせだ！」
　天晴あつぱれというべきか、潔いさぎよいというべきか。
　自分に致命の一撃が飛来するその瞬間まで、イッカクギルディは八重歯への愛を囁ささやき続け──空中で大爆発を起こした。

　俺は空から降ってきた新たな菱ひし形がたの宝石を手で受け止め、ほっと一息つく。
　八重歯属性ダブルトウースの属性玉エレメーラオーブ──この能力は、果たして誰だれと噛み合うだろうか。

　ギャラリーに目線を向けると、かなりの距離を取ってくれている。
　ありがたいが、これはフュージョニックバスターを恐れてのことではなく、イエローが武装を脱衣パージした時点で退避した結果なのだろう。
　さっきイッカクギルディに詰め寄られていた幼い女の子が、ぱたぱたと駆け寄ってきた。
「助けてくれてありがとうテイルレッド！　はい、これあげる！」
　ポシェットから何かを取り出し、俺に差し出してくる。

　──テイルレッドペロペロキャンディだった。

「えへへっ、いっぱい舐なめてね！」

「ありがとう……」
　自分自身を舐めてと言われても反応に困るが、幼い純粋な瞳ひとみを前に押し黙るわけにもいかず、俺は素直な感謝の気持ちを述べた。
　観念して、俺のツインテールをペロペロするか……！
「わたくしもありがとうと言われたいですわ……」
　イエローは感謝を求めているのではなく、人々の警戒を解きたいのだろう。
　まずは、合体したまま地面に落ちている武装を着直すところから始めようか。
「いたたたた……また油断した……」
　その地面に置かれたバスターに視線を落とすと、ブルーが押し潰されてしまっていた。バスターを押しのけ、のっそりと起き上がるブルー。
　グリップを握る俺、ツインテールをアンカーにして地面に固定するイエローと違い、発射の超圧力に五体のバランスのみで耐えなければならないブルーは、たまにこうしてフュージョニックバスターに翻ほん弄ろうされてしまうのだ。
　もっとも……痛い、と呟つぶやいたのは、潰されたせいではないらしい。
「……帰ったら、歯医者行ってくるわ……」
　頬ほおを押さえながらそう零こぼすブルー。
　俺がもらったテイルレッドペロペロキャンディを見て、歯痛がぶり返したのかもしれない。

　テイルギアだけじゃない、俺たち自身の体調管理メンテナンスも大事だな……。

第四話　眠れぬツインテール。

　深夜〇時──喫茶店・アドレシェンツァと併設された、観み束つか家の自宅。
　その二階にある三つの部屋の突き当たりには、一人息子である総そう二じの部屋がある。
　廊下は常夜灯が照らすのみであり、総二の部屋の扉から漏もれ出る光もない。
　平日で明日も学校があるとはいえ、十五歳の少年が夜更かしもせずに眠りに落ちているには、なかなか健康的な時間帯だ。
　そんな穏やかな眠りをこれ幸いにと、音も無く部屋へと忍び寄る影があった。
　密着型のボディスーツを着込んでいるため、僅わずかな薄明かりでさえ、そのプロポーションは華やかに照らし出される。
　均整の取れた肢し体たいに、豊かな胸。
　結わえもせずに存分に空を泳がせる、きめ細やかな長髪。
　幻か影げとして移ろうにはあまりにも鮮烈な存在感を放ちながら、観束家の同居人である少女・トゥアールは二階の廊下で静かに歩を進めていた。
　日本はＮＩＮＪＡの国──そんな外国人の頓とん珍ちん漢かんな認識も今は遠い昔かもしれないが、この所作を見れば「やっぱりＮＩＮＪＡはいたんだ！」と目を輝かせることだろう。
　今の彼女ならば、宙に浮かぶシャボン玉の上を歩行することさえも可能なのではないかと錯覚させる。

しかしこの美しき女忍者くのいちが狙ねらうのは、国の命運を左右する機密情報でも、歴史を動かす要人の命でもない。

──観み束つか総そう二じの童貞である。

「はあ、はあ……」

昂たかぶりを抑えられないのか、トゥアールは悩ましげな吐と息いきを漏もらす。

ドアノブを握り、施錠の有無を確認する。どうやら今夜は、鍵かぎをかけ忘れたようだ。

総二は愛あい香かに就寝時の施錠を強く促うながされているが、かけたらかけたでどうせ鍵ごとドアノブを破壊されるという諦てい観かんがあるためか、彼の防犯意識は日ごとに薄れてゆく。

──格好の餌え食じきではないか。

トゥアールが観束家に同居しだしたのは、この春、四月。

基地兼自室を増設したのが地下一〇〇〇メートルの距離とはいえ、一つ屋根の下にうら若き男女が一緒に住んでいるという事実に変わりはない（※トゥアール談）。

しかし、何な故ぜ自分は同居を始めて数か月経たった今も、純潔を保っているのか。何故自分は、思い人と心と体を重ねられずに数か月を過ごしてしまったのか。トゥアールは自問する。

焦あせりは、焦じらすとも書く。数か月焦らされた少女の肉体は夜ごとに切なさを抑えきれなくなり、目は血走る。

「こんばんトゥアール……」

語ご呂ろも合わせず韻いんを踏むことも拒否した雄お々おしき造語で以もつて限りなく小声の挨あい拶さつをし、トゥアールは入室する。

この数か月の間、毎日のようにトゥアールの夜よ這ばいを受け、それ

を容よう赦しやなく愛香が撃退する様を見続けながらも、今夜も総二はすやすやと眠っている。つまり、襲おそわれても本人的にはＯＫだということだろう。
　何度邪魔されても、思い遂げられぬ夜を幾度越えても、トゥアールは決して挫くじけない。
　総二の童貞を奪うその日まで。

　将しようを射んと欲すればまず馬から。トゥアールが総二の自室に入って真っ先にチェックしたのは、机の横にあるゴミ箱だ。
　だが、目当ての物は見つからなかったようだ。早々に確認を切り上げ、そのまま立ち上がって机の上を物色する。机の上には、一冊のエロ本が置かれていた。
「…………はあ、はあ……」
　寝ている総そう二じを横目で気にしつつ、腰のツールバンドから自分用のトゥアルフォンを取り出し、液晶画面をエロ本の表紙に向ける。
　トゥアルフォンに搭載された指紋解析機能が起動。照射された一条の赤い線で表紙が一瞬のうちに走査され、分析結果が画面に表示された。
　……総二の指紋が全く検出されない。つまり、この本には触れられてもいない──。
　こうして何度もエロ本やエロ円盤を総二の部屋に当日お急ぎトゥアール便で宅配しても、いつも総二に見てもらえないままに業者あいかが強制的に引き取っていくため、今日トゥアールが仕込んだエロ本は、これまでの経験を活いかして少し趣向を凝らしていたのだ。
　まず、総二が突然自分の部屋にエロ本があっても警戒心を持たぬよう心がけた。目にするのが見ず知らずの女の裸では取っつきにくいだろうと配慮し、自らを被写体としたエロ本を自作したのだ。
　さらに、いきなり全裸では総二も気が引けるだろうと計算し、表紙は

手ブラに留とどめた。
　あまつさえ、手にとってページを捲めくる前に「いや待てよ、本当にこれはトゥアールのエロ本か？」と総二が疑問を抱いだいてもすぐ安心してもらえるよう、「できたてほやほや産地直送。私が作りました」という書き添えと共に、生産者であるトゥアールの顔写真が証明書として添付されているという嬉うれしい心配りも忘れなかった。
　それなのに……今日も総二は、お届けしたエロ本を一ページも捲ってくれなかったらしい。
　しょんぼりするトゥアール。あれ、何か机の上にあるな、程度のリアクションだったのが想像できる。
　何かあるな、て。同居している年とし頃ごろの娘さんの豊満なお身体からだが写っているのですが……。
「……やっぱり、実物の裸の方がいいんですね、総二様」
　超新星爆発にも似た眩まぶしいポジティブっぷりで気持ちを切り替え、トゥアールは総二の部屋を物色し始めた。
　トゥアールの夜よ這ばいにおける最大の障害は、総二の家の隣に自宅があり、さらには自室も隣り合った窓の先にあるという小こ癪しやくなほど幼馴染おさななじみっぷりを発揮している愛あい香かの存在だ。
　本腰を入れて総二に襲おそいかかろうとすると、愛香はたとえ熟睡していても気配を察知して飛び起き、隣り合った窓を伝って迎撃に現れる。その勢いは凄すさまじく、窓を施錠したらガラスを割るどころかサッシ枠ごと引っこ抜いて突入してきたこともあるほどだ。
　愛香が根負けしたその時には、総二の童貞はトゥアールに奪われるだろう。
　おそらく、本人もエロいので似たような感情爆発を察知するのが得意なのだろう。やれやれ、とばかりにトゥアールは肩を竦すくめる。
　そういうわけで、部屋に入った瞬間欲望を全開にして襲いかかるの

は、愛香を鋭敏にしてしまいかえって逆効果なのだ。

　このようにして総そう二じの部屋を密かに物色し、合間に総二の寝顔を見ることで、じわじわと欲望を高める。

　どうせ窓を隔へだてた部屋のベッドでいやらしい夢を見ているだろう、愛あい香か自身の欲望の昂たかぶりに自分の欲望のエスカレーションを紛まぎれさせれば、愛香はどちらの欲望か察知はできないだろう。森の中に木を隠すように、うまくカモフラージュできるというわけだ。

　トゥアールとて、テイルレッドのファーストキスを奪ったイースナの後こう塵じんをいつまでも拝しているつもりはない。本当はレッドの乙おと女めも自分が奪うつもりでいたのだ。

　この悔しさを晴らすため、総二のファーストキスから間かん髪はつ容いれずに童貞を奪いに行く。

　キスで満足してしまったイースナのようなお子ちゃまには成しえない、選ばれしヒロインにのみ許されし音速のステップアップを、とくとご覧にいれようではないか。

　その決意の表れとして今日は、とっておきの次善策も打ってある。

　十分に心の準備運動を済ませ、トゥアールは総二のベッドに近づいていった。

　いつ見ても、かわいい寝顔だ。心の中で舌なめずりをした後、いや待て、心の中でする必要はない、とあらためて実際に舌なめずりをした。

「じゅるり……」

　数百回シミュレーションを行った自分の舌技が、火を噴く時が来た。この距離に近づいて愛香が現れないのは久しぶりだ。

　今夜はいける──。トゥアールは口くち端はによだれをにじませた。

◇

一六四センチ──俺、観み束つか総二の身長は、十五歳男子の平均よりはやや下回っている。クラスでも背が低い方だし、自分としては、もう少し上背が欲しいなと思う。
もちろん、高校一年生といえば、まだまだ成長期の過程のはずだ。規則正しい食事、生活を送ることで、伸びる余地は十分に残っている。
幸い俺はそんなに夜更かしをする方じゃない。日々ツインテールを愛する片手間の心構えとして──少しの心がけで背を伸ばせるのなら、頑張らない理由はない。
問題は、別の要因で早寝早起きのハードルが高くなってしまっていることなのだが。

「うへへ……」
夜中に限定すれば非常に聞き慣れた笑い声に虚うつろな意識を揺さぶられ、俺はゆっくりと目を覚ました。
聞くのは慣れても目にするのは未いまだ慣れない──不思議な密着型のボディスーツに身を包んだトゥアールが、ベッドサイドから俺を見下ろしていた。
「トゥアール……？」
「はっ⁉　すみません総そう二じ様、起こしてしまって……お気になさらず」
血走った目と顎あごまで伝うよだれ、そして独立した生き物のようにわしゃわしゃと律動させていた両手の指を順番に取り繕つくろって元に戻していくトゥアール。
初めの頃ころは、トゥアールは何で毎晩のように俺の部屋にやってきては愛あい香かとじゃれ合うのだろうかと疑問に思っていたが、こうも毎日続くと、よく愛香に鈍いと言われる俺でもその理由に見当がつく。

　きっと、トゥアールは寂しいのだろう。
　母さんも家族として認め、一緒に住んでいるとはいえ、トゥアールの部屋は俺や母さんの寝ているこの家から地下一〇〇〇メートルの位置。
　夜遅く天井を見上げた時ふと、言葉にできない寂しさを感じてしまうのかもしれない。
　ただでさえ、異世界からやってきたトゥアールは、この世界で送る日常の中で寂しさを感じる瞬間は多いだろう。
　そもそも基地を一〇〇〇メートルの地下深くに建設する必要が本当にあったのかなど、新たな疑問を生み出す結論なのだが──。
「トゥアール──────────────ッ!!」
　深夜に近所への配慮を忘却した叫び声が響く。
　部屋のドアの方へと視線を向けると、愛香が般はん若にやと阿あ修しゅ羅らと羅ら刹せつと夜や叉しやと不動明王と金剛力士像がほどよくミックスされたオーラを背負って立っていた。ちょっと地球が危ない。
　真夜中だろうと早朝だろうと、幾いく許ばくかの眠気を湛たたえつつも愛香のツインテールは生命力に満ち溢あふれているのがすごい。
　壁時計を見ると、午前一時三二分。俺個人が覚えている範囲では、この辺がおよそ愛香とトゥアールが夜中に対たい峙じする平均時間だと思う。
　また今夜も、二人のじゃれ合いが始まってしまうようだ。
　強きよう靭じんな後ろ脚をバネのようにしならせて勢いよく跳躍し、前脚の鋭利な爪つめで襲おそいかかる──野生の猛獣そのままの狩猟スタイルで、愛香が咆ほう哮こうした。
　しかし、部屋の外から部屋内のベッドサイドのトゥアールまで一足飛びで距離を詰めるはずだった愛香は、突とつ如じよとして開け放たれたドア部分に展開された薄水色の壁におでこをぶつけ、廊下に尻しり餅もちをついた。

「!?」
「今夜はぬかりありません……！　アンチアイカシステムＳＣ-２、アイカニナグラセールです!!」
　……何かいつもの名付けの法則性と同じようでいて、よく脳内で反はん駁ばくすると実は自虐的なネーミングだな……。
　怪け訝げんな表情をした俺を見て、説明を求められていると思ったのだろうか。トゥアールはどこからともなく取り出したいつもの白衣をボディスーツの上から羽は織おり、得意げに人差し指を立てて解説を始めた。
「なまじバリアを頑丈に造ってしまうと、愛あい香かさんは躊ちゆう躇ちよ無く変身して破壊しますからね。生身の愛香さんでも破壊できるかできないかのギリギリで強度設計しました。ですが、それだけではありません」
　すでに俺には難解な理屈だ。トゥアールが説明している間にも、愛香はドア部分のバリア相手に遠えん慮りよの無い拳けん打だを放っては弾はじき返されていた。
「くぉのーっ!!」
　バリアからの反動でもたらされたスパークで、眠気を感じさせない愛香のツインテールが元気よく揺れる。
　それを満足げに見つめながら、トゥアールは解説を再開した。
「愛香さんの拳こぶしの威力を激突前に計算し、『もう少しで壊せるかも』という一歩手前の手て応ごたえになるよう、生成されたバリアが硬度を自動調整するんです。こうなると自分の武力に自信のある愛香さんは、絶対に変身せずに自分の拳だけで破壊しようとします」
　さらっと言うにしてはとんでもない技術だと思うが、それも愛香のために完成させたのかと思うと微ほほ笑えましささえ感じる。
「……トゥアールは愛香のこと、よくわかってるなあ……。あいつの負

けん気を逆手に取ってやろうなんて、いつも愛香を見てないと思いつかないよ」
　トゥアールは慌あわてて手を振った。
「ち、違いますからね!?　愛香さんを倒すために愛香さんを分析しているだけですから!!」
　トゥアールの分析は実に的確だ。好敵手……ライバルというのは、この二人のような関係を言うんだろうな。
「何楽しそうに話してるのよ……待ってなさい、あともう少しでブッ壊れるんだから!!」
「フフン、愛香さんのパンチなんてもう怖くないですよーだ」
　バリア越しでややくぐもって聞こえるとはいえ、愛香の怒声を一身に受けても今日のトゥアールは余裕だ。
「ゴリラの檻おりの中に、ボタンを押すと餌えさの出てくる箱を設置すると、ゴリラは一心不乱にボタンを押し続けるといいますが……。フッ、今の愛香さんからはまさに本能が思考を凌りよう駕がしてしまった霊長類の悲哀を感じます。好きなだけバリアと遊んでいてください」
　叡えい智ちを極めてしまった科学者の愁うれいを帯おびた微笑みを愛香に投げかけ、トゥアールは俺に向き直ってにじり寄ってきた。
「そして文字通り手も足も出ず見つめていてください、私の腰が総そう二じ様の上でリズミカルに躍動するのを！　今夜大たい願がん成じよう就じゆの時です!!」
　トゥアールが、白衣を俺のベッドの上に落とした。
　俺が白衣に気を取られたのを察したのか、トゥアールは嬉うれしそうに解説を始めた。
「これが重要なんです、ベッドの上に白衣があることが！」
「……な、何でだ……？」
「昂たかぶりますでしょう!?　下半身がヒートしますでしょう!?　私は

します!!」
　トゥアールが続けて何な故ぜか俺の目の前でボディスーツを脱ぎだした瞬間、ビシリ、と陶器に亀裂の入るような音が聞こえた。
　展開されたバリア……アイカニナグラセールの方を振り向くと、愛あい香かが目を逆三角に尖とがらせ、口からドライアイスじみた濃い吐と息いきをくっはーと漏もらしていた。
　さらに一撃。今度は目に見えて分かる変化が起こった。パンチの激突点を中心に、バリアに光のヒビが入っている。
「バ、バリアに……硬度調節機能を備えたバリア……アイカニナグラセールに、ヒビが⁉」
　大おお仰ぎようにたじろぎ、愕がく然ぜんとして愛香を見つめるトゥアール。
　何度も何度も、愛香はバリアに拳こぶしを叩たたきつけ、ヒビが拡大していった。
　やがてとどめとばかりに愛香は拳を振りかぶり、渾こん身しんの一打を放つ。ついにアイカニナグラセールは殴なぐらせ続けたことで使命を全うし、粉々に砕け散った。
「硬度調節機能だけじゃあ不完全だったわね、トゥアール。自己修復機能もつけておかないからよ」
「ええっ⁉」
　手の甲に息を吹きかけた後軽くスナップすると、愛香は悠々と部屋の中に入ってきた。
　その泰たい然ぜん自じ若じやくぶりに、トゥアールも言葉を失う。
「硬度の自動調節なんて機能のせいか、殴った感じ、相当不安定だったみたいよ？　そこへあたしが一点集中して正確に同じ場所を殴り続けたから、負担も一点に集中したってわけ」
　炸さく裂れつした鋼はがねの脳筋を前に、人類の叡えい智ちが膝ひざ

をつく。
「そういう熱血理論戦闘はアルティメギルとの戦いにとっておいてくださいよなんで私にあっぎゃあああああああああああ!!」
　説明の余韻も与えずにトゥアールに飛びかかる愛香。
　愛香の夜の奥義・パジャマｄｅ死の連続技ダンスを浴び、腰どころかトゥアール本体がリズミカルに躍動する。
　トゥアールは愛香を研究して防御システムを進化させ、愛香はその防御システムを突破するために自身を研けん鑽さんする。
　これを、ライバルというのだろう。これを、切せつ磋さ琢たく磨まと呼ぶのだろう──。

◇

　一際大きい破壊音で目を覚ます。枕元の目覚まし時計を見ると、午前五時ちょっと前。
　拳こぶしメインのガールズトークがなかなか終わらないのでついつい二度寝してしまった俺だが、あれから数時間経たっても二人のじゃれ合いは続いていたようだ。
　全く関係ないが、「つい」という言葉は語感が好きだ。ついついと連続すれば、二倍だしな。
「おはよ、そーじ」
　睡眠不足と疲労ゆえか、愛あい香かのツインテールもやや疲れているようだ。
　しかし数時間にもわたってドッタンバッタンしていたのなら、当然夜明け前の住宅地に多大なご迷惑をおかけしたことだろう。
「そろそろご近所に菓子折持ってった方がいいかな……」
　俺の落ち込みを見て取ったのか、トゥアールがすかさずフォローをし

てくれた。
「だ、大丈夫です、総そう二じ様。この部屋は防音仕様に改造してありますから、中で戦車が主砲を発射しても音がご近所様に聞かれる心配はありません」
「そうよ。そーじは何も気にしなくていいの」
　満まん身しん創そう痍いのトゥアールと、ほどよく汗をかいた愛香が同時ににっこりと笑う。
　まさに部屋の中で戦車が主砲を炸さく裂れつさせたみたいに破壊され尽くしたこの状況で気にせずにいるためには、俺自身が明めい鏡きよう止し水すいの極意に辿たどり着かなければ到底不可能だろう。
　結果的によかったとはいえ、俺の部屋を改造するのに何な故ぜ俺にただ一言の連絡もくれずに遂行されてしまうのだろう。
　トゥアールのボディスーツが所々破れ、右のお尻しりがほぼ丸見えになってしまっている。俺は慌あわてて目をそらした。
　気のせいでなければ、トゥアールが一瞬にやりと笑ったような……。

「ん……？」
　愛香は、この破壊の後もかろうじて家具の体は保って残った俺の机の上から、一冊の本を見つけた。
　きのう帰宅したらいきなり机の上にあった本だ。表紙が半裸のトゥアールだったので、そっとしておいたのだが……。
「！　あんたまた……そーじにこんな本渡して!!」
　気づいて怒りを露あらわにする愛香に、トゥアールは飄ひよう々ひようと答える。
「こんな本って何ですか、美術資料ですよ」
「資料!?　死霊の間違いでしょ!!」
　これほどまでに生命力溢あふれる女の子相手に死霊呼ばわりとは、さ

しもの愛香もかける言葉を間違ったといえるだろう。
　トゥアールは所々破れてきわどくなったボディスーツを気にせず、堂々と胸を張った。ビリビリと音を立て、さらに肌の露出面積が上がる。
「これはいろんな角度から私を撮影して編集した、トゥアールちゃんグレートアングルポーズ集です！　一見私の全裸祭りですが、こうして表紙に美術用デッサン本と銘打ってありますので、言い訳が欲しい思春期の男の子に配慮した親切設計になっています」
　愛あい香かは眉まゆを八の字にゆがめ、本を捲めくっていく。
　だが、愛香のツインテールも緩やかな八の字を描いている以上、俺にとってそれは決してネガティブな仕草ではない。
　ページを捲るごとにわなわなと肩を震ふるわせ、最後の方になると愛香は吐血紛いにげふっと吹き出した。
「ば、ば、ば、馬ば鹿かじゃないの、何でこんなとこまで写してんのよ!!」
　耳まで真まっ赤かにして挙動不審気味にトゥアールに詰め寄る愛香。何が写っていたというのだろうか……。
「ラストの方だから少し慣れてきたところで大きな刺激をと……どうせ美術資料の建前で理論防御しますし!!」
　愛香はトゥアールに向けた視線を上に下にと彷徨さまよわせ、
「……」
　やがて頬ほおを染めて俯うつむいた。
「勝手に見ておいて何よそよそしくなってるんですか、やめてください!!」
「と、とにかくこれも没収！」
　本を小こ脇わきに抱かかえる愛香に、今度はトゥアールが逆襲する。
「ふざけないでください！　何な故ぜ私のパーフェクトバディが愛香さ

んのソロプレイのサイドメニューにされないといけないんですか!!」
「誰だれが使うか！　燃やすのよ!!」
　使うって……何にだ？
　再び白衣を羽は織おると、トゥアールは溜ため息いき交じりに愛香に歩み寄った。
「いいですか愛香さん、地球の七割は水で覆おおわれています。大小の差はあれ水の加護はどの異世界の地球でも普遍のもの。水が無くなった時、地球は地球でなくなるからです。母なる地球を地球たらしめる、大いなる根源の力……それが水なのです。それを操る慈愛の戦士がテイルブルー！　愛香さん、今はあなたなんですよ!!」
「それが今、何の関係があるのよ」
「もう少し慈愛の心で私に接してくれませんか!?　地球的視点から見て、新たな生命が私に宿るのを微ほほ笑えましく見守ってください！　別に今は宿す過程だけで宿りませんけど!!」
　矢や継つぎ早ばやに言い終わると、トゥアールは突とつ如じよとして俺に飛びかかってきた。微ほほ笑えましい世間話の間でも一切の油断をせず備えていた愛あい香かが、瞬時に迎撃する。
「地球の自浄作用ッッ!!」
「いやあああああああああ淘とう汰たされるうううううううううう」
　壁時計を見る。迎撃時間、ジャスト午前五時。二人が仲良しなのは俺も嬉うれしいが、さすがに学校があるのにこれ以上はな……。俺は二人に提案した。
「なあ……そろそろ寝ないか？」
「ひゃるっ!?」
　愛香が奇声を発し、尻しり餅もちをついた。抱かかえていたトゥアールが床に落下する。
「何メスの面つらになってるんですかこの蛮族は！　確かに誤解して襲

おそいかかっても罪には問われないレベルの美声でしたけど!!」
　何の誤解かはともかく、俺は二人に早寝早起きをして背を伸ばしたいことを伝えた。
「……というわけで、睡眠時間はあまり削りたくないんだ」
「そ、そうね……まあ、背がおっきくなるのはいいことだわ。あたしも見上げながら……って憧あこがれるし……」
「ペッ」
　しおらしく身体からだをよじる愛香に女子力全開で唾だ棄きするトゥアール。
「私は大きさにはこだわりません！　やっぱり愛……互いの心が、気持ちよさに直結すると思うんです！　直結するだけに!!」
「あんたは短絡的すぎて過程が全部ブっ飛んでんのよ！　せめて……ｷｽから……とか思わないわけ!?」
「キスなんて性行為のいちバリエーションに過ぎないんですからキスしたんならそっから最後まで突っ走ればいいだけじゃないですか何でそこで止めるんですかイースナですか!!」
「そこは小声にしなさいよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　それに対するは、女子力全壊の連続コンボ。寝よう、睡眠を取ろうと提案したのに、何な故ぜむしろヒートアップしてしまうのか。
「と、とにかく少しの間夜よ這ばいは控えて昼這いにします。愛香さんも、争うのは日中だけにしましょう」
「いいわ。あたしたちはともかく、そーじにはちゃんと睡眠取ってもらわないといけないしね。いいわよ。その代わりそう言っておいて夜に抜け駆けしたら、三〇倍強くいくからね」
「愛香さんも……明日地球の周囲に土星と同じ輪っかができるぐらいのささやかな確率ですが、健すこやかにおねんねすれば胸が成長するかも

しれないんですから」
　地球に輪っかができるって、奇跡だろう。ささやかと奇跡とじゃ、同じ〇コンマの確率でもコンマ以下の〇の数が一〇〇〇桁けたぐらい違う気がするが……。

　その時、ベッドの横に置いていた俺のトゥアルフォンから着信音が響いた。
　画面には『神しん堂どう慧え理り那な』と表示されている。
　俺が手を伸ばすより早くトゥアールが当たり前のような自然さで拾い上げる。
「もしもし観み束つかです」
　声真ま似ねすら放棄した雄お々おしき返答で、トゥアールは通話を始めてしまった。
『……み、観束君……？　お風か邪ぜを引いて喉のどの調子が悪いのでしょうか、声が随分高くなっていますが……』
　トゥアールが外部スピーカーをＯＮにしたのか、受話口の向こうの慧理那の声が俺たちにも聞こえる。
『すみません観束君、こんな早朝にお電話を……』
　いや、早朝にブラッディーファイトが繰り広げられるよりは全然マシだと思うぞ、慧理那。
「慧理那さん、今何色のパンツはいてるんですか？」
『えっ⁉　し、白ですが……』
　俺の電話を使って繰り広げられる早朝のセクハラ劇。
　愛あい香かが電話を取り上げようとするが、白衣を使って華麗にマントアクションを魅せ、トゥアールは奪取を逃のがれた。
「なるほど、では今すぐ脱いでください。パンツなど不要です！　今日はノーパンで登校しましょう！」

　そこでようやく……ようやく、慧理那も気づいたようだ。
『あっ……もしかして、観束君ではありませんわね？』
　リアクションが大振りな人なら、たはー、とおでこを叩たたきかねない明るい声で、慧理那は告げた。
「バレ……ちゃいましたか！」
　さらに愛香の攻撃を躱かわすトゥアール。慧理那と絡んでいる時は、どういうわけか結構身体能力が向上するんだよな。
『だって、命令されても全然その通りにしたいと思いませんでしたもの。うふふ』
　……何で最初に声が違う時点で気づかなかったのだろう……。
『さすがにトゥアールさんのお願いで、パンツをはかずに登校するのは難しいですわ』
「そうですね！　ではいずれ別の……」
　三度目の正直、愛香はフェイントと交じりの動きでトゥアールから電話を奪った。
　……何な故ぜ〝トゥアールさんの〟と枕詞をつけて否定するのだろう……。誰だれにお願いされても難易度ＭＡＸだと思うのだが。
「会長、ごめんね、トゥアールが悪戯いたずらして。……そーじに何か用だった？」
　何な故ぜか専属秘書のような佇たたずまいで用件を取り次ごうとする愛あい香か。
　俺の電話なんだけど……。
『す、すみません、ちょっと不安な夢を見てしまって……観み束つか君の声を聞きたいな、と』
　消え入るような声を聞き、愛香はどこか寂しそうに笑った。
「……そっか……。うん、そんな時ってあるよね」
「あら、愛香さん物わかりがいいですね」

　その純真さに影響されてか、愛香もトゥアールも心なしかしんみりとする。
　電話一つとっても相手の就寝の有無を気遣ってくれる。慧え理り那なはいい子だ。
　いや、夜中に突然やってきて部屋を破壊していく友達がいい子ではないと言っているわけではなくてな。
　そういえば慧理那こそ早寝早起きの達人だが、やはりもう少し成長したいと願っているフシがある。
『でも……少し羨うらやましいですわ。〝そんな時〟……津つ辺べさんやトゥアールさんは、すぐに観束君の元へと駆けつけられるのですから』
　言葉通り羨むようにこぼす慧理那。
　その時──

　トゥアールのおっぱい
　　　　　　　　　トゥアールのおっぱい
　　　　　　　　　　　　　　　　　　トゥアールのおっぱい

　どこかしんみりとした空気を急に切り裂さく、お馴な染じみのアラート。
　……戦車砲の炸さく裂れつでも響かない防音仕様に部屋が改造されていて助かった。こんな面白ボイスが朝焼けの空に響き渡っては、ご近所に菓子折を配って回るどころでは済まないだろう。
「エレメリアンが出現しました……！」
　小型の端末を取り出し、地下基地からの情報を表示させるトゥアール。
「こんな朝早くにか⁉」

「突拍子もない属性の敵かもしれません。お気をつけて！」
「ああ!!」
　タイミングが幸いした。
　それでも、慧理那だけは合流にタイムラグがあるだろうが──。ふと先ほどの、すぐに駆けつけられる、という言葉が思い出された。
　電話越しに慧理那にも出現を伝え、俺と愛香、トゥアールは地下基地へと急いだ。

第五話　眠れるツインテール。

　エレメリアン出現を知らされ、地下基地に急行し、可及的速すみやかに出撃した。
　現場は広大な緑に囲まれた、とある高校。転送ゲートの出現ポイントからはほど近く、理想的なスピードで到着できたはずだ。
　しかし、俺とブルーがそこへ駆けつけた時には、すでにエレメリアンの姿は影も形もなかった。トゥアールの話では、その高校の敷地内でも校舎から離れた場所にある部室棟の前で、丸いシルエットのエレメリアンがただ様子を窺うかがっていただけとのことだ。
　一般人が出現に気づかなかったのは幸いだった。
　遅れて合流したイエローに事情を説明し、三人揃そろって基地へと帰投する。
　立ち去る前に、俺はもう一度現場を確認した。標的にされたのが運動部か、文化部かで、属性の傾向はかなり違うだろうが……そもそも、まだ六時前だぞ。こんな朝早くに学校に来たって、生徒はいないだろう。朝練にしたって少し早い。部活で合宿でもしていない限りは。
　仮に合宿だとしても、みんなまだ寝てる時間だよなあ……何が目的だったんだ。

◇

　チャイムの音が教室に響く。
　愛あい香かとトゥアールのじゃれ合いに続く早朝のエレメリアン出現

の合わせ技で、今日は睡眠不足に拍車がかかる。睡魔に耐えながら午前の授業を終え、昼休みを迎えた。

「そーじ、部室行こ」

「総そう二じ様、部室に行きましょう！」

　右から愛香、左からトゥアールに声をかけられ、俺は頷うなずいて立ち上がる。

　この二人に至っては、俺みたいに短時間だけとはいえ二度寝をしてさえいないのにこんなに元気なのだからすごい。

　視線を感じて振り向くと、クラスの男子がじっとこちらを見ていた。

　そして何な故ぜか自信たっぷりに、次々と話しかけてくる。

「フッ……そうだな、そうしてお前に見下ろされる俺たちはまさに負け犬……去年までの俺なら、あんな光景を見たら灰化していたかもしれない。──けど」

「ああ、俺たちにはテイルレッドたんがいる。両手に花なんて前時代の遺物に嘆くほど今の俺たちは弱くないぜ!!」

　クラスの男子たちが一斉にテイルレッドグッズを取り出し、またはスマートフォンやタブレットに画像や動画を映し出し、俺にとってはありがたくなさ過ぎる祈き祷とうを、女神と崇あがめる少女へ捧げ始めた。

「あーいかっ」

　一方、愛あい香かはクラスの女子からウインクを投げかけられたりしている。

　何か小声で「今日こそ、今日こそ！」とか言いながら親指を立てている子もいるように見えるが、とにかく相変わらず愛香の人望は厚い。

　廊下に出ようとした時、反対側から扉が開けられ、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生が姿を見せた。

「慧理那？」

「観み束つか君、今日のお昼はわたくしもお邪魔してよろしいでしょう

か？」
　何な故ぜかほんのりと頬ほおを染め、慧理那が俺を窺うかがうようにちらちらと可か愛わいらしく視線を送ってくる。当然俺は快こころよく応こたえた。
「ああ、もちろんだよ」
　普段慧理那は、クラスの人と教室や学食で食べたり生徒会のメンバーと生徒会室で昼食をとることが多いが、たまにこうして俺たちに付き合ってくれることもある。
「そういうわけだ。行くぞ、観束」
　桜川先生がとてつもない自然さで、折り畳たたんだ婚こん姻いん届とどけを俺の弁当箱の包みに差し入れてきた。ケーキの箱に差し挟まっているメッセージカードを連想させる。
　抜き取る間も許されず、しかたなくそのまま教室を出ようとすると──
「死ね観束うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお‼」
「なんだあ⁉」
　慧理那と話す俺に向かって、クラス中から男女分け隔へだてなく、憎悪のシンフォニーが叩たたきつけられる。慧理那はこの学園の人気者だ、話すだけでもこうなるのだろうか。
　そのシュプレヒコールを招いたのが自分だと思ったのだろう、桜川先生は微ほほ笑えみを浮かべて教壇の前に出た。
「何だ、羨うらやましいなら言え。婚姻届はいくらでもあるぞ」
　密かな疑問なのだが、桜川先生はいつもあの大量の婚姻届をどこから取り出しているのだろうか。今なんて、コピー機に紙を補充する時ぐらいの量の束の婚姻届を一気に取り出したぞ。
　トゥアールの白衣のポケットは、異世界の超技術の結晶だ。搭載量が限界知らずなのはまだ納得できるのだが──。

「「「□□□□□□」」」
　婚姻届を目にした瞬間怒りの日は終結し、クラスの生徒たちは健すこやかな微笑みを浮かべて弁当を取り出したり、学食へと出かけるなどし始めた。
　桜川先生の婚姻届は、暴徒鎮圧にも強力な効果を発揮するんだよな……。
「ほら。早く行くわよ、そーじ」
　愛あい香かに背中を押され、教室を後にする。いつも通り賑やかな学園だ。

「賑やかなのはよいことですわね」
　慧え理り那なが廊下を歩きながら、しみじみと呟つぶやいた。
「楽しげな皆さんを見ると、平和を実感します。平和のために戦うわたくしたちにとって、この日常の笑顔こそが宝物なのですわ」
　特撮ヒーロー番組の最終回でモノローグでまとめに入ったかのような台詞せりふだが、それには俺も同意だ。
　戦いを経て、平和を守ると共に、大切な財産として俺の中に息づくものがある。
　日々成長する、俺のツインテールへの想いだ。
　特に激闘を潜くぐり抜けるごとに、ツインテールへの愛で空間認識能力が養われていっているのだろう。文字通り「視野」が広がっている、そんな気がする。
　腕試しとばかりに俺は、昼休みの廊下を歩く生徒のツインテールを、気配だけで探ってみることにした。
　自分の視線をソナーのように放射状に広げていく感覚。その中でツインテールだけを識別し、捉えていく。物騒な喩たとえだが、ミサイル発射システムで、ターゲットを次々にロックしていくイメージを描いて

いった。
　――二七人。
　もちろん、陽よう月げつ学園高等部の校舎にいる全ての生徒と教師全員を合わせればもっと数多くいるのだろうが――今の俺が精神を研とぎ澄ましてツインテールの気配を感じ取れる範囲には、限界がある。
　おそらくは、廊下の端はしから端まで――それに連なる教室を含めてが、現在の探査限界といったところか。その範囲内にいるツインテールの人数が、これだけだ。
　数人の誤差はあるかもしれないが、多分間違いないだろう。
　範囲内の教室、クラスの人数から考えて、その数実に、五人に一人。
　少し前を思えば、驚異的な割合だ。このツインテールのほとんどが、流行に流されずに心から好きになった人なんだ。
　地球という広大な尺度でなくてもいい。
　自分たちの通う学校というミニマムな世界の中でも、ツインテールを守っているという実感は、俺を勇気づけ、強くしてくれるんだ。
　万感の思いを込め、俺は慧理那に応こたえた。
「ああ、この光景が俺たちの宝物だな、慧理那」
「はい！」
　嬉うれしいはずなのに、頬ほおを涙が伝いそうだ。俺は天井を振り仰ぎ、舞い踊るツインテールの気配に耳を傾ける。
　生物の、特に人間の身体からだは、様々な部位や器官が二つある事でバランスが取れている。
　目。鼻の穴。耳。
　手、足。胸。尻しりも二つに割れている。
　肺だって二つあるし、腎じん臓ぞうだってそう。細かいものならまだまだある。
　左右均等に配置されているのが、調和の証あかしだろう。

　そこをいくと━ツインテールとは、身体全体と照らし合わせてみれば、とても適切な髪型ではないだろうか。
　そう……ツインテールとは、人間として最も相応ふさわしい髪型の一つ。その結論に達する。
　ツインテールを好きになるのは、生物学的に見ても理に適かなっているのかもしれないな。
「何を柄がらにもなく廊下で歩く総そう二じ様を窓から差し込む光を浴びてぽーっと見つめてるんですかいやらしいですね愛あい香かさんは!!」
　ティーンエイジソングの一節のようなトゥアールの言葉に反応して横を向くと、確かに愛香が俺を見つめていた。寝不足でくまでもできてるのかと目元を擦こする。
「ど、どーせツインテールのこと考えてるんだろーなー、ツインテール馬ば鹿かだなーって思っただけよ!!」
　思考を読まれてしまった。ツインテールはツインテールを知る、というわけか。さすがだぜ、愛香。
「愛香さん以外の哺ほ乳にゅう類るいに馬鹿と言うのは日本語として正しくありませにゃあああああああああああああああああああ!!」
　給食を食べ終わるが早いか校庭でドッジボールを始めてしまう小学生のように、トゥアールで壁パスを始めてしまう愛香。
「もしもし、部室棟の近くに来てくれー」
　背後では、ＤＩＹ研究会の人が電話をかけていた。おそらく部員を招集したのだろう。
　自動で修復する基地や部室やトゥアールが直している俺の部屋と違い、学園内の補修は彼らＤＩＹ研究会の活躍なくしては保たれないのだ。
　本当にすいません……。

ツインテール部部室に辿たどり着き、長テーブルに着席して各々弁当を広げる。

手ぶらでやってきたトゥアールは白衣のポケットからにゅるんと保温性の高そうな箱を取り出し、愛香は包みを開いて四段の弁当箱を広げる。傍かたわらには二リットルペットボトルのお茶も忘れない。

慧え理り那なは、桜さくら川がわ先生の部下のメイドさんがトレイに載せて運んできた少量かつ豪勢な食事を置き、それを桜川先生が広げていく。シルクのテーブルクロスがセッティングされた。

曰く、慧え理り那なのお父さんがこれを持っていってくれと土下座する勢いで懇願（桜さくら川がわ先生によると原文ママ）するらしいが、クラスメイトの前でこれはさすがの慧理那も遠えん慮りよしたいらしく、気兼ねのいらないツインテール部部室で昼食をとる時限定だそうだ。桜川先生も相しよう伴ばんに預かっている。

俺は普通に母さんの作ってくれた弁当。量的には愛あい香かの半分の二段、飲み物もちょうど半分の容量のマグボトルだ。

四月の頃ころは愛香と俺で教室で食べていたので、こうして人数が集まってわいわいと昼食をとると、部活動──少しくさい言い方をすれば、青春ツインテールって感じがするぜ。

「ああ。俺のツインテールは──青春だ」

「急に何言い出してんの、エレメリアンと戦ってる時じゃあるまいし！」

咄とつ嗟さに漏もれ出た戦闘時の口くち癖ぐせに、愛香から鋭く突っ込まれる。

「いや、愛香さんこそ何ですかそのお弁当の量は……四段はないですよ四段は」

そういうトゥアールは一つの弁当箱で網・焼く・吸気するという究極

のコンパクト一人焼き肉を実現しているのだが、量的には確かに愛香に及ばない。
「今日は寝不足だから、いっぱい食べて体力つけないとね」
　怒りもせずに余よ裕ゆう綽しやく々しやくで答える愛香。
　眠い時に腹いっぱいになると輪をかけて眠くなると思うが、午後の授業は大丈夫だろうか、愛香は。
「食欲で睡眠欲を補うというわけですか。まあ愛香さんは性欲も人一倍ですから、それも食事で補充しないといけなずおああああああああああああああ!!」
　エネルギーを補充したそばからカロリーを消費する愛香。絞しめ技を敢行されながら、トゥアールは言葉だけの勇気ある反撃を試みる。
「あぎぎぎぎ、そ、そんなに食べても胸は全然成長しなっぎゃ――――――――す!!」
「あんたの胸を削そいでケバブにして昼食に加えてやりましょうか!?」
「何で軽口だけとはいえそんな恐ろしい発想ができるんですかこの現代に生きる狩猟女傑、ツインテール・アマゾネスは!!」
　ツインテール・アマゾネスか……。そんな人たちが、遠く離れた異国の地で暮らしているのだろうか。俺はそっと目を閉じ、雄大な大地に思いを馳はせる。
「食事中くらい静かにしろ、埃ほこりが舞う！」
　慧理那の食事をガードしつつ窘たしなめながらも、桜川先生もどこか諦あきらめたように苦笑している。もちろん、慧理那は嬉うれしそうに二人のやりとりを見つめていた。
　あれが二人の日常なのだ、食事も人一倍とって当然だろう。
　むしろ愛香の方が普通で、常人の数十、いや数百倍はあろうトゥアールの超回復力のカロリー源の方が不思議だ。一人焼き肉程度では到底追いつかないように思える。

今朝のエレメリアンについての話し合いもそこそこに、昼食をとりながらの談話の最中。
「そういえばさ」
愛あい香かは、あの量で誰だれよりも早く弁当箱を空からにし、後は俺たちの速度に合わせながらお茶を飲みつつ話題を変えた。
「トゥアール、友達できた？」
飲み物でむせて咳せき込み、トゥアールは顔を真まっ赤かにして愛香に詰め寄った。
「まるで私がぼっちみたいな言いぐさじゃないですか！」
「いやごめん、あんまり他の女子と話しているとこ見たことないから……」
観み束つかトゥアールというファンタジックな偽名も一因かもしれないが、愛香とじゃれ合って校舎を破壊するトゥアールは、他の生徒たちからは確かに一歩引いた目で見られている可能性がある。決して嫌われているとかではなく、愛香とトゥアールの名コンビを前にすると、なかなか声をかけづらいのかもしれない。
──かくいう俺は、週末一緒に遊びに行く男友達とか一人もいないのだが……。俺も、愛香と一緒に居すぎるせいだろうか。いや、愛香の友達の多さを見るに、それは言い訳だろう。
「勘違いしないでください、私はイースナと違ってコミュ力はあるんです、友達を作るなんてお茶の子さいさいです！　前の世界では一定の年齢以下に限定すれば市販の携帯の保存メモリ数では足りないぐらい友達を登録してたんですからね!!」
人脈というには憚はばかられるソート条件が付加されてはいるが、確かにトゥアールは誰とでも分け隔へだてなく接することができるからな。

「友達ならわたくしがいるじゃありませんか、トゥアールさん！」
　それでもどこか寂しさを隠しきれていないようなトゥアールに、慧え理り那なが慈愛に満ちた言葉をかけた。
「わたくしも休みの日に一緒にお出かけをするような……友人と呼べる方は観束君たちだけですし、そこまで気にする必要はないと思いますわ」
「ああっ……慧理那さん！　まだ昼休み残ってますしまぐわいああああああああああああ」
　机を飛び越えて慧理那に抱きつこうとしたトゥアールを、桜さくら川がわ先生と愛香が迎撃する。普通のスキンシップでそこまで過剰にならなくても……と思ったが、すでに服が脱げかけていたことが要因だろう。
　慧理那はふっと表情を引き締める。
「何よりわたくしたちは、正義のために戦う身。他の方と余り親しくしすぎては、戦いに巻き込んでしまうかもしれませんもの」
「さすがです慧理那さん、これからは休み時間一緒にトイレに行きましょう！」
　復活するやいなや、男には理解の埒らち外がいにある友情の確かめ方をトゥアールがしている時、長机の端はしに置かれたノートＰＣから、朝も聞いたばかりの俺の気け怠だるい声でアラートが鳴った。
　すかさず駆け寄るトゥアール。
「…………エレメリアンが出現しました。反応は今朝現れたエレメリアンと同一のものと思われます」
「よし、腹ごなしに丁ちよう度どいいわ。今度こそ倒してやりましょ！」
　愛あい香かの胃腸は食物を飲み込んだ側そばから消化する強きよう靭じんさを誇るのか、食べ終わってからトゥアールへの武力行使、そして

今出撃となると、もはや胃を休める暇いとまなど一切無い。
　本人にとっては、文字通り腹ごなしなのだろうが……。
「お嬢様、大丈夫ですか、食べた後すぐ動いてはお腹なかが痛くなってしまいますよ」
　紙ナプキンで慧え理り那なの口元を拭ぬぐいながら、桜さくら川がわ先生が心配する。
「ありがとう尊みこと、でも大丈夫ですわ。お腹が痛くなったら観み束つか君がさすってくれます。わたくしたちは仲間なのですから」
　信頼してくれるのは嬉うれしいけど、女の子のお腹をさするのはちょっと恥ずかしいかな……。ツインテールをさすってくれと言われたら何十時間でも続ける用意はあるが。
「──上う手まいですね、慧理那さん。仲間の絆きずなと関係づければ総そう二じ様はスキンシップに抵抗がなくなりますから」
「ッ……じゃああたしだって腹痛起こすわ!!」
　ここに来て愛香とトゥアールが部室の隅で密談を始めたので、俺は出撃を急せかす。
「早く行こう、また逃げられちまうぞ！」
　右腕を胸の前で構え、テイルブレスを可視化させる。
「テイルオン！」
　ブレスから赤い光が迸ほとばしる。知覚外の一瞬で全身が縮み──炎のように熱く煌きらめくツインテールが俺の心を燃やす。全身を光の粒子が包み、空想装そう甲こうテイルギアが装着された。
　一足先にテイルレッドへと変身した俺は、急ぎロッカーの前に立つ。
「ああっ……こういう時は三人一緒にといつもお願いしていますのに！」
　続いて慧理那と愛香も変身し、俺たちはロッカーを通って地下基地へと移動する。

　桜川先生とトゥアールに見送られ、現場へと急行した。
　友達を作ると戦いに巻き込んでしまうかもしれないから、か……。慧理那がそう言ったのは、ヒーローのお約束からだろうけど……。ひょっとしたら、トゥアールは本当に──。

◇

「今度は──幼稚園のようですわね」
　イエローが指定された場所を確認する。眼下に見えるのは、敷地が大きめの私立幼稚園だ。
「ほんっとあいつらよく幼稚園に現れるわねー!!」
『小ちっちゃい子を狙ねらうなんてこの世でもっとも許すまじき悪行です！　愛あい香かさん、ジェノサイドを許可します!!』
「わかった、帰ったらあんたをジェノサイドするわね」
『蛮族はすぐ越権行為に走る!!』
　前科を断罪され、基地のオペレーターが悲鳴を上げる。
　幼稚園の門の前に着地し、状況を確認する俺たち。
「……何だ、あの丸いの……」
　毛糸の玉のようなもこもことした丸いフォルムに、記号のΩオームを逆にしたような曲がりくねった角つの。
　今朝は姿を見ることすらできなかったエレメリアンが闘気を迸ほとばしらせ、幼稚園の庭から窓の中を覗のぞいていた。
　とりあえず、警察に代わって俺たちがあの不審者をとっ捕まえなければなるまい。
「おま！　……ぇ……」
　こちらへ引きつけようと声を荒らげた俺は、すかさず振り向いたそのエレメリアンに指を口元に当て「しー」と注意を受けた。

「私は眠り属性スリープのシープギルディ……。あまり大声を立てるなツインテイルズ、子供たちが目を覚ましてしまう……。見よ、寝息に合わせ小さく揺れるツインテールを」
　羊のエレメリアンか。どちらかというと、眠りを愛するというより眠りに誘いそうな印象のモチーフだが……。
　仕方なく、俺は渋々隣に立った。なるほど、どうやらこの幼稚園は今、みんなでお昼寝の時間のようだ。
　床いっぱいに布ふ団とんを敷き、子供たちがすやすや気持ちよさそうに眠っている。
　もちろん、ツインテールの子はあるがままにツインテールのままに寝息を立てている。
　俺は正義のヒーローとして、健すこやかに眠り、健やかにツインテールを揺らす子供たちを見守った。
　よし、今日も世界は平和だ……。
「わかるか。人は眠りにつく時、もっとも無防備。いかなる武術の達人でさえ、睡眠時は最大の弱点という。だが人間共通の弱みである睡眠時こそが、人がもっとも美しく輝く瞬間なのだ。それは老若男女問わず……いや、もちろん幼い少女に越したことはないが……」
　一瞬致命傷の本音が口をついて出たが、シープギルディはしたり顔で力説した。
　鼻を鳴らし、シープギルディの力説を切って捨てるブルー。
「何を知ったような口聞いてるのよ、あたしはどんなに熟睡してたってすぐに目を覚ますわ」
　強がりじゃないから困る。
　世の達人とやらは何な故ぜこの津つ辺べ愛あい香かという少女にできることができず、明確な弱点を抱かかえたまま強くなろうとするのか。
「──フッ、ならば試してみるか。見たところ、テイルレッド、そしてテ

イルブルー……お前たちは今日、睡眠不足のようだな」
「「!!」」
　俺とブルーは揃そろって驚きよう愕がくする。
　俺に至っては変身時は肌つやさえ激変しているのだから、くまの一つもできていないはずだが……どうやら、モチーフに違たがわず眠りの専門家というわけか……。
「旅立て！　健すこやかなる船出!!　年々航路利用ネンネン＝コローリヨー────!!」
　意味不明な技名と共に、シープギルディは俺とブルーに向かって突進。
　そのもこもこなボディを、俺たちの鼻先に押しつけてきた。
　拳こぶしを振りかぶったブルーだったが、パンチもろとも毛糸じみたボディに呑のみ込まれる。
「むぐっ！」
「！　これ……は……」
　そのまま俺たちは、もこもこに埋もれたまま地面を転がっていった。
「ああっ、待ってくださいまし、二人とも!!」
　イエローが後から追いかけてくる。
　シープギルディも今回は逃走するつもりはないのだろう、場所を移す意図もあるようだ。
　地面と空とが交互に視界に映り、やがて緑が交じってきた。
　幼稚園の裏山にまで転がってきたらしいが……そんなことより、この感触がやばい。
　言うなれば、極上の低反発マットレス。
　最高級の羽毛布ぶ団とん。
　上等な寝具に包まれたような形容しがたい安心感が全身を包み、俺の意識は急激に遠のいていった。

「ぐう……」
「ブルー!?」
　横を窺うかがうと、すでにブルーは眠ってしまっていた。
　愛香でさえも完全熟睡に誘いざなうこの能力、こいつ、見かけによらず強敵だぞ……！
『や、やはり睡眠不足が祟たたってテイルギアの防御能力が完全に機能していないんです！　それとそのシープギルディは、特殊能力特化型のエレメリアンかもしれません!!』
　フォクスギルディみたいな奴やつか……。肉弾戦闘はからっきしだが、思いもよらない能力でこちらを惑わせてくる。厄介なタイプだ。
「イ、イエロー……！」
　薄れゆく意識の中、俺はイエローに手を伸ばした。
　早寝早起きを堅持する慧え理り那な──イエローだけが頼りだ……。
「頼んだぞ……こ、こいつを……倒してくれ……!!」
「え、えええええええええええええ!?　わたくし一人で、ですわよね!?」
　急にアローンバトルを強しいられることになったイエローが、目に見えて狼ろう狽ばいしていく。
　俺もアドリブは弱いし、急に無茶振りをされた時の不安はよくわかるが……今はイエローに任せるしかない。
「……ふうむ、よく脱ぐ戦士として組織ではさほど注目されていなかったが……テイルイエロー、お前はきちんと睡眠を取っているようだな」
　イエローだって変身前とは身体からだが激変しているんだ、一目で看かん破ぱできるはずがない。
　こいつはやはり、ビジュアルやバイオリズムに依よらずに、属性力エレメーラで相手の睡眠状態を判断しているんだ……！
「ど、どうしましょう、とりあえずヴォルティックブラスター!!」
　フォースリヴォンに触れ、雷の銃・ヴォルティックブラスターを出現

させる。
　構え突きつけた銃口がプレッシャーで揺らめいているのか、俺の視界が意識もろともシェイクされているのか、もう判別がつかない。
　あたふたするイエローの顔を目前にして、俺はとうとう睡魔にあらがえず、朝から数えて都つ合ごう三度寝に陥おちいっていった……。

テイルギア設定資料 EX02

フュージョニックバスター

FUSIONIC BUSTER



テイルレッドが三つ編み属性（トライブライド）の属性玉（エレメーラオーブ）を使用することで、レッドのブレイザーブレイド、ブルーのウェイブランス、イエローの合身巨大砲（ユナイトウェポン）を合体させて完成する強力な合体バズーカ。ブレイドとランスも伸長展開しているのだが、やはりイエローの武装の占める面積が大半である。しかし三人分の属性力（エレメーラ）を結集して放つため、ツインテイルズの必殺技の中でもかなり強力。発射時には、テイルギア装着者ですら耐えるので精一杯の圧力がかかる。

ダークグラスパーに放った際は、これまで敵なしだった彼女が防御リソースを神眼鏡（ゴッドめがね）に特化させすぎていたこと、さらに女の子を傷つけることに難色を示していたテイルレッドが戦力を無力化させるに留めたいと強く意識して発射する属性力（エレメーラ）に指向性が生まれたことで、直撃した彼女を全裸にしてしまったが、決して女の子に撃てば百発百中で全裸にする効果があるわけではない。もちろん、エレメリアンに放てば無慈悲に爆散させる。ちなみに発動の起点であるレッドが全員分の武装を集束させる関係上、イエローにとっては密かに強制脱衣プレイを楽しめる禁断の技でもある。特に使って倒す必要もないエレメリアンに対してイエローがフュージョニックバスターの使用を要請する際は、テイルレッドの気づいていないところでおねだりをされているということなので、注意が必要である。

第六話　眠らぬツインテール。

　シープギルディの能力でレッドとブルーが戦闘不能となり、一人対たい峙じするイエロー。
「フッ……戦えるのはお前一人となってしまったな、テイルイエローよ」
　丸くもこもこしたマスコットじみた外見にそぐわず渋い声で告げられ、イエローはびくりと身体からだを震ふるわせた。いつものような、歓喜の震えではない。
　――緊張だ。
　特撮ヒーロー番組が大好きな彼女ならば、自分一人に戦局が託されたこのシチュエーションはむしろ燃える局面のはず。
「ううう……」
　しかしイエローは、幹部クラスではなく決して格上とはいえないこのシープギルディ相手に身震いしていた。
　イエローも、自分一人でエレメリアンを撃破した数は少なくはない。だがそれらは仲間の意識が健在で、側そばで力強く言葉をかけてくれていた時だ。
　仲間の援護なく一人だけでその重責を背負うには、イエローはまだレッドやブルーと比べて戦闘経験が足りない。ゆえにその心構えも形成されていない。
『慧え理り那なさん、気をつけてください！　イエローの火力を全開にして戦っては、それだけ幼稚園から離れていても爆圧や流れ弾で被害を及ぼす可能性も考えられます!!』

　トゥアールはイエローを不安にしないよう、戦闘オペレートにかこつけてなるべく間を置かず話しかけるようにしていた。
　自分の火力が諸もろ刃はの剣つるぎであることはイエローも重々承知している。自らを鼓舞するように強く頷うなずき、イエローは左腕の装備・属性玉変換機構エレメリーションを発動させた。
「属性玉エレメーラオーブ──文学属性ブツク!!」
　眼前に展開した小さなスクリーンに、敵のステータスを探って映し出す能力を発動するのが、文学属性ブツクの属性玉エレメーラオーブだ。
　全身に強力な装備を満載しているため身体強化の補助をさほど必要としないイエローにとって、いかに自分の武器を効果的に叩たたき込むかをサーチできるこの能力は、専用と言っても差し支つかえないほど重宝していた。
　逆に、闘争本能に従って意識無意識合わせて即座に自分流の戦闘を組み立てるテイルブルーは、この属性玉エレメーラオーブの使用頻ひん度どは少ない。
　まして総そう二じ……テイルレッドは、ツインテールの力を信じすぎ、実際それが一番強いという頼もしすぎる状態のため、自分からは属性玉エレメーラオーブはほぼ使用しない。同じ髪型の属性でより強く敬意を払っている三つ編み属性トライブライドを、仲間の要請で使うぐらいだ。この三つ編み属性トライブライドはレッドとの相性が抜群によく、ブルーやイエローは使用しない。
　獲得した属性玉エレメーラオーブは各テイルギアで共用されているが、このように各人の戦闘スタイルや属性との相性により、使用しなかったり、できなかったりと様々だ。
　個性豊かなメンバーであるツインテイルズはこうしてメンバー間の弱点や短所を補完し、ベストなチームワークを構築してきたのだが……。
　頼りの文学属性ブツクのスクリーンに表示された情報は──

「あのふわふわのもこもこのほとんどは外皮──中の本体は針金のように細い？　……それだけですわ……」
　普通の羊のそれとさほど変わらなかった。
　おそらくあの毛を刈り込めば、しょんぼりな中身が姿を現すのだろう。
　とはいうものの、エレメリアンは精神生命体のため、通常の生物と肉体を構成する成分が全く違う。羊じみたもこもこの体毛も、実際には鎧よろいと同じなのだ。バリカンを持ってきて刈るなどという方法は通用しない。
「レッド……ブルー……」
　レッドとブルーの容態を窺うかがうイエロー。幸い、本当にただ眠っているだけだ。
　イエローと視線を合わせるように、シープギルディもしげしげとレッドを見つめる。
「素晴らしい……!!」
　そして滂ぼう沱だと涙を流し始めた。
　だがそれも長くは続かず、すぐさま自らの迂う闊かつさを恥じ入るように戦慄わななくシープギルディ。
「私としたことが、こんな愛らしき天使を地面に横たえるとは……不覚！　者ども!!」
「モケー！」
「モケケケ、モケ」
　シープギルディが涙を振り散らして指示を飛ばすと、次々に戦闘員アルテイロイドが出現し、上等そうな布ふ団とんを地面に敷き始めた。
「テイルレッドをそうっと……優しく運ぶのだ！　よいか、僅わずかでも振動を与えてはならぬ！　……私のこの手では、テイルレッドを布団に連れて行ってやることはできぬからな……」

身体からだがもこもこしすぎていて、シープギルディではテイルレッドを抱っこしてあげることは不可能だ。

寝かしつけてあげることはできても、お布団まで運んであげることはできない──。

異形の怪人の悲哀が、そこにあった。

『何セクハラワードほざいてるんですかブイと一緒に太平洋に浮かべますよ!?』

言葉尻じりを捉えてその悲哀をもセクハラと断じたトゥアールの怒りが、イエローだけに虚むなしく通信される。だが、おかげでようやくイエローも我われに返った。

「！　お、お待ちなさい！　わたくしが寝かせますわ!!」

さすがに戦闘員アルテイロイドに無防備なレッドを触らせるわけにはいかないと、イエローはレッドへと駆け寄り、抱き上げて布ふ団とんまで運ぼうとする。しかし、隣で寝ているブルーも気になるようだ。

「ブルーの分のお布団はありませんの!?」

「見るがいい、むしろテイルブルーは大地と調和しておる！　内なる野生が土つち塊くれの上に雑ざ魚こ寝ねすることこそを本懐としているとは、勉強になる。少女の寝姿にこのようなイレギュラースタイルが存在していようとは!!」

腕組みをしたいようだが、もこもこしすぎていて腕が届かず、自分の胸を中途半端に抱くようなポーズでうんうんと頷うなずくシープギルディ。

その説明で納得してしまったのか、レッドの運搬を再開するイエロー。しかし、何か違和感を覚えたように途中で立ち止まる。

「…………………………………………………………………抱き締めるのに服が邪魔ですわね」

ぼそりと焦点を失った眼めで呟つぶやくと、イエローは一旦レッドを

地面に横たえ、胸アーマーだけを脱衣パージし、布面積の薄いアンダースーツにだけ守られた胸をたゆんと弾ませた。
「う、うふふふ」
　意識のない無抵抗のレッドを抱き締め、邪悪な笑みを浮かべる。シープギルディと戦闘員アルテイロイドは逆に真しん摯しな善意でレッドを慮おもんぱかった。
「な、何という邪悪な表情……！　健すこやかに眠る幼子に向ける眼まな差ざしとは到底思えぬ!!」
　仰おつしやる通り過ぎて反論の余地はないが、イエローは全く気にしなかった。
『慧え理り那なさああああああああああああああんなんて羨うらやましいことを！　私もレッドちゃんを抱き締めてベッドに引きずりこみたい!!』
　トゥアールの悲痛な叫びが響く。
　掛け布団を捲めくったらトゥアールの顔が見え、一瞬で中に引ひき摺ずり込まれる──レッドが起きていたらそんなホラーな光景を幻視したかもしれない。
　すやすやと眠るレッドを無事に布団に寝かしつけ、最後に優しく掛け布団の上からポンポンと叩たたくイエロー。
　慈愛とドＭ愛がミックスされた複雑な笑顔を向けるイエローに、観客に徹していたシープギルディからカンペが差し込まれた。
「待て！　テイルレッドのツインテールは掛け布団の上に置いてくれい!!」
　熱きリクエストに疑問を差し挟むことなく、イエローはレッドのツインテールを掛け布団の上に出した。
「た、確かにかわいいですわ……」
　イエローとシープギルディ、そして戦闘員アルテイロイドたちは、並

び立ってテイルレッドの寝顔を静かに鑑賞している。ブルーはその辺の地面に完全放置され、大地と一体になっているようだ。
「そうであろう。私はよく、仲間に言われるのだ。睡眠という生物の最大の弱点を愛めでることは、フェアではないのではないか、とな。だが、弱いからこそ庇ひ護ご欲よくをそそられる。そうは思わぬか、天使のような寝顔を目まの当たりにして」
「ええ、この寝顔を守りたいですわ」
　ツッコミ不在の恐怖。レッド・ブルーのツッコミ両雄が意識無き今、戦場は秩序なきカオスに侵略されてしまっていた。
　そのマーブル模様の拮きつ抗こうを破ったのは、エレメリアンの本能──。
「……名残惜しいが、ツインテール属性をいただくとしよう」
「はっ⁉」
　シープギルディがテイルレッドのツインテール属性を標的にしたことで、イエローは今自分に課せられた重責を自覚した。緊張している場合ではない。自分が戦わなければ、レッドやブルーのツインテール属性が奪われてしまう。
　胸アーマーを再着衣リバースし、ヴォルティックブラスターを構え、イエローは戦意を燃やした。
「……眠ったままツインテールを奪われて……目を覚ましたら、どんなにつらいことか……！　健すこやかな眠りを愛するだけで、目覚めにまでは心を裂さかないのですか⁉」
「……そもそも眠り属性スリープを持つ者がそれを失えば、ショートスリーパーになるなど健康面でも害を及ぼす恐れがある……。私はその覚悟をして戦っている‼」
「刹せつ那な的な欲望でレッドたちの笑顔を奪わせはしません‼」
　ヴォルティックブラスターを斉射し、戦闘員アルテイロイドを倒して

いくイエロー。シープギルディは絶妙に転がりながら回避し、軌道を変えてイエローに向かってくる。
（昨夜ゆうべはしっかり七時間三〇分眠ったとはいえ……あの技をまともに受けては、わたくしも眠りに誘われてしまいますわ──!!）
　九時から四時半まで、睡眠安定周期を考慮した九〇分刻みの時間。慧え理り那なとしては九時間睡眠がベストだが、きちんと眠れたことに変わりはない。
　年とし頃ごろの女の子はもっと夜更かしをしてテレビを観たり友達とスマートフォンのツールでやりとりをしているのだろう。子供っぽいと思っていた自分の早寝早起きが、今日この戦いにおいては力となることに感謝するイエロー。

『この光景が俺たちの宝物だな、慧理那』

　イエローの脳裏を過よぎる、総そう二じの言葉。
　地球を守る前に、もっと小さな世界……自分の周囲を守らなければ。ご主人様の言葉を思い出し、闘志とは別の何かでイエローの身体からだが熱く燃え上がる。
　すやすやと眠る幼い少女に、爽さわやかな少年の笑顔が重なった。
「はあ、はあ……!!」
　裏山とはいえ、幼稚園は目と鼻の先だ。できるだけ最大火力は使わずに戦局を運ぶ。
　イエローは転がってきたシープギルディに向けて両腰の三連ミサイルを発射した。直前で地面に着弾し、弾幕が視界を遮さえぎる。その隙すきに跳躍し、シープギルディとの距離を詰めると、イエローはシープギルディの脳天に両りよう膝ひざを叩たたきつけた。
　両膝の兵装であるスタンガンを同時に浴び、シープギルディは悶もん

絶ぜつする。
「うぐおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
　さらに両足首の徹甲弾と両爪つま先さきのニードルガンを一斉に発射し追撃するが、それは体勢を崩したシープギルディのもこもこの毛に阻まれて本体にまでは届かなかった。
「くっ……！」
　腰、膝、爪先――下半身のパーツを一気に脱衣パージするイエロー。
「……ど、どうしましょう……ぞくぞくしませんわ……」
『後もう一押しなのに何を!?』
　トゥアールに助けを求めるように通信するイエロー。それもそのはず、自分の脱衣を見て欲しいレッドはすやすやと眠っている。
　レッドが見ていないのにただ脱いでも、そんなものはただの変質者ではないか。
『おいトゥアール！　お前現場に行って二人を起こせ！　お嬢様一人に無理をさせたせいで、何か大変なことになってきているぞ!!』
『尊みことさんは黙ってお嬢様の変態を見守っていてください!!』
　その変態はメタモルフォーゼの方であって欲しいが、とにかく基地では尊が冷静ではいられないほど今のイエローは頼りないということだ。
（どうすれば昂たかぶりますの……!?）
「頭部を狙ねらってくるとは……だが、同じ手は二度と食わぬ！　お前も眠りに落ちるがいい、テイルイエロー!!」
　年々航路利用ネンネン＝コローリヨー――さらに勢いを増したおやすみローリングが、イエローに迫る。
　身体からだの昂ぶりに、沸き上がる衝動に身を任せなければ、イエローは真価を発揮しない。これからも一人きりで戦う機会はあるかもしれない。こんな時に自分を奮ふるい立たせる方法を見つけなければ、こ

れからツインテイルズとして戦力にはならないだろう……。
『慧え理り那なさん！』
　動きに精彩を欠いてきたイエローに、トゥアールが通信で檄げきを飛ばす。
『レッドの側そばに寄ってください！　そして、レッドのお顔をまたぐように立ってみてください!!』
「こ、こうですの!?」
　軽やかなステップでシープギルディの突進を回避、イエローは言われるがままにレッドの顔をまたぐように立った。ブルーが眠っている今だからこそできる、あられもない行為だ。
　シープギルディは回転形態を解除して立ち上がると、怒りで身を震ふるわせてイエローを糾きゅう弾だんした。
「む、無防備なお子様に何をしておる……!!」
　敵の怒りなど何するものぞ、トゥアールはさらに息を荒らげて通信した。
『慧え理り那なさん……今あなたは、下半身だけを脱いでいるんです。上は着込んで下半身は脱いで……そんな状態をご主人様に晒さらして、どうです…………ぞくぞくしてきませんか？』
「は、はい……」
　トゥアールの万死に値する指摘はしかし、的確にイエローの内面を見抜いていた。イエローは途端に口角を吊つり上げてびくびくと震え始める。
『お前はお嬢様に変なことを教えるな────っ!!』
『いいえこれは慧理那さんが望んでいた事実です!!』
　格闘技におけるセコンドは、選手のフィジカルのみならずメンタルもベストに整えることができて初めて一流と呼べるが……まさにトゥアールはテイルイエローの力を引き出す名セコンドといえるだろう。

　イエローの裡うちに眠るドＭを見いだし、パンドラの箱を開け放った張本人なだけはある。
「おのれ……神聖なる戦いの最中、新たな脱ぎ方を模索するとは……卑ひ猥わいな!!」
　ぐうの音も出ない指摘だが、イエローは全く気にしなかった。
　レッドをまたぎ終わると、充実した表情でシープギルディへを歩み寄っていく。
　満たされたドＭが迫ってくることほど恐ろしいものはない。だが、シープギルディにも退けない闘志が漲みなぎっていた。
「許せぬ！　健すこやかに眠る幼子に何たる無礼！　テイルイエローよ、眠りを愛する者として、私はこの命を捨ててでもお前を倒す!!」
　シープギルディは回転力を倍加させ、全力でイエローに突っ込んでいく。
　後先考えぬその乾けん坤こん一いつ擲てきこそ、イエローが待望していたものでもあった。
「属性玉エレメーラオーブ――巨乳属性ラージバスト!!」
　ブルーには全く発動できない、これもイエロー専用と言って差し支つかえない属性玉エレメーラオーブ、巨乳属性ラージバストを発動する。
　イエローの一歩手前に、薄黄色の半透明な正円の防御壁が出現した。
「何い!?」
　完全にカウンターとなってしまったため静止適かなわず、強力な弾性を備えた防御壁に激突し、勢いそのままに跳ね返されるシープギルディ。
「う――――――わ――――――――っ!!」
　もはや、自分の意志で軌道を変更することも適かなわない。
　不規則に並び屹きつ立りつした裏山の木々にぶつかっては跳ねるその光景は、まさにピンボールを思わせた。

巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブの大きな弱点としては、鍋ぶたをもう一回り大きくした程度の大きさでしか具現化できないことだが、それは皮肉にもシープギルディの回転突進が過たずイエローの真ま芯しんを捉えていたことがカバーしてしまった。
「今ですわ！」
イエローはあえて着っぱなしだった上半身の武装も未練なく脱衣パージし、手にしていたヴォルティックブラスターを天高く放り投げた。
「完全解放ブレイクレリーズ――‼」
散り散りになった武装はイエローの頭上で合体し、テイルイエローの最強武装・合身巨大砲ユナイトウエポンが完成する。
「オーラピラー‼」
合身巨大砲ユナイトウエポンの主砲以外が一斉に火を噴き、雷の尾を引いてシープギルディへと殺到する。
弾着がシープギルディを円柱型の結界に拘束バインドし、激しいスパークを迸ほとばしらせる。
「何のこれしき……！」
脱出不可能の拘束を受けながらも、シープギルディはお布ふ団とんですやすやと眠るレッドを見て最後の闘志を燃やす。
転がろう、眠りに誘おうと、懸命に前のめりになる。
「ぐうっ……ま、負けるものか……こんな変質者が側そばにいては、レッドの天使の寝顔が汚れてしまう……それだけは断じて許せぬ‼」
「レッドの寝顔はわたくしが守りますわ‼」
世にも説得力のない決意を投げかけ、イエローが合身巨大砲ユナイトウエポンの砲前へと跳躍する。
主砲から発射された巨大な光線をまとったイエローが、天高く振り注ぐ。それはまさに、彼女自身が一条の雷光となった瞬間だった。
「ボルティックウウウウウウウ！　ジャッジメント

――――――――――ッ!!」
　必殺の蹴しゆう撃げきでシープギルディを貫き、イエローは勢いそのままに着地した踵で地面を抉えぐり砕いて滑走する。
　眠っているレッドが砂すな埃ぼこりをかぶっては一大事だと、キックを放つ角度もちゃんと計算していたのだ。
「ぐわあああああああああああああああ……！　く、無念だ……！　間違いなく健全な睡眠生活を送っていながら……何な故ぜお前はそこまで不健全に育ってしまったのだ、テイルイエローよおおおおおおお!!」
　睡眠は肉体を健全に育てるが、精神面はその限りではない。健すこやかにドＭに育ってしまった敵を前に、睡眠の達人はここに完敗を喫したのだ。
　報むくわれたことといえば、爆散するその瞬間、シープギルディが未いまだ健すこやかに眠るテイルレッドを見て満足そうにしていたことだろう――。

「や、やりましたわ……」
　イエローは露出度多めのままレッドの布ふ団とんへとにじり寄り、「全力で戦ってもはや立っているのもままならないですわ」と自己弁護するかのようにふらつきながら、布団の中に頭を突っ込んだ。
『あーっ！　慧え理り那なさん、ずるい！　ちょっと待ってください、私も今そっちに行きますから!!』
　トゥアールが尊みことに止められているような騒がしい音が通信機越しに聞こえてくるが、イエローは作戦行動を続ける。
　イモ虫のように身体からだを律動させて尻しりを高く上げ、今まさに全身を布団の中に潜り込ませようとした瞬間―。
「……何やってるの、イエロー」
　すでに目を覚ましていたらしいブルーに、背後から止められた。

「ブ、ブルー!?　いつの間に!?」
「そーじの寝込みを守るのは慣れてるから……どんなに眠くても起きちゃうのよ……。毎晩……イエロー相手にじゃないけど、同じことをやってるから……」
　言うほど簡単なことではあるまい。凄すさまじい精神力の為なせる業わざなのだろう。ブルーは疲ひ弊へいしきっていた。
　ご主人様との添い寝を食い止められ、しゅんとするイエロー。
『イエローに助けられたんだから、怒らないでくださいよブルー！　おめおめと敵の術中に嵌はまったのはあなたなんですから！』
「わ、わかってるわよ。まさか一発で眠っちゃうなんてね……」
　トゥアールのフォローを素直に受け入れるブルー。
「助かったわ。ありがと、イエロー！」
　油断していたことは自覚しているのだろう。戦闘をイエロー一人きりに任せてしまったことを恥じ入るように頬ほおを掻かき、イエローに礼を言うブルー。
「はい！」
　満たされた笑顔で、イエローは頷うなずいた。
　無防備な仲間を、そして世界を守り切るという大役を完かん遂すいしたのだ。今日の出来事は、イエローをまた一つ成長させたはずだ。
　右手を差し出し、力強く握手を交わす二人。レッドの顔面をまたいではあはあしている戦闘映像は、トゥアールが封印してくれることを祈るのみだろうが。
『慧え理り那なさんはやっぱりヒーローですね……。無防備な、何してもいいレッドを目の前に葛かつ藤とうをしても、最後には敵と戦うことを選んだんですから……。さあ、すやすや可か愛わいく眠って私たちを誘ってるレッドを基地に運んできてください。みんなでレッドたんはあはあパーティーをしましょう』

　当然レッドは連れて帰ったが、行われたパーティーは意識があろうがなかろうが愛あい香かにとっては無防備で何をしてもいいトゥアールを主役とした、バイオレンスカーニバルだった。

　人は眠るから無防備なのではない。

　広い世界には、睡眠の是非を問わない蛮族も存在するのだから。

キャラクター名鑑
EX01

キャットギルディ

CAT GUILDY

DATA

身長：288㎝
体重：328㎏
属性力：猫耳(キャット)属性

タイガギルディ配下のエレメリアン。マイペースな戦士で、上官であるタイガギルディが倒されたことに気づくまでかなりの時間を擁したらしい。強さを認めた戦士の足に自分の尻を擦りつける習慣があるが、これは敵味方問わず大不評。猫耳とツインテールの親和性の高さを説き、テイルレッドのフォースリヴォンを猫耳に見立てるなど、着眼点はいい。

キャラクター名鑑
EX02

イッカクギルディ

IKKAKU GUILDY

DATA

身長：290㎝
体重：277㎏
属性力：八重歯(ダブルトゥース)属性

クラーケギルディ配下のエレメリアン。そう名乗るとテイルブルーの怒りを買うのは火を見るより明らかなのだが、あえてそうするあたり部隊への誇りは強いようだ。笑顔を引き立たせる八重歯が大好きで、乳歯でも鍛えれば八重歯になるという謎の信念を持つ。立体的な動きを交えた独自の剣技を得意としている。

第七話　大人の服装ですわ。

　放課後のツインテール部部室では、慧え理り那なの可か愛わいらしい溜ため息いきが何度か木こ霊だましていた。
「ふぅ……」
　さらにもう一度。俺は、思い切って聞いてみることにした。
「なあ慧理那……何かあったのか？　悩みがあるなら話してみてくれないか」
　桜さくら川がわ先生は理事長のところに行ったようで、まだ部室には来ていない。
　同年代だけで悩みを打ち明けやすいと思ったのか、慧理那はぽつぽつと語り始めた。
「もうすぐ、身体測定がありますでしょう？」
「え、ないわよ？」
　慧理那の前置きを宇宙へと放ほう逐ちくする愛あい香か。その目からは光が消えていた。
「愛香さ──」
「ないのよ」
　飛び上がる勢いで席を立ち、愛香をからかおうとしたトゥアールだったが、そのあまりの瞳ひとみの冷たさに恐れをなしたのか……何度か瞬まばたきをした後、一旦席に座り直した。
　生徒会長たる自分よりいち生徒が学校行事を把は握あくしている面めん妖ようさには触れず、慧理那は大人の対応で本題に入った。
「わたくし、変身しなくてもテイルイエローの時のような年相応の女性

の体型になりたいのです……」
　自分の胸を見るための俯うつむきが、そのままさらなる溜息に繋つながってしまう慧理那。
　なるほど。身体測定が近くなって、周りに比べて幼い自分の体型が気になりだしたのか。
　こんなことを慧理那が言っているのを聞いたのは、今日が初めてじゃない。
　慧理那も愛香ほどじゃないにしろ、自分の体型に悩み、成長したいと願っているんだ。
　愛香ほどじゃないにしろ。
　俺ももう少し背が欲しいと思ってるし、こういう無い物ねだりな望みは誰だれもが一つや二つは持っているものなんだろう。
「イエローの体型は年相応じゃないわ、あれはトゥアールの発明が不完全なせいでできあがった偽いつわりの姿なの……あたし、今のその姿の会長が一番素敵だと思う」
　愛香はまだ目に光が戻っていないが……妙にさっぱりとした笑顔だった。
「愛香さんの戯ざれ言ごとに同調するのは癪しやくですが、私も同意見です。いいですか慧理那さん、幼さという輝きを自ら捨て去るのは罪深いことです。ぶっちゃけ、イエローのギアにハイブリッドしてしまった巨乳属性ラージバストの機能を除去しようと、何度試みたことか……」
　トゥアールはたまに、強烈な情報をさらっと口にする。
　テイルギアのメンテナンスの度たびに、そんな試行を重ねていたとは。
「会長、あたしたちは一歩ずつ自分の足で歩いて行こう？　輝かしい明日に向かって」
　捲まくし立てるように慧え理り那なを諭さとす愛あい香かは、まるで

目の前に立ちはだかる身体測定という絶望に、心の最奥までをも凍いてつかせてしまっているようだった。
　中学の時も、身体測定の日はだいぶツインテールが不機嫌だったからなあ……。
「愛香さんの明日は〝無〟しか待ち受けていませんが、慧理那さんには十分希望があります。もちろん私は今のままのありのままの慧理那さんでいて欲しいですが」
「そしてあんたの明日は今日、ここで終わるわ」
「ひいやああああああああああああああポエミィな殺さつ戮りく宣言!!」
　とうとう我慢できなくなって茶化し始めたトゥアールを、天井目掛けドラッグアンドドロップする愛香。
　こういう話題になった時、俺が言えることは少ない。
「慧理那もイエローも、どちらも慧理那のツインテールなんだ。俺は、別々に考える必要はないと思うけどな……。むしろ、身長とか体重とかより、ツインテールを詳しく身体測定して欲しいくらいさ」
　だからこそ素直な気持ちを伝え、慧理那に少しでも安心して欲しいと願う。
「ツ、ツインテールの身体測定……ですか……？」
　不思議そうにする慧理那。何もおかしなことを言ったつもりはないんだが。
「あっ……満点な回答……これですよ愛香さん、我が欲よくに囚われずこういうことを自然に言える人がモテるんです」
「そ、そーじが身体測定したいなら、まあ……別にいいけど……？」
「そして満点のむっつりですね」
　振り返ると、愛香が妙にくねくねしていた。
　愛香がくねくねすると、ツインテールもくねくねする。

　それを見た俺は、優しい気持ちで胸が一杯になるんだ。
「でもこのように幼い体つきですと、どれだけ前向きに考えていても――身体測定の時は特に、自信が無くなりますの……。トゥアールさんの大人っぽさが羨うらやましいですわ」
「人それぞれですよ。私は、慧理那さんの悩まれているその幼さにこそ憧あこがれますから」
　その言葉は、いつもの冗談のようでいて――少しだけ寂しさが内包されているように感じられた。
「――そうだトゥアールさん、その白衣を貸していただけませんか？」
「え？　服を貸してと言われれば、この場で下着まで脱いで全てお貸ししますが」
　トゥアールの申し出を丁重に辞退し……慧え理り那なは、白衣だけを受け取った。
「よっこらトゥアール……」
　そしてトゥアールは謎なぞの掛け声と共に、すぐさまどこからか取り出したもう一着の真新しい白衣をまとう。譲れないこだわりなんだな……。
「駄目だって会長！　トゥアールの白衣なんて着たら、呪のろわれて脱げなくなっちゃうかもしれないわよ‼」
「この世に脱げない服はありませんわ、津つ辺べさん」
　哲学の域に肉薄する壮大な信念。なんて確信に満ちた微ほほ笑えみなんだ……。
　これで迫る身体測定は不安だっていうんだから、人間ってままならないものだな。
　早速トゥアールの白衣を羽は織おった慧理那は、嬉うれしそうに腕を上げたり、回ってみたりして見た目を確かめていた。
「ふぇ、ぶかぶかですわ……」

　身長差がある上に、胸の大きさが規格外のトゥアールの白衣だ、前を閉めないとはいえ慧理那には大きすぎる。
　自信なさげに腰の前で添え重ねられた手は、袖そでから指がちょっとしか出ていなかった。
「すみませんトゥアールさん……裾すそが床についてしまいますわ……」
「大丈夫です、自動洗浄機能がついてます！　そんなことより……っはあ～～～～、慧理那さんめっっっっちゃお似合いですよお……いいですねえ、萌え袖……」
　トゥアールは組んだ手を頬ほおに添え、うっとりとした目で慧理那を見つめる。
「もえそで……？」
　意味はよくわかっていないようだが、褒ほめられたことで自信がついたようだ。
　そしてトゥアールがどこからか出した姿見で、全身を確認する慧理那。
「何となく、大人っぽくなれたような気がしますわ！」
　それは決して勘違いではないと思う。普段と違う服装というのは、それだけで大人びて見えたりするものだ。
「あ、あの、わたくしこれから尊みことと玩具店に行くのですが、これを着たまま外出してみたいので……今日一日、白衣をお借りしてよろしいでしょうか？」
　おずおずと申し出る慧理那。
「玩具店の店員の方によく、『いつもおもちゃ買ってもらえていいね～』と微笑みながら仰おつしやられてしまうので、大人っぽい白衣を着て行けばそう思われることもなくなるかと……」
　寄り道だから陽よう月げつ学園高等部の制服を着ているだろうに、そ

れでも子供に間違われるとは、ちょっと不ふ憫びんだ。トゥアールは笑顔で快諾する。
「というより、差し上げますよ？　白衣は無限に替えがありますし、私以外が着ても自動洗浄以外の特殊機能は発動しませんので」
　例えば、異次元に繋つながっているらしきポケットとか……か。慧え理り那なが着ている分には、意図せず奇妙な機能が発動しないというのは安心だ。
「ありがとうございます、トゥアールさん！」
「でも会長、白衣で学校の外を出歩くと不思議に思われるかもしれないわよ？」
　愛あい香かは顎あごに手をやってしげしげと慧理那を見つめながら、一抹の不安を口にする。
「っはー、貧すれば鈍どんすると言いますが、貧乳はファッションセンスも鈍ドコ鈍ですね！　白衣こそあらゆるコーデに対応する最強のアウターなんですよ!!」
「こうなる前に、ファッションセンスはちゃんとしておきたいじゃない？」
　全てを諦あきらめたようなツインテールを揺らしてトゥアールを指差す愛香。いつでもどこでもどんな時でも白衣をまとうトゥアールは、自信を持って慧理那に白衣を勧める。
　それでも最後には慧理那の意志を尊重し、愛香も白衣の慧理那を激励した。

　部室を出て、桜さくら川がわ先生のいる理事長室に向かう慧理那。こっそり後をつけるというほどでもないが、俺と愛香とトゥアールは、少し離れて歩きながらそれを見守った。
　まだ時間が早いので、放課後にしてはけっこう生徒が残っている。

彼ら彼女らは、次々に白衣の慧理那に注目していった。
「会長が……白衣を!?」
「会長いい……」
「怪しい薬の実験台にされてえ……！」
そこかしこで漏もれ聞こえる賛嘆。慧理那は、恥ずかしそうに袖そでで口くち許もとを隠す。
その仕草が、サイズの合っていない白衣の袖と相まって可か憐れんさを際立たせる。
白衣の珍しさが好評なようだが、そうなると納得できない人が。
「あのきゃわゆさを演出する白衣は、私がずっと着ているものなのに……!!」
真新しい白衣の袖を噛かんで悔しがるトゥアール。
「日頃ごろの行いのせいでしょ、学校で暴れてる印象が強すぎるのよあんたは」
「私は校内で暴れる猛獣の被害者なんですけど!?　なぜワンセットで私の印象まで悪くなるんですか!?」
トゥアールを軽く小突きながらも、慧理那を見る愛香の目は優しい。
鍛たん錬れんが好きで、向上心豊かな愛香だ。大人っぽくなりたいと願い、努力している慧理那を見るのは、自分も奮ふるい立たせられるのだろう。

やがて理事長室から出てきた桜川先生と合流し、下駄箱に向かう慧理那を見送って、俺と愛香とトゥアールは、満足げな気持ちで部室へと戻るのだった。

◇

他のメイドたちは車で先に帰らせ、尊みことは慧え理り那なと行きつけの玩具店を目指していた。

新商品のおもちゃが発売日となることが多い土曜日はもちろん、食玩などの新作が出る平日でも、慧理那はこうして玩具店に足繁く通うのだ。

「なるほど、大人びた服装を試されようと……それでトゥアールの白衣を借りているのですね。お似合いです、お嬢様」

「うふふ、ありがとう！　今度、尊のメイド服を着せてもらっていいですか？」

「もちろん構いませんが、このメイド服は構造的にサイズがピッタリでないと胸元から下着が見えてしまいまして……」

慧理那と尊が談笑しながら歩いていると、いつしか周囲の空気がぬっとりと淀よどみ始めたように感じられた。

妙な気配を察知し、おもむろに背後を振り返る尊。

そこには──一体いつからか、でっぷりとした体たい躯くの怪人がいた。

「うおっ、何だぁ！　お前はあっ!!」

「フフフ、お構いなく。通りすがりののハムスターギルディだ」

頭と手足は妙に小さく、愛玩動物じみた円つぶらな瞳ひとみを煌きらめかせている。

そのコミカルな見た目と裏腹、洋画吹き替えの大御所の声優のような渋い声だった。

まるで既き知ちの仲のように挨あい拶さつされ、一瞬戸惑う尊。

「エレメリアンじゃないか……！　当たり前のように名乗るな、気安く通りすがられてたまるか!!」

すぐに気を切り替え、慧理那の前に庇かばい出る。

歯は噛がみして主人の安全確保の最善策を思考する尊。

「小さなお嬢さん……君に惹ひかれ、少し後方を一緒に歩いていただけだ。気にするな」
　限りなくポジティブに改変されたストーキング行為を堂々と自白するエレメリアン。
　その厚かましさに、上官の顔が見てみたい、と尊は内心毒づく。
「う、うう……何が目的ですの……？」
　久々にエレメリアンにつけ狙ねらわれ、慧理那は狼ろう狽ばいする。
　今の慧理那には、エレメリアンと戦う力がある……だがここで、敵の目の前で変身するわけにはいかない。
「よくぞ聞いてくれた……俺は萌え袖属性プリテイスリーブ──萌え袖そでを愛する戦士！　そう、今の君が惜しみなく輝かせている……それが目的なのだ!!」
　ビシリと慧理那の袖口を指差し、自身の属性を明かすハムスターギルディ。
　萌え袖。言葉の意味はわからず仕舞いだったが、トゥアールと同じことを言っている。
　以前戦った敵の属性、眠り属性スリープと語感が似ているのが、妙な偶然だった。
「ふむ……しかし妙だな、それほどのツインテールを持ちながら、君からはまるでツインテール属性を感じないぞ……？」
　ぎくりとする慧え理り那な。
　テイルブレスの認識撹乱装置イマジンチヤフのおかげで、慧理那は日常生活を送る中でエレメリアンにツインテール属性を感知されずに済む。しかしこうして間近で見られると、それが逆に不自然なことになってしまうのだ。
　幸いハムスターギルディは特に追及するつもりもないようで、尊みことにも審美の目を向けた。

「そちらの年とし増まからは、ツインテール属性をほどほどに感じるぞ。まあ、励め」
「何を偉そうに！　だいたい私はツインテール属性が無いから変身できないと──」
「み、尊!!」
　慌あわてて制止する慧理那。尊はツインテイルズ関連の秘密を悪意無くうっかり口にしてしまいそうになることが多い。
　しかし、慧理那も今のハムスターギルディの発言には引っかかるところがあった。
（尊はイエローのブレスをつけても変身できず、トゥアールさんからツインテール属性がないとはっきり告げられたのですが……）
「お嬢様、お逃げください、ここは私が!!」
　慧理那を護まもるため、ハムスターギルディへと果敢に拳こぶしを繰り出す尊。
　尊を障害と認めたハムスターギルディは、繰り出された拳を避けることなくそのでっぷりとした腹で受け止め、彼女を反動で空高く舞い上げてしまった。
「うおわああああああっ⁉」
「み、尊ーっ！」
　尊の声がぐんぐん遠ざかっていく。
　ハムスターギルディは、怪け我がをさせないよう狙ねらって飛ばしたようだ。何百メートルも飛ばされた尊は歩道の植林に突っ込み、葉っぱがクッションになって事なきを得た。
　しかしさすがは神しん堂どう家の警護主任、怖じることなくすぐさま木から飛び降り、慧理那の元へと走る。その間にハムスターギルディは、じりじりと慧理那ににじり寄っていた。
「いい萌え袖そでだ……お嬢さん、袖口からちょこっと見えるその小さ

なお手々に、俺を乗せてはくれまいか」
「ふえぇ……っ!?」
　二メートルを超える巨きよ躯くでありながら、手乗りハムスターになりたいという尋常ならざる野望。
　胸に拳を添えていやいやをする慧理那だが、その仕草が一層萌え袖を強調してしまう。
　ハムスターギルディはさらに闘気を高め、その完成された萌え袖に歓喜する。
「お手々に乗せてもらえないのであれば……俺の背中に乗ってくれい!!」
　慧え理り那なの首根っこを摘つまんで背中に乗せると、現実のハムスターじみた忙せわしない挙動で一目散に走り出した。
「きゃ――――――――――――――――――――っ!?」
「フフフ……萌え袖そでからちょっとだけ出た指で、背中を摘まれる感触……！　生きていると実感できる……！　その幼さが、背中から俺の身体からだを駆け巡るのだ!!」
「□□□□□□！」
　エレメリアンに攫さらわれていることより、その幼いという言葉にショックを受ける慧理那。
　趣味嗜し好こうで生きるエレメリアンは感情をストレートに表すため、お世辞とは縁のない存在だ。それだけに、皮肉にも彼らが寄越す見た目に対しての評価は、真実だと信頼できる。
　やはり大人っぽい服を着ただけでは、大人の真ま似ね事をしているに過ぎない。形から入ることさえできないほど、自分は幼いのだ……。

「な、なんてことだ……お嬢様!!」
　タッチの差で追いつけず、エレメリアンの逃走を許してしまった。

　尊みことは、おそらく総そう二じたちもエレメリアンの出現を探知しているだろうと思いながらも、いてもたってもいられず電話で報告。
　そしてすぐさま、慧理那を追って走り出した。

◇

　桜さくら川がわ先生からの電話と、トゥアールがエレメリアンの反応を探知したのはほぼ同時だった。　俺と愛あい香かは矢も盾たてもいられず部室から地下基地へ急行し、現場へ出撃する。
　何よりも恐ろしいのは、エレメリアンが慧理那を乗せて逃走中という桜川先生の報告だ。
　エレメリアンが人間を誘拐。にわかには信じられないが、絶対に阻止しなければ。
　テイルブレスの認識撹乱装置イマジンチヤフで強大なツインテール属性の反応を秘ひ匿とくされている以上、エレメリアンは慧理那に別の属性を見み出いだし──攫おうとしているのだろう。
『エレメリアンの逃走経路を先回りするように転送しました、そこから現場に向かってください!!』
「わかった!!」
　トゥアールの通信に応おう諾だくした俺は、もはやブルーの髪紐属性リボンでの飛行能力に頼るのももどかしく、最短距離でビルからビルへの跳躍を重ねる。
　程なく眼下に爆走するエレメリアンを認めた俺は、一気にビルの屋上から飛び降りた。
「その子を放せええええええええええええええええええええええええええええええ!!」
　俺は地面に着地ざま、エレメリアンの大きな横腹に回し蹴げりを見

舞った。
「ぐああああっ、このちっちゃなおみ足で放たれるとてつもなく重い蹴りは……っ!!」
　ハムスターギルディから振り落とされて宙に舞った慧え理り那なを、しっかりと抱き留とめる。
「テイルレッド……」
　慧理那はとろんとした目で俺を見上げてきた。
「大丈夫か！」
「ええ、わたくしは大丈夫です……はあはあ……ありがとうございますわ……はあはあ」
　怖かっただろう……！
　それに、かなり息が荒い。気丈に振る舞っているが……高速で連れ回されたことで、強烈なＧを受けツインテールが疲ひ弊へいしてしまったのでは。
　おのれ、ハムスターギルディめ!!
「お嬢様ぁ――――――――――――っ!!」
　人類の限界に迫る速さで走ってきた桜さくら川がわ先生に慧理那を託し、避難してもらった。
「くっ……超絶にキュートな萌え袖そでが……！」
　去りゆく慧理那に未練がましい視線を送るハムスターギルディ。その眼前に、ブルーが着地する。
「観念しなさい！　……ったく、袖が余っちゃうことが好きだとか……普通は意識してそうならないように自分に合った服を選ぶものでしょ、女の子なら特にね」
　女の子としての立場から、萌え袖を愛する怪人に物申すブルー。
　ハムスターギルディはブルーを見て一瞬「ひっ」と声を引きつらせるも退こうとはせず、そのくりっとした目に怒りの炎を灯ともした。

「萌え袖とは女の子の背伸びの産物……成長への憧どう憬！　すでに凶悪な戦闘生命体として完成してしまった貴様には、この愛らしさが遠き存在であることも無理はない!!」
「じゃあたっぷりと味わわせてあげるわ……その戦闘生命の完成した拳こぶしをね」
「落ち着けブルー！」
　愛玩動物にガンをつけ、拳をバキバキと鳴らして威い嚇かくするブルーを制止する。
　しかし、ハムスターギルディの憤ふん慨がいは続く。
「萌え袖とはもっとも遠き修羅に生きる闘士よ、せめて理解できぬか!?　袖からほんの少し垣かい間ま見える小さな指……それはすなわち、大地に芽吹いた瑞みず々みずしい新芽を見るが如ごとく！　萌え袖には生命の喜びが、祝福が内包されているのだ！　それがわからぬか!?」
「わかんない」
　渾こん身しんの演説を〇コンマ数秒で理解放棄し、ブルーはハムスターギルディの鳩尾みぞおちに容よう赦しゃのない鉄拳を見舞った。
　常に袖から指を全て出して備えておかなければ、敵を殴なぐれないだろう──。
　萌え袖そでに対する一つのアンサーが、ここにあった。
「お、おふ……せ、せめて人間と会話がしたい……壁に向かって話しているようだ……!!」
　怪人の哀切極まる訴えが胸を打つ。
「ププププププ────そのエレメリアンめっちゃ真実を捉えてるじゃないですか!!」
　トゥアールの笑い声が聞こえる。彼女が基地から通信していると思い込んでいた俺は──避難した慧え理り那なと桜さくら川がわ先生の安否を

気遣って後ろを振り返った時、その傍そばに仮面ツインテールの姿で立っていたことに不意を突かれ、思わず二度見した。
　慧理那が狙ねらわれたことで心配になり、駆けつけたのだろう。
　そして向き直った俺の隣では「戦いが終わったら同じ威力であいつに腹パンね」、と恐ろしい言葉が聞こえた気がするが、気のせいだろう。テイルギアのパンチ力は一〇〇トンだからな、気のせいじゃなきゃ困るな。
「い……出でよ、戦闘員アルテイロイドたち!!」
　ハムスターギルディの号令で、どこからともなく戦闘員アルテイロイドたちがモケモケと現れる。
　しかし、戦闘生命と称されたブルーには、アスリートのような試合開始の合図など存在しない。戦闘員アルテイロイドが整列を終える前に涼しいツインテールで突っ込んでいき、次々と薙なぎ倒していく。戦闘員アルテイロイドはブルーに任せ、俺はハムスターギルディと向き合った。
　気がかりなのは、慧理那を誘拐しようとした点だ。あくまで狙うは人間の心、決して危害は加えないというこいつらエレメリアンの持つ誇りに、俺は言ってしまえばある種の信頼のようなものを抱いだいていたからだ。
「人間を攫さらおうとするなんて、お前たちらしくもない……誇りはどうした!!」
「違う！　ただ背中に乗ってもらっただけだ！　萌え袖を我わが背に感じたかった！　誇りのままに生きただけなのだ!!」
　俺の追及に、ハムスターギルディは拳こぶしを握り締めて反論する。
「……先ほどテイルブルーは俺の萌え袖への愛を否定したが……その浅はかさがそもそも間違っているのだ。愛に是非を問うなど笑止。持って生まれた属性に生きることを放棄した瞬間、俺たちは〝生命体〟ではな

くなるのだからな……!!」
　円つぶらな瞳ひとみを寂しげに伏せ、ハムスターギルディはなおも訴えを続ける。
　やはり俺たち人間とエレメリアンは、どこまで行ってもわかり合えないのか。
　悲しいすれ違いと戦いを繰り返すしかできない運命さだめなのか……!!
「ブレイザーブレイド!!」
　炎の剣を手にし、でっぷりとした怪人へ疾しつ駆くする。
「────ハムンッ!!」
　斬ざん撃げきを躱かわしたハムスターギルディは、俺の周囲を旋回し始めた。
　まるで回し車を走るハムスターのようなコミカルな動きだが、かなりの速度だ。気を抜くとあっという間に翻ほん弄ろうされてしまうだろう。
「……はっ……!?」
　言ったそばから、ハムスターギルディが背後から出し抜けに突っ込んできた。何とかブレイザーブレイドで弾はじくも、またすぐに円運動に戻る。
　意表を突く攻撃は、そこから何度も繰り返された。
　基本は円の動きだが、先読みして進行方向上で待ち構えようとすると、逆に直前で軌道を変えて一撃を見舞ってくる。そしてすぐにサークルを形成し直して隙すきを窺うかがう……完成された動きだ……！
「袖そでからちょっとだけ指を垣かい間ま見せる萌え袖の如ごとく、基本の防御旋回から一瞬に賭けて僅わずかに飛び出す攻撃……それがお前の必勝戦法ってわけか!!」
「フッ……この疾走うごきの要随を一目で掴つかむとは、さすがはテイ

ルレッド！　お前もさぞ萌え袖が似合うであろう……！　ハァァァ……ムンッッッ!!」
　ハムスターギルディが白い何かを放ってきた。
　まるで意志を持ったように俺の袖を通って着せられたそれは……男物の大きな白いシャツだった。
「うむ！　さすがはテイルレッド、即興のシャツを見事に着こなす萌え袖ぶりよ!!」
　腕組みをし、満足げに何度も頷うなずくハムスターギルディ。
　いや、本当は俺、このぐらいのシャツを普段着てるんだが……。
　袖をまくろうにも脱ごうにも、手っ甲のパーツがつっかえて動かず、厄介だ。
　まんまと奴やつの属性である萌え袖とやらになってしまった俺の元へ、猛然と走り込んでくる一陣の風。
「お待ちなさい！　レッドたんにぶかぶかのシャツを着せるところまではよしとします！　しかし未熟者のあなたは、単純にテイルギアの上からシャツをかぶせただけ……萌え袖にはなっていても、ところどころアーマーが邪魔をしているのがわかりませんか!!」
　ああ、とうとう仮面ツインテールが物申しに現れた……。
「特にせっかくの腰アーマーがシャツを押し上げていて、シャツとの境目からちらっと見える太ふと股ももという、裸Ｙシャツのシチュエーションが十全に活いかされていませんよ！　おとなしくひまわりの種でも食ってなさい未熟者!!」
「愚かなのは貴様だ、仮面の女！　俺が見たきは萌え袖のみ！　下半身がどうなっていようがどうでもいいわ!!」
「下半身めっちゃ大事でしょうが！　……ごほん、完成させた美の中で一点の極美を求めないから、あなたは未熟者だというのです!!」
　仮面ツインテールの叱しつ責せきに気け圧おされ、ハムスターギル

ディは天てん啓けいを受けたように俺を凝視し始めた。
「ぬっ……何という妄想力……貴様が思い描く、裸Ｙシャツ＋萌え袖そで……パーフェクトなる存在に進化したテイルレッドが、この俺の脳内にも伝わってくるようだ……!!」
　やめてくれませんか……。
　さらに闘気を増したハムスターギルディが、俺への攻撃を再開する。
　俺はもはや着せられたシャツを脱ぐのももどかしく、己がツインテールを揺らしながら、敵の変幻自在な動きを掴つかむべく精神を集中する。
　奴やつの足音だけに耳を澄まし、それ以外の周囲の音全てをシャットアウトするんだ──。

「いやーやっぱ戦闘員アルテイロイドは弱いわねー!!」
「モケケケー!?」
「モッケケケケー!!」
「助モケ────ッ!!」
　ブルーが綿わた飴あめを千ち切ぎるような気軽さで戦闘員アルテイロイドたちをブッ飛ばす快音がスポンスポンと響いてくる。
　ものすごいダイレクトな訴えをしてる戦闘員アルテイロイドもいたような気がするが……幻聴か。
「お嬢さん、すぐに制服を脱いで、シャツ一枚になってください！　あの齧げつ歯し類るいに真の裸Ｙシャツを見せてやりましょう!!」



「トゥア……仮面ツインテールさん！　わたくしは大丈夫ですので！　あの、手……お尻しりに手が…………ぬ、脱ぐ時は自分で脱ぎますので!!」
「お嬢様から離れんかこの変質者が!!」

　耳じ朶だを爆撃する喧けん騒そうに俺の聴覚が助モケーと訴えているが、懸命に精神を集中する。
　いや、そもそも未熟者の俺が付け焼き刃で耳を澄ましてどうする。俺が澄ますのは──
「さあテイルレッドよ、今こそ萌え袖そでの時──！」
「□□□□□□！」
　たとえ雑音に惑わされても、研とぎ澄ましたツインテールの揺れは真っ先に神経の電気信号が感知する。僅わずかに舞い上がったツインテールから気流の変化を掴つかんだ俺は、
「そこだ!!」
　ブレイザーブレイドを一いつ閃せん。
　ハムスターギルディを捉え、サークル状に形成された奴やつの残像を消滅させた。
「ぐうううう……み、見事……俺の願いを袖にしたというわけか……！」
　あっという間に戦闘員アルテイロイドを全滅させたブルーも、俺に合流する。
　先ほどの一撃で、ハムスターギルディはよろめいている。
「よし、いくぞブルー!!」
「オッケー！」
　勝機を得た俺たちは、ブレイザーブレイドとウェイブランス、互いの武装を完全解放ブレイクレリーズする。
「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」

　射出されたオーラピラーがハムスターギルディを拘束し、二色の柱が天を衝ついた。
「グランドブレイザ――――――――――ッ!!」
「エグゼキュートウェ―――――――――イブ!!」
「うおおおおおお……萌え袖のままでその美しき剣けん閃せん、見事―――!!」
　炎と水の奔ほん流りゅうに呑のみ込まれ、萌え袖を求めた戦士は散った―。

　　◇

　戦闘後、俺たちは荷物を取りに部室に戻った。
　俺の手には、先ほどの戦いで慧え理り那なを抱き留とめた時のツインテールの感触が残っている。
「……なんか懐かしいな。慧理那を助けるのは」
「ええ、テイルレッドと初めて出で逢あった日を思い出しますわ」
　まだツインテイルズになる前、慧理那は何度もエレメリアンに狙ねらわれていた。
「ですがわたくしはツインテイルズ―テイルイエロー。次は必ず、人々を助ける側がわとして」
　そして今、その瞳ひとみとツインテールは凛りんと強く輝いている。
　人々がエレメリアンに心を奪われぬよう、彼女は戦うのだ。
「でも大丈夫か、慧え理り那な。けっこう疲れてるみたいだぞ」
　やはり、ハムスターギルディに連れ回されたのが響いているのだろうか。
　慧理那のツインテールはどこか、疲ひ弊へいしているように感じる。
「そうですわね……。久々にエレメリアンと生身で対たい峙じして、緊

張してしまって……」
「今日はたくさん眠ってしっかりお休みください、お嬢様」
　桜さくら川がわ先生にそう優しく言われ、慧理那は嫋たおやかに頷うなずいた。
「休む……寝る……そうそう！　トゥアール、前に基地の設備のアイディア聞いてきたじゃない、覚えてる？」
　慧理那の話から何かを思い出したのか、愛あい香かは妙に嬉うれしそうに切り出した。
「いえ、全く覚えてません……。私、愛香さんとの会話はなるべく記憶野を圧迫しないように、すぐ消していますので……」
　トゥアールの頭を掴つかんでシェイクし、失われし記憶にもしもししながら、愛香は言う。
「あたしたちの戦いの役に立つアイディア思いついたから、聞いて！　それに、あんたも喜ぶものかもしれないわよ!!」
　よほど自信があるのだろう、愛香は嬉き々きとして説明を始めた──。

第八話　ヴァーチャル・ツインテール。

「こんなことを思いつくなんて、お疲れなんですね、愛香さん……。胸もそんなに萎しぼんで」

　ホワイトボードに一通り説明イラストを書き終えた愛香を、トゥアールが真顔で労ねぎらう。
「ホワイトボードのスペースが足りないわね、白いしこっちに続き描こっと。拳こぶしで」
「こんな起伏に富みまくったホワイトボードがありますかこれはトゥアールちゃんのナイスバディですあああああああああああああ」
　具体的に何を作って欲しいか、という説明を絵で描いたらしい。
　確かに、抽象的な絵が多くて要領を得ない。愛香は、これだけ描けばわかるわよね？　という感じでトゥアールを見たのだが──。
　ホワイトボードの始まり……左上に、丸から棒線の手足が伸びたイラストがある。
　丸の横から棒が伸びているので、これはツインテール……愛香なのだとわかる。だが、俺にはそこまでの解読が限界だ。
　その棒人間が、四角い何かを持ったり、それを垂直にシュートしたり、倒れたり、四角い何かの上で電球のように光っている。
「わかりづらいのは悪かったわよ、あたし、絵が苦手だから……。でもだいたいフィーリングで伝わるでしょ？」
　愛あい香かのツインテールの感情なら淀よどみなく読み取れる俺だが、この絵からフィーリングを知覚することは極めて難しい。

「この解読の困難さはまるで太古の壁画ですね……愛香さんだけに！　ブププーブオッファアアアアアアアアアアアアア!!」
　二一世紀より後世へ送る壁画と化したトゥアールを余よ所そに、桜さくら川がわ先生はホワイトボードをまじまじと見つめ、難しい表情で顎あごに手をやった。
「…………紙に書いた内容のとおりの夢を見られる機械……？　ということか？　津つ辺べ」
「そう！　そういうことです、桜川先生！　よくわかりましたね!!」
　つまり、愛香が紙に具体的な内容を書き、コピー機のような機械に入れると、内容を読み取り、ベッドに寝ている愛香が機械が読み取ったとおりの内容の夢を見られる、嬉うれしくて光る、という説明の絵だったようだ。
「……うむ……。私も、たまに婚こん姻いん届とどけを枕の下に置いて寝ているからな……。最近では、観み束つかの写真と一緒に」
「発想はそこなんです！　よく言うじゃない、枕の下に写真を入れて寝れば、その人の夢が見られるって」
　その迷信は、婚姻届をプラスすれば夢の中で結婚できるといった段階的なパワーアップが可能なのか……⁉
「だからトゥアール、仮眠室みたいのを造ってさ、そこで好きな夢を見られるようにして欲しいのよ。短時間で思いっきりリラックスできるでしょ？」
「はあ」
　壁画となって地層と同化して悠久の時を超えることを拒こばみ、壁から脱出して現代人として再誕したトゥアールが生返事をする。
「……そ、それに、これはリラックスだけじゃなくて、あたしたちツインテイルズの特訓にもなるのよ！」
「特訓ですの⁉」

　それまで聞きに徹していた慧え理り那なが、すかさず反応する。表情を見るに、どうも愛香は狙ねらって慧理那を食いつかせた気がする。
「ダークグラスパーの必殺技……覚えてるでしょ？　会長」
「カオシックインフィニットですわね‼」
　慧理那は普通に敵の技名でも一回で覚えるからな……。
「ほ、ほら。そーじのおかげで助かったとはいえ……あたしも会長も、ダークグラスパーのその幻覚は、自力では破れなかったわけでしょ？」
「そうですわ。わたくし、自分が幻覚に取り込まれていると気づきすらせずに、お散歩していましたもの……」
　だから、どんな幻覚を見ていたんだ一体……。
「いい夢ばっかりじゃなくて、たまにダークグラスパーが見せたのと同じ幻覚を再現して、あえて見るのよ。その夢から自力で目覚められれば、ダークグラスパーとの再戦に備えられるでしょ？」
「さすがですわ、津つ辺べさん！」
「うーん……？」
　俺はまだ少し引っかかる。慧え理り那なはすっかり乗り気だが……そういうものか……？　精神の特訓って。
　もっとも、俺はあの時、幻覚を打ち破るトリガーがあったからこそ吹き飛ばせたようなものだ。
　それをダークグラスパーに語り聞かせてしまった以上、次に戦う時はより完かん璧ぺきな技に仕上げてくる可能性もある。
　精神力を強くするという意味でなら、理には適かなっているのだろう。
「ただエロい夢が見たいっていうだけの願望を、何でここまで大おお仰ぎように言えるんですか愛あい香かさんは」
　トゥアールが何かボソリと呟つぶやくと、すかさず愛香が絞しめ技に移行した。

「どの口が言うか妙な虚無の思考時間カタカナわざを毎日のよーに使ってるくせに！　精神攻撃対策だって言ってるでしょ!!」
「うぐぐぐ……は、はいはいププー、普段全然そういう単語使わないのに、エロい夢見たいがために言い訳を考えてきた愛香さんのために、気付かないふりをしておいてあげます……！」
　愛香は後ろめたそうに俺たちを一いつ閃せんすると、トゥアールの首根っこを掴つかんで部室の隅まで運んでいった。

「正直に言うわよ」
「ですから、エロい夢が見たいんでしょう？」
「…………胸」
「はい？」
「……胸よ。夢の中で大きくしたいの。属性玉エレメーラオーブにすら見捨てられたあたしだけど……夢は、あたしを見捨てたりしないでしょ？」
　会話の内容は聞こえなくても、愛あい香かのツインテールが慟どう哭こくしているのがわかる。
「あ、あの……そんなに望まれているんですから、たまには自分で巨乳になる夢を見たりはするんでしょう……？」
「────ないわ。ただの一度も」
「っ……やばい、正直すぎて普通に泣けます……!!」
　何な故ぜか、トゥアールが号泣しだした。
　そして、俺たちに憚はばかることなく、会話のボリュームがどんどん上がっていった。
「私を涙させるのはいつも、肉体への苦痛ではなく、愛香さんへの憐れん憫びんですね……。わかりました。その願い、聞き届けましょう！」
「ありがとう！　ありがとう!!」

「いいんですよ愛香さん、私たち、友達じゃないですか」
　トゥアールの腰に抱きつく愛香。やっぱり胸には抱きつきたくないらしい。
　……やっぱり、って……うん、既視感だよな、これ。
「お二人は本当に、仲良しさんですわね！」
　嬉うれしそうに見つめる慧え理り那なの、右手首を見つめる。

　今度は大丈夫だよな、トゥアール……。

　　◇

　愛香とトゥアールの抱ほう擁ようから、数日が過ぎた。
　テイルギア以外の発明ならそれこそ広大な基地ですらも一晩で終わらせてしまうほどの天才トゥアールだが、今回はそのテイルギアの根幹たる属性力エレメーラ──精神に干渉する機械ということで、かなり慎重に慎重を重ねて制作したという。
　基本機能や方向性を何度も変更したのは、安全のためだと豪語していた。
　この日の朝、トゥアールからようやく完成を告げられ、愛香は放課後になった瞬間部室へとダッシュした。
　早めに来てくれた慧理那と合流し、転送装置であるロッカーへと飛び込む。
「よしっ！　特訓よ会長！」
「はい!!」
　普通に歩いて下校する時間ももったいないと言わんばかりのあのはしゃぎようは、かなり久しぶりに見る。
　桜さくら川がわ先生もついてくるということで、俺たちも二人の後に

続いた。

　使用頻ひん度どを考えればコンソールルームから近い方がいいということで、開かずの間の一つだった空あき部屋をベースに制作していたらしい。
　中に入ると、エステサロンのような雰囲気なのは意外だった。
「名付けて、ヴァーチャルトゥアールームです」
　しっかりウに点々を載せた発音で、トゥアールは俺たちに新たに完成したマシンの名称を言った。
「何か、想像していたよりずっとお洒しゃ落れだな。てっきり、映画でよく見る宇宙船の中のコールドスリープするカプセルみたいなのを想像していたんだけど」
　部屋の中央に、六つのベッドが横一列に並んでいる。
　寝心地ごこちのよさそうなマットレスに、大きめの枕。枕元には業務用コピー機をベッドサイドテーブル状に縮小したような機械が備えてあり、何本かの透明なケーブルでそれぞれのベッドと接続されている。
「どうですか、このデザイン！　愛あい香かさんの描いたイラストを再現するのに、苦労したんですからね！」
「いや、別にあれはただの例で……ん、まあいいや、ありがとトゥアール」
　素直に礼を言うと、愛香は早速使用方法を詳しく聞き始めた。
　その間、俺と慧え理り那な、桜さくら川がわ先生、あと何な故ぜかやって来た母さんとで部屋を見て回った。
　このメンバー全員分で、ベッドが六つあったのか……。
「うふふ、自分で書いたシチュエーションを再現できる機械ができたって聞いて、母さん張り切っちゃった！　ほら見て、総そうちゃん！　Ａ４原稿用紙一五〇枚分に、びっしり設定を書いてきたわ!!」

　母さんが、ダブルクリップで留とめられたＡ４原稿用紙の束を見せつけてきた。
「なんでそんな素人しろうと離れした速筆なんだよ、知ったの数日前だろ⁉」
「昔からよく書いていたのよ。アイディアの書き溜めは頭の中にまだまだあるわ！」
「……うん……そうだったよな……」
　これで喫茶店のマスターが天職だって言うんだから、不思議だ。

　トゥアールが手を振って、俺たちを一番ドアに近いベッドの方へ呼び寄せた。
「皆さーん、愛香さんがとりあえずテストプレイされるそうなので、集まっていただけますか？」
「集まるって……まさか、あたしが今から見る夢、そーじたちにも見られちゃうわけ⁉」
　ベッドに横たわっていた愛香が、慌あわてて上体を起こす。
「あれ、いけませんか？　まあ、正確には戦闘や日常で収集した私たちの映像データや、それで補えなければ代替データを使って、夢の〝再現映像〟をモニターに映すんです。タイムラグもあるし完全な再現はできませんが、当人がもっとも強く見ている映像はしっかりと映像化できるはずですよ」
「そんな、プライバシーの侵害じゃない！」
「今回はいいじゃないですか、ただ愛あい香かさんが〝変身〟するだけなんですから！」
　煽あおるように愛香の頬ほおをつくトゥアール。
「……そうね。むしろ、変わったあたしをそーじに見てもらわなくちゃ……。今回だけだからね」

とりあえず願いを叶かなえてもらったことで柔順な愛香は、トゥアールに特に反撃もせず、そっとＡ４サイズの紙一枚を差し出した。
「見せないでよ、トゥアール」
「はいはーい」
ベッドサイドのスキャナー装置に、受け取ったＡ４の紙を読み取らせるトゥアール。
読み取りの際一瞬紙がしなったことで、裏返しになっていた文字が目に飛び込んできた。

「巨乳」

……見るつもりはなかったんだ、愛香……。
「…………」
俺は即座に目を逸そらした。
小学生のお習字のような力強さで書かれたわずか二文字の言葉から、全身全霊を注いだホープが立ち込めているのを感じる。
桜さくら川がわ先生はその用紙に視線を送り、「ほう……」と感嘆の声を漏もらす。
婚こん姻いん届とどけに念を込め、呪じゅ符ふのように操る桜川先生だからこそ、そのただならぬ妖気を感じ取ったのだろう。
母さんのように、設定や状況を細部まで突き詰めるのも、一つの手だ。
だが、一切の装飾を捨て去り、極限までただ一つの願いに特化することで、より強固に夢のビジョンを確定させる──。
愛香の本気の程が窺うかがえた。
「慧え理り那なちゃんは何書いたの～？　見せて見せて」
母さんが、子供っぽい仕草で慧理那に忍び寄る。

「こ、これは見せられませんわ」
　自分の見たい夢を書いた紙を、慌あわてて掻かき抱いだく慧理那。
「そうよね、ごめんね慧理那ちゃん。おばさん、お散歩願望が書いてあることとかもう聞かないから」
「ええ。すみません、未み春はるさん……」
　誘導尋問の妙なる技を垣かい間ま見て、俺は戦せん慄りつする。

　そうこうしているうちに、横たわった愛あい香かを、シャボン球を半分に割ったようなプリズム状の光沢で覆おおわれたドームが包み込んだ。
「さ、いよいよ愛香さんの夢が始まります。……愛香さん。スキャナに取り込んだ情報はあくまでプログラムを願望に擦すり合わせるための補助と考えてください。愛香さん自身が強く思い描いたまま眠りに入らなければ、望んだ夢は見られません」
「わかったわ」
「それともう一つ。くれぐれも、優先順位の高い願望を一緒に考えないでください。たとえば……」
「……津つ辺べさん、もう寝ているようですが」
　慧え理り那なが指摘する。導眠効果があるベッドらしく、トゥアールの説明も半ばに愛香はあっさりと眠りに落ちてしまった。
　すかさず悪い笑顔を浮かべるトゥアール。
「くくく、最初はちゃんと望み通りの夢を見せて、二回目におもしろ展開にしてやろうと思いましたが、願ったり叶かなったりです……!!」
　やっぱり、また何か悪戯いたずらを企たくらんでいたんだな……。反撃必至の。
「愛香さんはちゃんと説明を聞かないで夢の中にゴーしちゃいましたけど、皆さんは注意してください。このマシン、優先順位の高い願望を同

時に考えると、思わぬ展開へ夢が進んでしまう可能性があるのが仕様デメリットなんです」
「思わぬ展開、ですか？」
　慧理那の言葉に半笑いで頷うなずくトゥアール。
「例えば、例えばですが！　地上最強レベルの貧乳が巨乳になりたいとかいう、歩いて太陽に行きたいレベルの困難な夢と……むっつりが想像力の極点まで花開かせた願望が混じり合ったりすると……それはもう、カオスな夢になるでしょうね」
「雑念が入ると駄目ということですか？　わたくし、できるでしょうか……」
　難易度の高そうな説明を受け、慧理那が不安げに肩をすくめる。
「いえいえ、細かいことではなく、普段から天てん秤びんが釣つり合っているような願いが二つある場合、どちらかに集中しないと大変なことになりますので。言ってしまえばそれを事前にわかっていた愛香さんに特化した仕様でもあるんです！」
「つまり、津辺専用の機能か。本当に仲良しだな、お前たちは」
　桜さくら川がわ先生が素直に感心している。仲良しなのは間違いない。それは俺も誰だれよりわかっている。けど、トゥアールが本気を出して悪戯を始めると、思いがけない方向に話が進んでいってしまうからな。
　イエローのテイルギアの時は、愛香がトゥアールから託されたブルーのテイルギアを相棒として認めていたから、双方話が収まったけど……今回はどうだろう。
　俺はさっきのトゥアールの喩たとえを思い出し、はっとした。
「釣つり合った天てん秤びん……。まるでツインテールだな。だったら大丈夫さ、愛あい香かなら」
　巨乳になる以外のもう一つの願望がどれほど強い、どんな願いかはわ

からないが……愛香なら、思いを釣り合わせることができると思う。

「あ、ほらほら、夢が映り始めたわよ！」
　母さんが壁に設置されたモニターを指差した。
　少しホワイトノイズが交じった、明度の高い映像。
　ちょうど愛香が、俺の家……喫茶店から出て来るところだった。
　人の夢って、再現映像にするとこんな感じなのか……。
　トゥアールは何かに気づいたようで、嬉うれしそうに画面に食い入る。
「プププ────やっぱり雑念が交じってましたね、見てください、愛香さんったら巨乳になれてません！」
　秘密のはずの紙に書いた内容を果てしなきうっかりで暴露し、トゥアールはいつも通りの愛香の胸を指差した。
「あ、トゥアールさんも出てきましたわ」
「あら、どうしてでしょう」
　笑い転げていたトゥアールは、慧え理り那なに言われて再び画面を注視した。
　同じく喫茶店から遅れて出てきたトゥアール。入り口の前で待っていた愛香を見て、安あん堵どしたように息をつく。
「冬……ですわね。息が白いですわ。津つ辺べさんは今より少し先の時間を夢に見ているのでしょうか？」
「そうみたいだな。二人ともコート着てるし」
　愛香はカーキのダッフルコート。トゥアールは、いつもより少し厚手に見える白衣をコートさながらに着こなしている。
「おんやあ、何か二人の雰囲気、妙じゃない？」
　母さんが口くち許もとに手を当てて小さく笑う。
「もう未み春はる将軍、お笑いポイントが違いますよ、見てくださ

い！　海どころか空を思わせる愛香さんの果てしなく平らな胸──」
　トゥアールが指差した画面の中で。
　愛香はトゥアールの白い手を絡め取り、自分のコートのポケットに差し入れた。
　愛香はぷいっとそっぽを向き、トゥアールは照れ笑いを浮かべる。
　それが日常のように、自然な光景だった。
「……………………………………………あれ？」
　おすすめお笑いポイントを飛び越えたトゥアールが、目を点にして硬直する。
　普段トゥアールが愛あい香かに向けるのは、ゲハハハと全身全霊で煽あおる嘲ちよう笑しように近い笑顔なのだが……今のトゥアールは、すごく自然に笑っていた。
　俺の家の喫茶店で初めて会ったときの第一印象そのままに──持ち得るポテンシャルを正しく発揮した、天使のような優しい微ほほ笑えみだ。
「な、何を誤解を招くことをしてるんですかあの蛮族は……！　何とか音声も拾っちゃいましょう」
　慌あわててモニターの下のコンソールパネルを操作するトゥアール。
　チューニングが合うように、ノイズの中から少しずつ声が聞こえ始めた。
　そして、二人の会話が聞き取れるまでになる。

『相変わらず愛香さんの手、温かい……。ふふ、男の子みたい』
『ふうん、オトコの手、握ったんだ』
『総そう二じ様だけですよ。知ってるくせに』

　…………何だろう、どちらも普段と調子は変わらないのに、上う手まく説明できないが、何かが違う。

「何ですかこれ」
　トゥアールがかつてない真顔でモニターを振り仰いだ。
　いや、できれば俺も違和感の理由を知りたいところなんだが……。
「夢ですか、これは……」
「夢だろう？」
　桜さくら川がわ先生がトゥアールに冷静に突っ込む。
　入り口の前に立ったまま、二人はなおも会話を続けた。

『んっ』
　愛香が眼めを細めて顎あごを軽くしゃくり上げる。まるで、何かをおねだりしているようだ。
『だーめ』
　トゥアールは、愛香のコートのポケットから手を出し、温ぬくもったであろうその細い指を、愛香の唇くちびるに押し当てた。
『んんっ』
　拗すねたように肩を揺らし、そのまま肩でトゥアールを小突く愛香。
『ふふ……ここじゃ誰だれかに見られちゃいますよ？』
　トゥアールの声が…………めちゃくちゃ穏やかだ。

「えっ……ちょっ……何ですか⁉　その、少なくともそこまでは終えちゃってる感⁉」
　モニターをガン見し、かつてないほど狼ろう狽ばいするトゥアール。
　科学者でありながらかつてヒーローだったトゥアールは、想定外の自体にも常に動じることなく、その叡えい智ちで道を切り拓いてきた。
　だが今は、明らかに年相応の少女のように動揺している。
　確かに違和感は感じるけど、俺には、トゥアールがここまで驚くほどの映像には見えない。

「普通に仲良くしてるだけに見えるけどな。何か、違和感は感じるんだけどさ」
「ええ、素敵ですわ！　きっと津つ辺べさんは、いつも喧けん嘩かばかりしているトゥアールさんと、あのように仲良くしたいと思っていたのです……それが夢で叶かなったのですわね！」
「ああ、そういうことか」
　慧え理り那なの意見に納得する。
　要するに、愛あい香かが本当はこういう風に自分と仲良くしたいっていう願望があるのを知って、照れてるのか。トゥアールは。
　桜さくら川がわ先生も特にリアクションしていない。
　母さんはやたらにやにやしているが……まあ、慌あわてているのはトゥアールだけだ。
　画面の愛香が、トゥアールの胸を肩でつん、とつついた。
『……あんたのこの巨乳は、あたしだけのものなんだからね』
『もうっ』
　トゥアールは身をよじりながらも嬉うれしそうに微ほほ笑えみ、
『わかってます。その代わり愛香さんも、私以外のおっぱい見たら、拗すねちゃいますよ？』
『あんたもね』
『ええー、だって愛香さん、見る胸がないじゃないですか』
『言ったわね～』
　愛香が優しくトゥアールの胸に触れ、トゥアールはくすぐったそうに身体からだを丸めた。

「ちょっ……えええええ!?　そこは私を空の彼方かなたまでブッ飛ばすところでしょう!?」
　トゥアール……。

　ツインテールと鮮やかな銀髪が、寒空に煌きらめく。
　モニターの中で二人は、本当に楽しそうに笑っていた。
「ぐあああああああ何ですか、あの登場人物二名のみのくされ小説は⁉　持ち込みに来ても門前払いしますよ⁉」
　仲良しの光景を見せられ、トゥアールが身み悶もだえる。照れくさいのだろう。
「どうして、どうしてこんなことに……！　こんなはずじゃ……‼」
　圧倒的戦力差を笠に着て余裕を振りかざしていた悪役が、あるはずのない逆転敗北を喫した瞬間のような絶望的な表情で崩れ落ちるトゥアール。
「────巨乳⁉」
　そして、今し方耳にしたワードを反はん芻すうし、勢いよく立ち上がった。
「…………まさかあの蛮族……！　巨乳になりたいという願望とエロ妄想がミックスして、一番身近な巨乳である私を間違って恋愛対象に……！　優先順位の高い願望を同時に考えないでって、あれほど念を押したじゃないですかあああああああああ‼」
「その頃ころはもう夢の中だったぞ、愛あい香か……」
　俺の当たり障さわりのないツッコミなど届かないほど、トゥアールは取り乱している。
　モニターの中では、二人がどちらからともなく肩を触れ合わせながら、今にも雪が舞い落ちてきそうな通学路を歩いて行く。
「いや──────────────合わさった歩幅がすごく自然‼」
　現実のトゥアールはブレイクダンスをするかのように床を転がり始めた。
　ここまで照れるのを見ると、さすがに悪い気がしてきた。

「トゥアール、緊急停止装置みたいなのはついてないのか？」
　聞きつつも普通はついているだろうと確信していただけに、返ってきた答えは意外なものだった。
「愛香さんの言うようにこのマシンは精神鍛たん錬れんの一環でもありますから……手動で停止する機能はつけていないんです！　夢を見ている本人かプログラム自体が危険と判断して、夢を強制終了させるまでは！」
　確かに、そもそもただ夢を見るだけの機械に、危険なんて本来あるわけないしな。
　今のトゥアールのように、モニターで見ている側がわにとってよろしくない映像が流れる場合はともかく……。
「じゃあ、機械を壊したらどうだ、お前ならすぐに直せるだろう」
　多少手荒だが、一番手っ取り早い方法を桜さくら川がわ先生は提案した。
「それはさすがに危険です……！　何が起こるかわかりませんから、最後の手段に取っておきます。夢の愛香さんが私を押し倒しにかかったら検討します」
　さすがに夢を扱う機械なだけあって、トゥアールの慎重さは相当なものだ。
「……トゥアールちゃん」
　母さんが、そっとトゥアールの肩を叩たたいた。
「検討する時みたいよ」
　映像は、愛香がトゥアールの肩を抱いて、地下基地のトゥアールの部屋へと入っていくところだった。急に時間が飛んだようだ。

『多分……あたし、今日、帰らないから』
『……そう……ですか……』

　二人とも、どこか神妙な顔つきで、頬ほおを赤らめている。
　今度は、トゥアールの方から愛あい香かの手を取った。
『じゃあ私は……愛香さんを、帰しません』
『うん。今日は、ずっと――』
　譲れない意志を瞳ひとみに湛たたえ。手と手を合わせ、指と指とをしっかりと絡め合い。
　切なげな吐と息いきを溢こぼし―愛香の手に、より力がこもったように見えた。

「あぎゃ―――――――――――――――――っ!!」
　怪獣の鳴き声をどう作るか迷っていた昭和の映画監督が「おっ、これでいいじゃん」と即断しそうな限りなく怪獣じみた声を上げ、トゥアールは後あと退ずさった。
「夢ならではのご都つ合ごう時間すっ飛ばし……！　もはや一刻の猶ゆう予よもありません！」
　白衣のポケットから、バット状の武器をにゅるんと取り出すトゥアール。
「すみません愛香さん！　トゥアールフルスイング!!」
　よほど切せつ羽ぱ詰まっているのか、普段は何があっても自作のメカに荒事を任せるトゥアールにしては珍しく、自分の手でバットを振りかぶり。
　愛香のベッドとケーブルで繋つながっている夢スキャナーを、渾こん身しんの力で破壊した。
「きゃっ」
　飛び散る火花にたじろいだ慧え理り那なのツインテールを、俺はさっと庇かばう。
　徐々に火花は弱まっていき、やがてモニターの映像はブラックアウト

した。
　多分、愛香が夢から覚めたんだよな……？
「んん……」
　薄く漏もれた声に反応し、俺たちは一斉に愛香へと向き直る。
　軽く身み動じろぎした後、何度か瞬まばたきを繰り返し……愛香は上体を起こした。
「……おはよ……」
　特に何もなかったようで、俺たちはほっと胸を撫なで下ろした。
「これは相当改良が必要ですね、何があってもあんなおぞましい夢へと分岐しないよう、徹底的にプログラムを最適化しなければ」
　心なしか頬をこけさせながら、トゥアールが今まさに悪夢から目を覚ました人のように息を荒らげた。
「夢って何？　トゥアール」
　愛あい香かが、寝起きに母親に甘える子供のように、優しく自分の指をトゥアールの手に絡める。
「私と愛香さんが望まぬイチャイチャを繰り広げたホラー映画です！　そうこんな風に甘ったる…………く…………」
　自分の手の甲をゆっくりとなぞる、愛香の五指。錆さび付いた首関節を稼働させて、軋きしみ音と共に視線を向けるトゥアール。
「愛香……さ……」
「何か今日は元気だね、トゥアール。昔に戻ったみたい」
　愛香のその微ほほ笑えみは、さっきまでモニターで見ていた夢の中と全く同じだった。
「な、何を……からかってるんですか？　わかりました、謝ります。実はこのマシン、愛香さんをからかうために細工してたんです、でも想定外の事態が起こっちゃって…………さあこい!!」
　愛香はきょとんとして、ツッコミ待ちのトゥアールを春風のような爽

さわやかさでスルーする。
「……あの、愛香さん、まさか…………」
　がたがたと震ふるえ始めるトゥアール。
　トゥアールをからかい返すための演技じゃない。
　愛香のツインテールは、いたって穏やかだ。今の自分が、飾らない素顔だと言わんばかりに。
「なぁに？　トゥアールっ」
　頬ほおに朱を差し、愛香が微笑む。

「……まさか、愛香───この現実世界で、夢の続きを見てるのか……!?」
　何が起こるかはわからないと、確かにトゥアールも言っていた。
　しかし、あくまで夢だろう……!?　中断されたらそこで覚めるから、夢だ。
　現実にまで持ち込まれたらそれはもう、正夢じゃないか──。

　大いなる戦力差がある愛香相手にも、これまで一歩も怯ひるまず挑んできたトゥアールが、今回ばかりは全力での逃走を余よ儀ぎなくされたようだった。

キャラクター名鑑 EX03

シープギルディ

SHEEP GUILDY

DATA

身長：245㎝
体重：206㎏
属性力（スリープ）：眠り属性

極めてまんまるなフォルムを有する、穏やかな戦士。もこもこした外皮に属性力（エレメーラ）を流入させ対戦相手を巻き込むことで、強烈な入眠作用をもたらす意外に強力な特殊能力を有している。イエローのドMっぷりはこの穏やかな戦士をも憤慨させ闘争心を呼び起こしたが、ドMな割りに毎晩すやすや健やかな眠りをしているイエローには敵わず、永久の眠りについた。

キャラクター名鑑 EX04

ハムスターギルディ

HAMSTER GUILDY

萌え袖を愛する戦士。でっぷりとした見た目に反して動きは軽快で、彼が走った後には円状の残像が形成されるほど。それもそのはず、彼は萌え袖の女の子に自分の背中をちょこんと摘まんでもらって走ることに憧れているため、走力を鍛錬しているのだ。そうまでして鍛えても痩せることができないのが、精神生命体であるエレメリアンの悲哀である。

DATA

身長：275㎝
体重：599㎏
属性力（プリティスリーブ）：萌え袖属性

第九話　リアル・ツインテール。

「……ふぅ……」
　ツインテール部部室の中央に置かれた長テーブルの椅い子すに座り、愛あい香かは溜ため息いきをつく。
　頬ほお杖づえをつき、視線を送る窓の外では、夜の帳とばりが降りようとしていた。
　下校時刻は過ぎている。総そう二じたちには先に帰宅してもらった。一人になりたかったのだ。
　元々ツインテール部部室は、学園生活における観み束つか家地下基地の予備の役割。数々の超科学装置が満載されているとはいえ、上位互換である基地がある以上、夜遅くにこの部屋にいる必要はない。
　いつもどおり総二たちと下校せずに愛香が一人残っているのには、理由があった。
　トゥアールと、顔を合わせづらいのだ。
　らしくない、と愛香は頭を掻かいた。自分たちはこんなに気を遣う関係ではなかったはずだ。
　総二にモーションをかけるトゥアールを必死に止めて、意地になって対抗する日々。そこには何の遠えん慮りよもなく、しかし、友情があった。
　そんな中、いつからだろう──総そう二じと同じぐらい、彼女の横顔を目で追っている自分に気がついたのは。
　総二のことは、幼い頃ころから異性として意識していた。友達止まりではない、一歩踏み込んだ関係を求めた。

　総二を好きな気持ちは変わらない。けれど今は、同じくらいトゥアールも大切だ。
　そのトゥアールから踏み込んだ関係を求められた時──愛あい香かは、怖くなって逃げたのだ。
　乗り気なフリをしてみせた。自分の方が余裕があるんだぞ、と虚勢を張ってみせた。
　でも、トゥアールは本気だった。
　その本気から自分は……逃げ出してしまった。応こたえてあげられなかった──。

　突然、部室の扉が開け放たれる。
「っ!?」
　気け怠だるげに机に突っ伏していた愛香は、泡を食って跳ね起きた。
「やっぱりここにいたんですね」
　拗すね交じりの笑みを浮かべながら、トゥアールが入室してくる。
　トゥアールが後ろ手でしっかりと扉を閉めたのを知覚した瞬間。とくん、という優しい音が、愛香の無い胸から響く。
「あ、あたし帰るね……」
　ややもすればわざとらしさすら感じる唐突さで、愛香は帰り支じ度たくを始める。
　直後──ガチン、と撃鉄が下りるような硬質の電子ロック音が、威い嚇かくにも似た大おお仰ぎようさで部室にこだました。愛香はビクリと身体からだを震ふるわせる。
　微かすかに首を動かして背後を見やると、窓にもいつの間にか光学ブラインドがかかり、偽装景色が表示されていた。
　視線を戻すと、トゥアールがリモコンを手に妖よう艶えんに微ほほ笑えんでいる。部室は今、エレメリアン出現時と同じ緊急警戒モードへと

移行したのだ。
　見た目がごく普通の部室とはいえ、ここは超科学技術の塊かたまり。
　秘密を堅持するため、完全に外界から遮断されたこの状態でのツインテール部部室の堅固さは、核シェルターをも上回る。巨大な建機どころか、爆雷を満載した戦闘機を投入しても突破はできないだろう。
　それは裏を返せば、部屋の内側にいる人間は、管理者の意向次第で難なん攻こう不ふ落らくの牢ろう獄ごくに閉じ込められる、とも言い換えられる。
　もちろん、変身した愛香ならばそれでも破壊は可能だろうが──愛香は、か弱く自分の身体を抱きしめ、後ずさるだけだった。
　普段虎とらとも熊くまとも恐竜とも喩たとえられる愛香が、今は仔こ兎うさぎのように儚はかなく頼りない。
　じわじわと追い詰めるように、一歩一歩ゆっくりと愛あい香かに近づくトゥアール。
「っ……！」
　そして、また一歩下がる愛香。トゥアールが可お笑かしそうに目を細める。
　だが、部室は広いようでいて狭い。あっという間に愛香は追い詰められ、窓枠に背中をぶつけた。
「何ですか、その反応。まるで私が愛香さんを襲おそおうとしているみたい」
　理解していてあえて口にしているのだろう。トゥアールは、明らかに愛香の狼ろう狽ばいを楽しんでいた。
「愛香さんって、攻められると弱いんですね。ずっとそうだろうって思ってましたけど」
「な、言わせておけば……！」
　軽くサディスティックな笑みさえ湛たたえ、トゥアールは人差し指を

自分の唇くちびるに押し当てた。
　その仕草がまた、愛香にトゥアールの存在を強く意識させる。
　転送ゲートのロッカーに視線をやる愛香。
　しかし、あの中に逃げ込んだ所で無意味だろう。管理者のトゥアールが接続を遮断しているのは目に見えている。
「――――怖いんですか？」
　こうもストレートに挑発を受けてなお、愛香はいつものように気丈に言い返すことができずにいた。
　汗などかいていないはずなのに、全身を玉の雫しずくが滑り落ちていくこの感覚は何だろう。
　横髪が頬ほおに張り付いてしまっているような錯覚にさえ襲われる。
「……何よ……あ、あんただって、肝心なトコでビビるくせに……!!」
　努めていつもの口調にし、精一杯の抵抗。
　それもそうですね、といつもの調子で終わってくれれば、どれほど安あん堵どできただろう。だが今日のトゥアールは、愛香が思っていた以上に覚悟をしてきたのだ。
「じゃあ、チキンレースですね。私と愛香さん、どっちが最初に怖くなって止やめるか……」
「え……？」
　トゥアールの細指が、愛香の頬に触れた。
「意地を張り通したら……最後までいっちゃいますよ？」
　グロスと見み紛まがうほど艶つややかに濡ぬれて光るトゥアールの唇に、愛香の瞳ひとみが縫ぬい付けられる。
　白衣を床に落とし、制服のスカートのファスナーに手をかけるトゥアール。何の感慨も無く、焦じらしもせず、自身は上下ともに下着姿となった。
　上品なパールホワイトの下着がなお見劣りするほどの、きめ細やかな

白磁の肌。
　トゥアールを思うようになってから、愛香は幾度となく打ちひしがれていた。
　出会ったその日から、自分はこの身体からだを羨うらやんでいたのだ。憧あこがれていたのだ。
　同じ男を愛した二人の女。
　一人は、男を抱き包む豊かな身体からだを持たず。
　一人は、その男がもっとも愛するものを持たず。
　無い物ねだりをぶつけ合うように、子供じみた喧けん嘩かをする日々。互いの空白を埋めるべく求め合うようになることは、むしろ自然なことだったのかもしれない。
「怖かったんですか？　これを総そう二じ様に見られることが──」
　再び持ち上げられたトゥアールの手が、ごく自然に愛あい香かの胸元へ吸い寄せられていった。
「待っ……」
　愛香のブラウスがはだけられ、自分がもっとも忌き避ひしている胸元が露あらわになる。
　蔑さげすむような視線ではない。トゥアールは、慈いつくしむように愛香の胸を見つめていた。
「待ちません」
　トゥアールは外気に晒さらされた愛香の鎖骨に唇くちびるを寄せ、新雪を踏みしめ足跡を残すようにそこから首筋へと口付けていった。
「……ぁ……！」
　押しのけようとした瞬間快美に包まれ、愛香は抵抗する力を失ってしまった。
「──怖かったのは、私も同じです。総二様が私と愛香さん、どちらと結ばれても……一方は肉体的に満たされても、精神的には満たされな

い……。もう一方はその逆……」
　所在なく宙を泳ぐ愛香の手を、トゥアールはそっと捕まえ、蠱こ惑わく的なまでにしなやかに、自分の指を絡めた。
「初めては三人で……。何度目でしたっけ、私が愛香さんにそう言ったのを本気にしたのが始まりでしたよね？　私たちが、恋人ごっこをするようになったのは」
　必要はないのだろうが、愛香は小さく頷うなずいた。
　自分と総二との進展が頭打ちの様相を呈ていする一方、慧え理り那なやイースナたちがどんどん積極的にアプローチしていくのを見て──愛香は、トゥアールの提案を受け入れたのだ。

『二人で総二様に夜よ這ばいをしませんか？』

　きっとトゥアールが一番最初にそう言った時は、まだ冗談だったはずだ。
　だが──二度目……三度目と続くうちに、愛香の心が揺らいだ。
　二人なら、総二の心と身体を満たしてあげられる。美び蜜みつのように心を融とかすその思いが、いつしか愛香から他の思考を奪ってしまった。
「そうよ。あたしは……怖かった」
　愛香は密着したトゥアールを押しのけるように、触れ合った互いの胸の間へと手を差し入れた。そして、トゥアールの胸へと指を沈める。
　あまりにも豊かで、あまりにも繊せん細さいで。女の自分でさえ、どう扱っていいか躊躇ためらうほど魅惑の双丘。
　もどかしさを訴えるように、トゥアールは自分から愛あい香かの手に胸を押しつけた。
「優しい手つき……。最初はもっと乱暴だったでしょう？」

「うるさいわね……」
　愛香も、伊だ達てにトゥアールとずっと一緒に過ごしてきたわけではない。彼女の癖くせは誰だれよりも把は握あくしているつもりだ。
　例えば。口数が妙に多くなる時──それは、トゥアールが不安を隠そうとしている証拠。
　今もそうだ。
「んっ……！」
　不意打ちのように、愛香の太ふと股ももを撫なぜるトゥアールの小さな手の平。
　幸いといっていいのか……くびれだけはきちんと女性的な腰をなぞりながら、やがて最大の不可侵領域である胸へと辿たどり着いた。
「だ、駄目……！」
「駄目じゃ、ありません」
　恋人ごっこを始めた時、愛香は遠えん慮りよなくトゥアールの胸に触れたが、その逆は嫌がった。
　手を握ること。互いの肩を触れ合わせること。膝ひざ枕まくら。触れ合うだけのキスなら、何度も経験した。
　それでも愛香は、自分の胸に触れることだけはトゥアールに許さなかった。今日も視線だけで毅き然ぜんと抗議するが、もうトゥアールは止まらなかった。
　殴なぐりたければ殴ればいい。喧けん嘩かばかりしていたあの頃ころを思い出して、技を仕掛けてくればいい。けれど私は、やめるつもりはありません……と。
「な、何がチキンレースよ……！」
　初めからストップを度外視したチキンレースなど、度し難い蛮勇に過ぎない。よりによって、度胸勝負で自分が屈するなんて……。もう、愛香に抵抗の意志はなくなっていた。

あとは、トゥアールに求められるがまま、熔とけていくのだろう。
トゥアールの手の動きが恨めしかった。球きゆうを描くように、焦じらすように胸を這はう指。ごく基本的な愛あい撫ぶだろうが、愛香にとっては「ほら、普通はこんな大きさの胸があるはずなんですよ」と嫌味ったらしく示し唆さされているも同然だったからだ。
涙目で横を向き、吐はき捨てるように呟つぶやく愛香。
「無い胸なんていじって、何が楽しいのよ……！」
「すぐ卑ひ屈くつになる……可か愛わいいですよ、愛香さん」
その一言がどんな愛撫よりも優しく身体からだをとろけさせ、愛香は腰が砕けるように壁を背にへたり込んでしまった。
これ幸いにと、トゥアールも膝ひざ立ちになって愛あい香かに覆おおい被かぶさる。
「お布ふ団とんでも出します？　床は冷たいでしょう──」
昨日は雪が降ったとはいえ、ツインテール部部室は高性能な温度調節装置で部屋中が適温に保たれ、床のパネル一枚取っても温かすぎず冷たすぎずに調整されている。冷たいはずがない。
いつ総そう二じ様に押し倒されてもいいように、などと嘯うそぶきながらこの機能を説明されたが……まさか本当にこんなシチュエーションで活いかされることになるとは。
だが、たとえこの機能がなくとも、こう言って拒こばんだだろう。
「必要ない。……ううん、あっちゃ駄目なのよ……」
文字通り慰なぐさめ合いを続ける自分たちに、中途半端な安らぎはいらない。
怖がって、逃げて、辿たどり着いたこの関係には、ささやかな痛みも必要だ。
「────あたし、もうビビったりしないから。知らないわよ、トゥアール」

「あら……私、今まで一度も愛香さんを怖いと思ったことありませんでしたけど……今日、初めてそう思えるんでしょうか？」
　愛香は答えだとばかりに、トゥアールの首に両腕を回した。
　ああ、今まで自分が震ふるえていたから気づかなかったけれど……トゥアールも、ずっと震えていたんだ。
　互いの吐と息いきが混じり合う。愛香は目を細め、顔をゆっくりと近づけていった──。



「ぎゃおああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ!!」

　かつてないほどの絶叫を轟とどろかせ、部室でトゥアールが飛び起きた。
　長テーブルに座ってうたた寝していたかと思ったら、急にこうなったのだ。
「何ですかこの夢はあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　痙けい攣れんを起こしたように激しく震ふるえるトゥアールに、俺は慌あわてて駆け寄る。
「どうしたトゥアール!?　汗びっしょりだぞ!?」
　酸素を求める金魚のように口をぱくぱくさせていたトゥアールだったが、首を数振りして俺の姿を認めるやいなや、その涙目をくわっと見開いて掴つかみかかってきた。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっぱいを触ってください!!」
「落ち着け――――――――――――――――――ッ!!」
　迎撃役の愛あい香かが今ここにいないことが頭を過よぎり、俺は全力でそのタックルを回避した。

　今、ツインテール部部室にいるのは俺と慧え理り那な、そして今壁に頭から突っ込んだトゥアールだけだ。珍しい組み合わせだが、トゥアールはある理由で、昨日から愛香を避けている。
　昨日、望む夢を見ることができる発明・ヴァーチャルトゥアールーム

を愛香の要望で完成させたトゥアールだったが、例によって愛香をからかいたいという願望を組み込み、最初の被験者に愛香を選んだ。
　その機械の特性として、同じぐらいの強さの願望が拮きつ抗こうすると、どうも希望した夢がめちゃくちゃになるらしい。愛香の場合は本人が希望したのは胸を大きくしたいというお百ひやく度ど参りをしてでも叶かなえたい願いだったのだが……それに干渉するほどの強さの希望として、トゥアールと仲良くしたいという願いも無意識下であったようなのだ。
　いざ愛香が眠りに落ち、機械がモニターに映し出した夢の再現映像では、愛香とトゥアールが普段が嘘うそのように仲良くしていた。それを見て俺や慧理那は微ほほ笑えましく思ったのだが、トゥアールには想定外すぎたようで、機械を破壊するほど恥ずかしかったみたいだ。
　けれど……問題はそこからだった。
　夢から覚めた愛香が、トゥアールとストレートに仲良くしたがるという、ヴァーチャルトゥアールームで再現された夢そのままだったのだ。
　俺や慧理那は、それはとても喜ばしいことだと思った。だが、いつも悪戯いたずらしたり軽口を叩たたいては愛香にブッ飛ばされてきたトゥアールも、そんな愛香のしおらしい態度には慣れないらしい。昨日の夜、今日の朝、昼休みなど、徹底して愛香から逃げ回っていた。
　そして今日は先に帰ると言い残して教室を出たトゥアールが、俺や慧理那が部室に来た時にはすでに部室にいた。そうまでして愛あい香かとの会話を避けているのだ。
　先ほどのように気疲れからか居眠りをしてしまうほど、本人的には深刻な問題らしい。

　壁に頭から突っ込んで少し冷静になったのか、トゥアールはよろよろと席に戻った。

「すみません総そう二じ様……取り乱しました」
　行動自体はいつもどおりというか、さほど取り乱した末のものとは思えなかったが、とりあえず理由を尋ねた。
「尋常じゃない怯おびえようだけど、おかしな夢でも見たのか？」
「今世紀最大のナイトメアに見舞われたんです……今私の深層心理下にある恐怖が極大化し、夢となったのでしょう……！　いい年しておねしょしても怒られないほどの凶悪な恐怖でした……！　だから今ここでおねしょします……!!」
　それはもはやおねしょといえるのだろうか……。
　しかし、トゥアールがどれだけの恐怖を感じたのかは如によ実じつに伝わった。
「……あっ……いい年といっても私は十五歳ですから！　まあ、おねしょもギリギリありですよね!?」
　言ってから何かに気づいたように、慌あわてて訂正してくるトゥアール。いや、駄目だろう。
「だいたい何で私がタチで愛香さんがネコなんですか私は攻められたい派ですから安心して強気で来てくださいね総二様!?」
「う、うん……？　何だ、怖い夢って愛香が出たのか？　トゥアールらしくないじゃないか。いつもはあんなに元気にじゃれ合ってるのに」
　愛香に真っ向から戦いを挑むなんて、トゥアール以外にはできないだろう。
「限度がありますよあの攻め方はなしですよまだメリケンサックつけて殴なぐりかかってこられた方がマシですよ!!」
　慧え理り那なはトゥアールの微ほほ笑えましい怯えようを温かく見守りながらも、昨日地下基地で自分は機械を使わせてもらえずじまいだったことを思い出したらしく、残念そうに肩を竦すくめた。
「でも、わたくしたちも望んだ夢を見てみたかったですわね、観み束つ

か君」
「そうだなあ」
　もっとも俺は、どうしても望んで見たい夢というものがない。
　俺たちが守る、みんながツインテールを愛してくれるようになってきたこの世界が、眠らずに見る俺の夢なのだから。
「そそそそそそ総二様今すごくかっこいい顔されてますけどそれでも発情できないぐらい私はピンチナウなんです！　……慧理那さんあの機械は危険すぎます当分封印です今は愛香さん対策をしなくては私の貞操が……!!」
　天井を越えた先に輝く青空ツインテールに思いを馳はせていると、トゥアールが半泣きで力なく縋すがり付いてくる。
　ちょうどその時、部室のドアが開け放たれた。
　桜さくら川がわ先生――ではなく、愛あい香かだった。
「……やっぱりここにいた」
「ひいっ!?」
　トゥアールがパンツを丸出しにしながらでんぐり返しで逃げる。そのアクションは一体何を意味しているんだ……。
「置いてくなんてひどいじゃない、トゥアール」
　唇くちびるを尖とがらせて不満げに俯うつむく愛香。
「いやああああああああああああああああああああああげに恐ろしきは拗すねる蛮族!!」
　そのままトゥアールの隣に座ると、愛香は椅い子すごと近づき、トゥアールの肩にそっと自分の頭を乗せた。……ツインテールを肩に預けてもらうの、なんかいいな。
「今日はあんまり会えなかったし、補充しないとね」
「目を覚ましてください愛香さん……！　総そう二じ様と慧え理り那なさんが私たちを微ほほ笑えましく見守っちゃってます！　四人グループ

で一組ペアを作ることの意味を考えて！　もう一組がなし崩し的に『俺たちも付き合っちゃおっか』になっちゃうんですよおおおおおおお‼」
　髪の毛が逆立つ勢いで全身を激震させるトゥアール。
　いつもはバイオレンスなやりとりが主体だけど、ストレートに仲良くすることが愛香の新しい逆襲にもなっているのかな。
「トゥアール、今日は元気だね。あたしとこうなる前……あの頃ころに戻ったみたい」
　子猫のように頭を二の腕に擦こすりつけながら、愛香がトゥアールを仰ぎ見る。
「蛮族の分際で何か事後っぽい愁うれいを帯おびた表情に⁉　こうなる前ってどうなってるんですか私は今⁉」
　トゥアールはフェイントを駆使した動きで愛香から離れると、目を血走らせて俺に駆け寄ってきた。
「……お願いします、私に協力してください総二様、慧理那さん……！　愛香さんを元に戻さないと‼」
「でも、今の愛香に何か問題があるか？」
「あれは私の機械の効果の残ざん滓し……決して愛香さん本人の意志ではないんです。愛香さん自身があのように私と接したいと思っているならともかく……偽いつわりの感情を植え付けられるのは、不幸なことだと思いませんか？」
　トゥアールの言うことももっともだ。
　本人が望んだ夢とはいえ、それが本人の意志とは関係なくずっと見続けている夢なら……いつかは覚めなければならないだろう。
　ちらっと視線を送ると、愛あい香かがむすっとしながらこちらを見ていた。
「わかったよ、俺たちにできることなら協力する。方法は考えてるのか？」

「はい！　まず総そう二じ様は私と学生結婚しているという設定にしてください」
「なんでだ⁉　…………うおっ⁉」
　右足にひりつくような痛みを感じ、出所と思おぼしきポケットをまさぐると、中には折り畳たたまれた婚こん姻いん届とどけが入っていた。
　今日は用事で来れないらしく、慧え理り那なのことは任せると俺に言った桜さくら川がわ先生だが──その意志が宿った婚姻届が、何かを俺に訴えているのか。
　っていうか何で普通にいつの間にかポケットに仕込まれているんだ。
「あの、わたくしは」
　自分を指差し、役割を期待する慧理那だったが……。
「慧理那さんは、総二様に飼われているペットという役割です」
「それは今と何か違うのでしょうか……？」
　やはり慧理那も疑問を抱いだいたようだ。いや、よく考えると疑問の抱き方が何か間違っているような気がするが、小声での密談では思考回路の駆動も小回りになってしまうらしい。俺は深く考えないようにした。
「わ、わかった。愛香を元に戻すためだしな。トゥアールに任せるよ」
「やったあああああああああああああああああああああああああああ!!」
　俺が了承した瞬間、トゥアールはＸ字に身体からだを広げて飛び上がった。
「ど、どうしたトゥアール⁉」
「うへへへへへへへへ、一時はどうなることかと思いましたが……トゥアールちゃん大勝利です……！　偽装恋人ごっこなんて始めたが最後何やかんやでそのままゴールしちゃう最たる安易イベント！　『もっと恋人っぽいところ見せないと疑われちゃうよお』とか言って愛香さんの見

ている前でベッドインです!!」
　トゥアールは振り返ると、細かい部分でも念押しをしてきた。
「私の身体で使っていない場所はないという設定でお願いしますね、総二様」
「よくわからないけどその追加設定は本当に必要なものなのか……!?」
　にやけ顔で身体をくねらせながら、待ちぼうけを食っている愛香へと歩み寄るトゥアール。
「うふふ～、愛香さんにお知らせがありま～す」
「何よ、そーじとベタベタしちゃって、あと五秒遅かったら止めに入ってたわよ」
「残念ながらそれはこれからも続きます！　実は私、総二様と結婚してます!!」
「────────は？」
　瞬間──愛香の瞳ひとみから光が消えた。
「そして慧理那さんは夫婦のペットです。乳製品をよく舐なめます」
　だからその設定は堅持すべき点なのだろうか。
「な、何で……いつの間にそんなこと……!!」
　愛あい香かはよろめきながらトゥアールに縋すがり付き、その細い両肩を掴つかんだ。
「いつかは、言おうと思っていたのですが……」
　次第にトゥアールも芝居がかってくる。役に入り込んでいるのがわかるが、何か愛香との間に致命的なテンションの溝があるように思えるのだが……。
「う、嘘うそよね!?　いつもの冗談でしょ!?」
　涙ながらに訴える愛香。トゥアールの頬ほおを冷や汗が伝う。
「す、すでに入籍は終えています。ごめんなさい愛香さん、あなたとは遊びだったんです。結婚式でブーケを受け取ってくださいね」

　ポケットの中の桜さくら川がわ先生の婚こん姻いん届とどけが、入籍という言葉が出た瞬間マグマのように熱く……。錯覚だろうが、このまま本当に俺の肉体を焼き尽くしかねない強力な念がこもっている。
「やだ……」
　愛香はトゥアールの腰に縋り付くように抱きついた。
「やだ、やだ……！　あたしそんなの絶対認めないから!!」
「ぎゃ――――――――――――す部室で始まる昼ドラ!!」
　素すに返ったトゥアールとは裏腹に、愛香のボルテージはどんどん上がっていく。
　慧え理り那なはあわあわと狼狽えながら俺の制服のシャツを握り締めてきた。
「ねえ、どうして……!?　あ、あたしの何が駄目だったの!?　教えて、直すから！　何でもするから、捨てないでよお!!」
「重いいいいいいいいいいいいいいいいい何ですかこの難易度ＨＡＲＤの女!?」
　白目で吐血しそうになり、愛香から離れて俺の方に逃げ帰ってくるトゥアール。
　大丈夫なのか、今そんなことしたら……。
「□□□□□□」
　わー愛香が涙目で唇くちびるを噛かみしめて嗚咽おえつを噛み殺しながらトゥアールを見てるー。
「……も、元々その資質はありそうとは思っていましたが……想像以上です……」
　トゥアールはガタガタと震ふるえながら俺に縋り付いてきた。
「長く見積もっても数か月程度付き合った相手に別れ話を切り出されただけでこの有様なんです、現実で十年にわたって想い続けてきた相手に拒絶されたらもう、人類史上希まれに見るヤンデレが誕生します

よ……！　今この夢から覚ましても、私たちは身近に爆発寸前の爆弾を抱かかえたまま生きていくのかもしれません……!!」
　頭を抱えて震えているためか、トゥアールの呟つぶやきは上う手まく聞き取れなかった。
「あ、あたしの何が悪かったの⁉　胸が小さいから⁉　自分が大きいから気にしなくていいんですよ、って……トゥアール言ったじゃない！　プラスマイナスゼロですね、って言ってくれたじゃない！　あたし、嬉うれしかったのに!!」
「嬉しい⁉　血迷ったんですか愛あい香かさん⁉　そんなこと私がほざいたら亜音速でブッ飛ばすでしょう⁉　あと私のスーパーバディでも愛香さんの宇宙開かい闢びゃく級のド貧乳をゼロ軸に戻すには全然足りませんよ⁉」
　ここまで言われても、やっぱり愛香は何もしない。トゥアールはもう、魂たましいが抜け落ちたようになっている。
　ああ、何か……俺もやっと実感してきた。トゥアールの言うとおりだ。ただいたずらに、表面的に仲良くなっても、それはどこか不自然なんだ。
　何を言い合っても、どんなに喧けん嘩かをしても最後にはわかり合える━傍はたから見ていて羨うらやましいとさえ思えた、愛香とトゥアールの間の強い信頼関係が、今は感じられない。
　これはいつもの愛香じゃない。いつもの二人の関係じゃない。
　いつもの二人の日常に戻してあげなければ━強くそう思った。
「これだけ精神的ショックを受けても正気に返らないということは、もはや正攻法では不可能ということでしょう……」
　トゥアールは尻しり餅もちをついて、怯おびえながらも決然とした表情で宣言した。
「ヴァーチャルトゥアールームを直し、愛香さんをもう一度夢の世界へ

と誘いざないます。愛香さんというか私が危険ですが……それ以外に方法はありません……!!」

第十話　ヴァーチャルリアリティ・ツインテール。

　ヴァーチャルトゥアールーム──それは、トゥアールが愛香の希望で製作した、自分で好きな夢を見ることができる発明。
　その試運転中に起きたトラブルで、夢から目覚めた愛香の記憶は混乱してしまっていた。
　今の愛香は、普段周囲の破壊も厭いとわずじゃれ合っていたトゥアールと、小さな女の子同士のような仲なか睦むつまじさを見せるようになっている。愛香がヴァーチャルトゥアールームで見た夢が、現実に持ち越されてしまったのだ。
　最初は俺や慧え理り那なもそんな二人を見て微ほほ笑えましく思っていたのだが、やがてそれが浅はかだったと考え直した。
　抱いだく夢と、見る夢とは違う。眠りの中で見る夢は、一夜限りのもの。
　その人が人生で大切に積み重ねてきた記憶を、夢が侵害することがあってはならない。
　愛香が、あの夢のようにトゥアールと仲良くしたいと本心では思っていたとしても……そうなるのは、醒さめない夢の中ではいけないんだ。

　　◇

　作戦の決行を放課後の部室で宣言した後、トゥアールは一人基地へと直行し、準備に取りかかる。集合時間に指定されたのは、トゥアールが先に帰った一時間後。

　時間通りに基地へと集まった俺と慧え理り那なと桜さくら川がわ先生、そして様子を見に合流してきた母さん。みんなでヴァーチャルトゥアールームへと足を踏み入れた。
　ちなみに愛あい香かは、トゥアールがまたも先に帰ることを隠して嘘うそを教え、部室に残してきた形になってしまった。心は痛むが、愛香を元に戻すためだ、仕方がない。
「お、お待ちしていました、皆さん……」
　出迎えたトゥアールは、隠しきれない疲労感を顔に滲にじませていた。
「うーん、トゥアールちゃん相当疲れてるみたいねえ」
「しかも、気疲れのようです」
　母さんと桜川先生が、よろめくトゥアールを見て心配する。
　ヴァーチャルトゥアールームは、愛香の見ていた夢の再現映像の鑑賞に耐えられず、トゥアールが自らの手で操作端末を破壊したその日、部屋ごと封印されてしまった。
　だが、夢から醒さめないままの愛香を元に戻すには、大おお本もとの原因であるこれをもう一度使用するしかないと、トゥアールが修理を施ほどこしたのだ。
「さすがトゥアールさん、一時間で修理が完了したのですわね」
　慧理那がふりふりとツインテールを揺らしながら、修復された操作端末を見渡す。
　そのツインテールの動きを目端で追いつつも、俺も部屋の様子を検あらためた。
　室内は以前と変わらず、簡素ながらもお洒しや落れな調度品で飾られ、エステサロンのような雰囲気を漂わせている。トゥアールが言うには、眠りに落ちやすくするよう自分なりにリラックスできる空間を演出したということだったが、その只ただ中なかにあってもなお、トゥアー

ルの緊張は半端ではない。
「愛香さんを元に戻すにはどうすればいいか……私なりに考えました」
　整列するように立つ俺たちを前に、説明を始めるトゥアール。
「記憶障害の治療に有効とされているのは、外的刺激による記憶の整理・修復ですが……いたずらに精神を揺さぶっては、愛香さんが大変大変大変大変態危険になるとわかりました」
　部室での愛香の怒りを思い出したのか、トゥアールは身体からだを抱いて震ふるえる。
　気のせいか今、わざわざ「へんたい」と聞こえやすいようにアクセントを調節して口にしたような……。
「そっか、俺と結婚している設定にしてくれ、と言い出した時は驚いたけど……トゥアールは愛香の記憶を刺激して元に戻そうとしてくれていたんだな」
　夢を見ていてそれが夢だと気付く一番の原因は、文字通りあまりにも現実離れしている状況で我われに返ることだ。
　親友や仲間を飛び越した極端な間柄を愛あい香かに見せることで、トゥアールは愛香に大きな疑問を抱いだかせようとしたのだろう。今自分が置かれている状況は、本当に現実なのかと。
「えっ⁉　は、はい、もちろんです！」
　妙に狼ろう狽ばいしながら、何度も頷うなずくトゥアール。
　とりあえず、俺の予想は当たったようだ。
「そもそも、俺もトゥアールもまだ結婚できる年齢としじゃないしな」
「そ、そうなんですよね～。私はあと一年すれば、ここでは結婚できますが……」
　ところで、結婚というワードが出てからというもの、桜さくら川がわ先生の目が怖い。
「とりあえずトゥアール、俺たちはこれから……」

　トゥアールの白衣のポケットから、やにわに響く着信音。慌あわててトゥアルフォンを取り出し、画面を見つめるや、トゥアールは絶叫した。
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいい愛香さんから!!」
　早撃ちを終えたガンマンが素早く愛銃をホルスターに収めるかのように、トゥアルフォンを即座にポケットに突っ込むトゥアール。
　メールだったみたいだが、文面には一体何が……。
「ああああああああ愛香さん、部室に置いてったから怒ってます！　怒ってるというか……病ん……とにかく、時間が無いようです！　皆さん、作戦を手短に説明します!!」
　今愛香は校門を出たあたりだろうか？　それとも家の近くで送信したのだろうか。
　一番確実に居場所が知れるのは、この地下基地に続くエレベーターに乗った瞬間だ。トゥアールが随時来訪者をチェックできるからな。
　いずれにしても愛香がこのヴァーチャルトゥアールームにやって来るまで、あまり時間はなさそうだ。
「愛香さんは今、このヴァーチャルトゥアールームの操作端末を私が途中で壊したせいで、覚かく醒せい後も夢を自分の記憶と誤解して生活している状態です。もう一度ここで望む夢を見てもらい、『夢を見終わった』状態で起きてもらう……それが一番確実だと思います」
　いつもモニターや何らかの機械を使って説明をするトゥアールにしては珍しく、口頭で早口での説明。彼女の焦あせりのほどが窺うかがえる。
「津つ辺べさんの記憶が混乱してしまったのは、あの時夢が途中で中断されたからなのですわね」
　深く頷く慧え理り那なと対照的に、難しい顔をして聞いている桜川先生。

　この件に関しては完全に巻き込んでしまった形なので、俺は頭を下げた。
「ごめん桜川先生、よくわからないと思うけど」
「まあ、なんとなくなら仕組みは想像できる。ところで観み束つか、トゥアールがさっき、津辺の記憶を戻すためにお前と結婚すると言った、と聞こえたが」
「……はい」
　やっぱりそのワードに関しては聴力が敏感なんだな……。
「結婚は神聖なものだ。軽々しく嘘うそとして使っていいものではないんだぞ」
「突っ込んだ方がいいですか桜さくら川がわ先生……」
　一生分の「結婚」「婚約」「婚こん姻いん」などのワードを数か月で俺たちに言い放った桜川先生が、その言葉そのものの重みを説くとは……。
　トゥアールが桜川先生との間に割って入ってくる。
「何を言ってるんですか総そう二じ様！　尊みことさんより私の方が絶対いいですから！　……くっ、時間がありません。総二様、この作戦が無事に終わったら、私に突っ込んでくださいね……」
「ならば観み束つか、私はトゥアールがその作戦とやらを成功させたらお前と結婚しよう」
　共によろしくないフラグを立てるトゥアールと桜川先生。
「総二様はすでに私と結婚しているんです!!」
「だからそれは嘘だろうが!!」
　トゥアールはそう言う桜川先生へと愛あい香かにするようにかかっていき、あっさりといなされる。むきになって再度向かっていくことはなく、すぐに肩を落とした。
「……はあ……」

　そんなトゥアールの肩を、桜川先生は優しく叩たたいた。
「わかっているさ。トゥアール、お前は私と争っても満足できんのだろう。津つ辺べでないとな」
「これから愛香さんの百ゆ合りっ気を浄化しようという時に、妙な地固めをするのはやめてもらえますか!?」

　トゥアールは、俺たちに手伝って欲しいことをざっと説明する。
　自分が愛香を上う手まく誘導してデバイスの役目をしているベッドに乗せるので、起動スイッチは俺たちに操作して欲しいということだ。
　機械の操作はリモコンで行うことが多いトゥアールだが、そんな自分の些さ細さいな動きも、今の愛香は目ざとく発見し作戦が失敗するかもしれない、と。
「私一人では、下手をしたら機械にかける前にこの場で愛香さんに狙ねらわれる危険性が高いです。皆さん、どうか私を愛香さんから守ってください……」
　何てことだ。
　今まで、愛香のどんな猛攻にも決して他人を頼ることなく、己の科学力と不屈の闘志だけで立ち向かってきたトゥアールが、愛香から守ってくれるよう俺たちに頼むなんて。
　今の愛香は、トゥアールにとってそれほど恐ろしい存在になってしまったのか……。

　その時、ヴァーチャルトゥアールーム内に、重厚なアラートが鳴り響く。
　いつものエレメリアン出現アラートの呑のん気きさとは違う、緊迫感のあるサイレンだ。
「アイカ反応、増大!!」

　おそらくそれを事前に察知できたとしても、トゥアール以外には全く恩恵をもたらさないであろう反応を機械で感知し、トゥアールが叫ぶ。
　そこまで愛あい香かの研究をしているのか。俺もツインテールの気配を感じたり、ツインテールでおおよその感情を見て取ったりぐらいならできるが、さすがにここまではできないな。

「……来ました……！　愛香さん、基地エレベーターに侵入!!」

　トゥアールは大おお仰ぎように白衣を翻ひるがえすと、五指をぴんと伸ばした右手を天にかざした。その一方で、左手で小型端末を操作する。
　そして、意志持たぬ基地内の迎撃プログラムへと向け、鼓舞するように呼びかけた。
「基地内アンチアイカシステムＥＸシリーズ、全起動フルオープン！　愛香さんがここに辿たどり着くまで、一秒でも長く時間を稼いでください!!」
「稼ぐ必要あるか!?」
　そこまで時間が切迫していたなら、何な故ぜ説明の合間合間に小ネタを……。しかし、疑問を持った俺の方が少数派だった。
「わあ、秘密基地に敵怪人が侵入してきた時みたいで燃えますわ!!」
「待って慧え理り那なちゃん、終盤で敵基地に乗り込む正義側とも取れるわよ！　私は断然そっちがお勧めね!!」
　胸の前で拳こぶしを握り締める慧理那。乗っかる母さん。
「慧理那さんの言うとおり愛香さんはやっぱり敵怪人ですよ未み春はる将軍！　いつかアルティメギル基地の母艦を発見したら、愛香さんを単身突っ込ませて奴やつらを恐怖のどん底に突き落としましょう!!」
　忙せわしなく操作しながら、それに補足をするトゥアール。

　シチュエーションも何も、俺の幼馴染おさななじみがただ歩いてきてるだけなんだけど……。
　突とつ如じょとして出現したスクリーンに、エレベーターから降り基地への道を悠然と歩く愛香の姿が投影される。
「何だ、津つ辺べのやつ笑顔だぞ。別に怒ってないんじゃないのか」
　桜さくら川がわ先生の評をトゥアールは真っ向から否定した。
「いーえ私にはわかります！　今の愛香さんは怒りをドストレートに表情に出さないだけで、あれは相当きてます!!」
　わかるんだ……。
「ＡＡＡアイカアストラルアタツクシステムも随時作動！　愛あい香かさんの注意を少しでも引き付けてください!!」
　ＡＡＡって、愛香に貧乳って言うためだけのあの設備か。
「今の愛香、胸の小ささをいじられても気にしてなかったぞ……」
　俺の懸念も、迎撃に夢中なトゥアールには届かない。
　超科学の粋すいを結集して標的を貧乳と罵ののしるＡＡＡも、その相手が貧乳を気にしなくなってしまえば無用の長物だ。悲しいことに。
「トゥアールちゃん、ＢＧＭ流しましょう！」
　母さんのリクエストで、オーケストラによる壮大なＢＧＭがスクリーンに映る愛香の後ろで鳴り響く。
「あれでは津つ辺べさんが本当に怪獣のようですわ、敵の基地に乗り込むヒーローであればもっと……」
　スクリーンを見て思うところあったのか、さらに意見を出す慧え理り那な。
　この期ごに及んでみんな余裕だなあ。俺はアドリブに弱いから緊張してきたんだが……。
「……」
　俺はノリについていけていないだろうと、桜さくら川がわ先生を窺う

かがう。
　だが、桜川先生もリラックスして慧理那を見つめていた。
　慧理那がヒーローの話をしている時、桜川先生はこんなふうに優しい表情になることが多い気がする。
　まるで……思い出に浸ひたるかのように。

　スクリーンの映像は、どこぞの怪談よろしく、どんどん今俺たちがいる場所の近くに移り変わっていく。
「ひいいいいいいいいいいいいいいいい!?　……っひっふー。ひっひっふー。今後の練習も兼ねてひっひっふー」
　よほど緊張しているのか、トゥアールはラマーズ法で呼吸を整え始めた。
　横並びに整列する俺たちの目の前でついに、ヴァーチャルトゥアールーム━この部屋の入り口のドアが開く。
「……」
　トゥアールの緊張が加重され、俺も思わず息を呑のんだ。
　静かな横滑りのドアだというのに、巨大な鉄てつ門もん扉ぴが軋きしみ、音を立てて開くような幻聴が聞こえる。

「……トゥアール……また置いてった……」

　拗すねてすら見えない……意外に普通の笑顔で、入ってきた愛あい香かが不満げに言う。ただし、何やらよからぬ雰囲気は十二分にまとって。
　そういえば基地の中でもここにいるとは伝えていないのに、迷うことなく最短距離。おとなしくなっても野生の勘は健在か、愛香……。
「あ、これマジでヤバいやつですね」

　愛香を間近で見るや、トゥアールが白目になって立ち尽くす。
　ゆっくりと愛香がこちらへと向かって歩いてくる。
　何だろう、もうＢＧＭは再生終了したのに、まだ何か聞こえる気がするぞ。もっとこう、ホラー寄りのおどろおどろしいやつだけど。
「……そーじと結婚するって、嘘うそよね、トゥアール……」
　薄く唇くちびるを吊つり上げ、小首を傾かしげる愛香。
「いえ、その」
「あたしとは、遊びだったってこと？」
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいるどら!!」
　トゥアールは叫きよう喚かんを響かせ砲弾のように後あと退ずさる。
　それでも恐怖を絶ち切るように首を振り、高速で揉もみ手をしながら愛香に近付いていった。
　愛香の問いには明確に肯定も否定もせず、引きつった笑顔でウインク。
「仲直りしましょ、愛香さん！」
　やはり、いつもは愛香のどんな蛮勇にも恐れず立ち向かっていくトゥアールだが、今は持ち得る勇気の全てを振り絞って戦っているんだ。
「何よ、そうやって――」
　言葉を遮さえぎり、愛香の手を掴つかむトゥアール。

「――ここで一緒に寝ましょう、愛香さん」

　妙に甘ったるい声で、トゥアールは愛香にそう提案。愛香は咄とつ嗟さに、並んで配置されたベッドを見やった。
「……ちょ、ちょっと待ってよ、みんないるじゃない」
「……総そう二じ様には、見て欲しいでしょう？」
「ッ……」

何な故ぜ俺が見る……!?
ともあれ愛香は先ほどの禍まが々まがしいオーラはどこへやら、驚くほど急激におとなしくなり、トゥアールと一緒にベッドまで歩いて行った。
「……服……」
愛あい香かがトゥアールの白衣の袖そでを摘つまむ。
「着たままでいいです。少しずつ脱がしっこしましょう？」
「恥ずかしいじゃない……！」
もじもじし始めた愛香と、冷や汗をかきながら愛香をベッドに連れて行こうとするトゥアール。ここからではもはや声は聞こえないが、二人は何やら一ひと悶もん着ちやくしているようだ。
「じゃあ、止やめますよ？」
「！　わ、わかったわよ……」
何とか愛香がベッドに横たわる。トゥアールも続けて二人ではいささか手狭なベッドに横たわる。
「ひょごっ……!!」
愛香の手が何な故ぜかトゥアールの背に回され、トゥアールが悲鳴を上げる。ガタガタと震ふるえながらも、後ろ手で俺たちに合図を送ってきた。
俺と慧え理り那なは頷うなずき、あらかじめ託されていた操作端末──もちろんボタン一つでＯＫなようにセットされている──を使い、二人の眠るベッドの入眠機能をＯＮにする。
枕に頭をつけている愛香だけがその効果を受け、程なく眠りに落ちていった。
「……眠りましたか……」
トゥアールがバク転をしながら俺たちの元へと戻ってきた。
そのキレのある体術は、不安の裏返しだろうか。

「まさか私が愛香さんをベッドに誘う日が来ることになろうとは……人生最大の過ちとして、今日という日は永久にトゥアールちゃんヒストリーに刻まれることでしょう」
　ふう、と額ひたいの汗を拭ぬぐうトゥアール。
　母さんは口元を手で隠しながら、ジト目で笑顔になった。
「でもトゥアールちゃん、愛香ちゃんをベッドに誘うのすごく上じよう手ずだったわね。未亡人が太たい鼓こ判ばんを押すんだから完かん壁ぺきよ!!」
「お義か母あ様ああああああああああああああああああああああああああああ!?」

　部屋の壁に設置された大型モニターに、あの時と同じよう、夢の再現映像が投影される準備が整った。
「百ゆ合りという魔界から解放してあげます……私自身を！」
　トゥアールが凛りゝりしい表情で、やや凛々しくない宣言をする。
「……二人で開幕全裸じゃありませんように……！　いえ、私のを総そう二じ様に見せる分にはいいですが、愛香さんの余計な全裸が入っていませんように……!!」
　神社で合格祈願する受験生のように必死に手を合わせ、トゥアールはモニターを振り仰いだ。
「…………」
　全員、しばし無言でモニターを注視したが……いつまで経たっても、愛あい香かの見ている夢が表示されない。
「……真っ黒ですわね」
　慧え理り那なが小さく首を傾かしげる。
「夢を……見てないってことか？」
「眠りが浅いのかもしれません。もう少し待ってみましょう」

　俺が尋ねると、トゥアールはそう結論づける。俺たちは、モニターを気にしながらもしばらく部屋の中で時間を潰した。
「手つきが！　背中を撫なでる手つきがいやらしいんですよあのエロソルジャー!!」
　どれだけ恐ろしい思いをしたか、トゥアールが皆に切々と語っている。

「…………」
　しかし、そこから二時間も経過すると、トゥアールも状況を怪しみ始めた。
「おかしいですね。ヴァーチャルトゥアールームを使用して、夢を全く見ないということはありえないはずなんですが……」
　真剣な表情で操作パネルとにらめっこし、思案を巡らせているトゥアール。
「う、う～ん……」
　愛香が吐と息いき交じりの声を漏もらし、全員の注意が向いた。どうやら目を覚ましたようだ。
　いや、愛香の夢が再現映像として映らなかっただけで、トゥアールの想定していた手順としてはこれで正しいはずなんだ。
　記憶が戻ってさえいれば……。

「ん……あれ？　あたしだけ、先に寝ちゃったの……？　ごめん、トゥアール……」

　着衣を確認するかのように自身の全身を見渡すと、愛香は照れくささそうにはにかんだ。
　やはり失敗だ。愛香はまだ、夢から醒さめてはいない……。

「そんなぁ……」
　トゥアールの魂たましいが口から抜け出てフーセンガムのように膨ふくらんでいた。
　これが最良の手段だと確信していただけに、ショックも大きいのだろう。
「あの、トゥアールさん……。見当違いなことかもしれませんが、よろしいですか？」
　愛香がベッドの上でまどろみ、まだ完全に意識が覚かく醒せいしていないことを確認し、そっとトゥアールに声をかける慧理那。
「津つ辺べさんはずっと、起きていて夢を見ている状態なのですよね？」
「ええ、そうですが……」
「……夢の中でさらに夢を見ることはできない、ということではないでしょうか……」
　はっとするトゥアール。理屈はものすごく簡単だし、そこまで単純な問題だけではないはずだ。だが、だからこそ、今冷静さを欠いているトゥアールには盲点だったのだろう。
「ど、どうしましょう、もうベッドにまで誘ってしまって、後がないというのに……!!」
　頭を抱かかえるトゥアールに、慧え理り那なは続けて意見を伝えた。
「わたくし、会話で記憶を取り戻してもらうのは間違いではないと思いますの。ショックを受けるような大きな嘘うそではなく……少しずつお話をして、津つ辺べさんに自分自身で記憶の齟そ齬ごに気付いてもらう。みんなで協力して、頑張りましょう！」
　子供みたいに小さくても、やっぱり慧理那はお姉さんなんだよな。
　自信を無くしかけているトゥアールにとって、それは何よりも頼もしい励ましだろう。

「ありがとうございます慧理那さん……慧理那さんとなら一緒に寝ます!!」
　力強く頷うなずくトゥアール。いつもの調子も取り戻したようだ。
　よし。今度は俺たち全員で、愛あい香かの記憶を取り戻すんだ──！

第十一話　あいかいぞう。

　翌日早朝の喫茶店アドレシェンツァ──その店内に香るコーヒーの甘く苦い香気を掻かき消す、スパイスの刺激臭。
　カウンター席に座る愛香に、母さんは大盛りのカレーを差し出した。愛香の隣では、トゥアールが冷や汗交じりにおとなしく座っている。
「お待たせ愛香ちゃん」
「いただきます、おばさん」
　愛香はカレーをスプーンで一口分掬すくうと、それをトゥアールに差し出した。
「はい、あーん」
「ひいっ！」
　早速身を強こわ張ばらせるトゥアール。
　俺と慧理那と桜さくら川がわ先生は、ボックス席で固かた唾ずを呑のんで二人を見守る。
　平常時の愛香ならばトゥアールには「あん？」と因縁をつけるイメージしかないが、まさかあんなにも優しげに「あ～ん」を繰り出すとは……。
　トゥアールは意を決してスプーンを咥くわえ、味わいを放棄して一気に飲み込む。
「も、もう！　どうしちゃったんですか！　私に優しくして!!」
「何言ってるの？　トァウール……あたしたち……」
「夢でも見てるんじゃないですか？　愛あい香かさん」
　細かい誘導はトゥアールに任せるとして、俺たちのやるべきことはこ

のように愛香に今置かれている状況が夢なのだと徹底して刷り込んでいくことだ。
「……夢……？」
　僅わずかに放心したのも束つかの間ま、愛香は疑念を払ふつ拭しよくするように一呼吸。スプーンでカレーを掬すくい、丹念に頬ほお張った。
「ちょおっ‼」
　椅い子すから仰のけ反ぞり落ちそうになるトゥアール。
「……間接キスじゃ、満足できないかも」
　唐突な愛香の流し目を防御するかのように、トゥアールは五〇倍速再生で両手を振る。
「いやいやいや私と間接キスなんてして喜ぶようなタマですか⁉　ペットボトルの蓋ふたかじって開けてそのままもぐもぐして飲み込むのが信条の愛香さんが‼」
　何よそれ、と苦笑する愛香。
「……じゃああんたを飲み込んでやるわよ、とか言って噛かみ付いてこない……何ですかこの愛香さんモドキ……」
　あまりにも張り合いがなさすぎて、トゥアールは目端に涙すら浮かべている。
　トゥアールのイメージの中では、愛香はアナコンダにだってなれるのか。
「…………（サッ、サッ）」
　中継役の母さんが、カウンターの奥から俺たちへハンドサインを送ってきた。
　いや、どの動作が何を意味するか、全く申し合わせてないんだけど……こういうの好きそうだもんな、母さん。とりあえず、こっち来いってことだろう。

　俺と慧え理り那なと桜さくら川がわ先生は、頷うなずき合って立ち上がった。
「どうしたんだ津つ辺べ、最近随分トゥアールと仲がいいじゃないか」
　桜川先生が愛香の隣に座り、俺と慧理那もさりげなく愛香とトゥアールの後ろに立った。
「仲がいいのはいつもの……」
　愛香がそう言いかけて、慧理那は慌あわてて繕つくろった。
「い、いつもはお食事はすぐ終えられますのに、今日はゆっくりですのね。津辺さん」
　愛香に状況への疑問を抱いだかせ、現実を認識させる。努めてさりげなくワードを抽出する……。俺にできるだろうか。
「そーじ？」
　考え込んでいた俺は、愛あい香かの声で我われに返った。手の平に、柔らかな感触。
「…………あ」
　また無意識のうちに、愛香のツインテールを触ってしまっていた。
　記憶が混乱しても、愛香のツインテールに乱れはない。いつもの愛香のツインテールの感触、そのものだ。
「そういえば、久しぶりな気がする。そーじがあたしのツインテール触るの」
「いつ以来か覚えてるか、愛香？」
「……え……と……あれ？」
　不思議そうに俺の手の平を見つめる愛香。何かが引っかかっているようだ。
　重ねてきた記憶は何も、脳の中にだけ息づいているわけじゃない。
　このツインテールもまた、愛香と共に歩んできた、愛香の歴史なんだ。

　みんながするように、上う手まく愛香の記憶に語りかけるのは俺には難しいかもしれない。
　だったら俺は、ツインテールへと直接呼びかけるまでだ。
　ツインテールが起点となって、愛香の記憶の混乱が解消されることを願う。
「聞こえるか、愛香のツインテール……」
「総そう二じ様⁉」
　コンタクト半ばにトゥアールに止められる。
「やっぱり危険か、いきなりツインテールに話しかけるのは……」
　自分のツインテールとの対話に成功したから、今度は……と思ったが、時じ期き尚しよう早そうだったかもしれない。
「危険か危険じゃないかと言われれば、確実に前者だろう」
　桜さくら川がわ先生にぴしゃりと言われ、俺はしぶしぶ諦あきらめた。
　気のせいか、俺の思っていた危険とニュアンスが違う言い方だったようだが。
「愛香ちゃん、特徴なくなっちゃって、寂しいわ」
「いや待て、ツインテールという最強の特徴があるだろう⁉」
　母さんの言葉にすかさず異議を唱となえる。人それぞれ趣味嗜し好こうがあるのはわかるが、こればかりは、母さんの言うことでもはいそうですかとは納得できない。
「総ちゃんにとってはそうかもしれないけど、やっぱり母さんは元気な愛香ちゃんの方が好きだもの」
「う……」
　脊せき髄ずい反射で反論してしまったが、元気がない……そのとおりだ。特に母さんは、俺と同じ時間、愛香を見てきているわけだからな。
　皿にスプーンを置く音が妙に店内に響き、俺たちは愛香へと視線を注

いだ。

「……ねえ、もしかして……あたし、何か変なの？」

　か細い呟つぶやき。何も考えずに尋ねたことだったが……俺の質問が、かなり気にかかったようだ。
「あたしたち……つき合ってるのよね？　トゥアール」
「……愛あい香かさん、何か違和感を感じているんですね？」
　トゥアールは肯定も否定もしない。ここで焦あせっては、また愛香の精神に大きな負担をかけてしまうからだろう。先ほどの俺も、かなり迂う闊かつだったかもしれない。
「そろそろ学校に行きましょうか、愛香さん」
「ええ、今日は部室で定期会議ですものね！」
　休日の部活動は、ツインテール部部室で定期会議だ。トゥアールと慧え理り那なが愛香を誘う。
　ずっと基地にこもるよりも、環境と状況を変化させてアプローチした方が効果はある。トゥアールの結論だ。
　幸い今日は部室で休日活動するだけなので、他の生徒に迷惑をかけることはない。
　……そういえば昨日一日、クラスのみんなはおとなしい愛香を見てどう思ったんだろう。

◇

　ドアベルを鳴らしながら店の外に出る。
「ねえ会長、部室で会議って……今さら何するの？」
「□□！」

愛香の何気ない発言に、慧理那は敏感に反応した。
今さら……？　夢でトゥアールと仲良くなった愛香は、ツインテール部部室に顔を出さなくなったのか？　何かが釈然としないな。
思案顔になったのも束つかの間ま、すぐに話題を切り替える慧理那。
「部室でみんなでお話するだけでも楽しいですわ。行きましょう！」
「それもそうね」
俺に愛香、トゥアール、慧理那、桜さくら川がわ先生、母さん。珍しい大所帯での登校だ。
人数が増えれば増えるほど、みんな学生服の中、一人だけメイド服の桜川先生が目立つな。
――――え？　一人だけ？
俺は呼吸をするのも忘れ、目を見開いて背後を振り向く。

「うふふ。どう、似合う？　総そうちゃん」

陽よう月げつ学園高等部の女子学生服を身にまとった魔王かあさんが、天下の往来に降臨していた。
「おわあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
ミニスカートをはためかせ、軽やかにターンをする母さん。
「いやー、久しぶりに着たけどまだまだイケるわね！」
視覚的ショックで俺の心臓が動揺、左心室がストライキを起こした。
深刻な動脈血の停滞に身体からだを喘あえがせ、俺は必死に母さんに抗議する。
「精神に負担をかける言動は慎つつしめってトゥアールに言われただろうがーっ!!」
「失礼ね総そうちゃん、母さんが制服着るとどうして精神に負担がかか

るの？」
　少なくとも俺はアラクネギルディとの戦いよりダメージを受けたぞ!!
　思春期の息子が母親の学生服コスプレを目まの当たりにする……誰だれか、俺とこの名状しがたい苦しみを分かち合えるやつはいないか……!!
「おばさん、似合うじゃないですか！」
「素敵ですわ未み春はるさん！」
「ええ、このままクラスに溶け込めますよお義か母あ様！　制服着ればそれでもう学生です!!」
　現役女子学生たちのリップサービスにつけ上がり、母さんは桜さくら川がわ先生にまで制服の着用を勧め始めた。
「尊みことさんも制服どうかしら？　懐かしいわよ！」
「未春さん……私はほんの一〇年前まで制服を着ていました、まだ懐かしむには早いです」
　やんわりと辞退する桜川先生。
　若干優越感を含んだ口調なのが気になるが、さすが大人の対応だ。
「とにかく、着替えてきてくれ母さん！　どうせ今日学校では部活だけだから……あとでツインテール部部室に来てくれればいい!!」
「わかったわ。ご近所さんが通りがかったら見せなくっちゃ」
「転送ロッカー使って来てくれ！　通学路でも校舎でも誰にも見られないように!!」
　今後の俺の人生を左右しかねない暴論に、俺は必死で母さんを止める。
　幸い、休日の早朝だからか店の近くの道路には人影は見当たらなかった。というより、何な故ぜか皆無に等しいが……なんとか母さんの学生服姿をご近所にお裾すそ分わけするというハルマゲドンは食い止めた。
ちぇー、と口を尖とがらせ、母さんは店に戻っていく。

「でも観み束つか君、わたくしのお母様も制服を見て昔を懐かしむことがありますし、学生時代を懐かしむことは皆さんあるのだと思いますわ」
　母さん、そして理事長。
　日常会話で二つのピースが出るたび、俺の心臓にメーデーが到来する。
　昔話でのお茶目ぶりを母さんから聞く限り、理事長もきっかけさえあれば本当に学生服を着かねない。
　…………二人を絶対に会わせないようにしなければ。母さんと理事長の過去ひみつを死守するという俺のシークレットミッションは、その絶対性をまた一つ確固たるものにしたのだった。

　　◇

　運動部の声もグラウンドから聞こえてこず、ことさらに静かな休日の校舎を歩く。
　陽よう月げつ学園に着いてから、愛あい香かはトゥアールとずっと手を繋つないで歩いていた。トゥアールは魂たましいが抜けたように、愛香のなすがまま手を引かれている。
「そーじと結婚するのが冗談で、安心した。脅かさないでよね……？
心臓に悪いじゃない」
「その発言で愛香さんがどれほど心臓にダメージを受けたか定かではありませんが、今の私が受けているダメージを上回ることがないのだけは確かです」
　こんな感じで、二人の会話はまだ愛香の独り相撲だ。
「トゥアール、手汗すごいわよ？」
「原因に心当たりありませんか、愛香さん……」

「……え……」
　さすがに狙ねらって言ったわけではないだろうが、その言葉で愛香は考え込んでしまった。
　そして部室に着いてから、愛香の違和感はより一層強くなったようだ。
　天井。壁。ロッカー。長机。椅い子す。
　丹念に視線を彷徨さまよわせ、疑念の源を探ろうとしているように思える。
「……何だろう……。あたし、何か忘れてる気がする」
「愛香さん……思案に耽ふけるのは結構ですが、無意識に手に力が……そろそろ、離……」
　俺も、なんとなくわかる気がする。
　心のどこかで何かがおかしいと思いつつ、それをはっきりと自覚することもできず、多少の矛む盾じゆんは受け容いれてしまう。
　それは、俺たちがいつも見ている夢がまさにそうではないか。
「トゥアールがあたしによそよそしい気がするし……気になるよ……」
「思考リソースを末端神経にも割り振ってくれませんか!?　愛香さんに恋人繋ぎされるだけでも精神ダメージがあるのに、握力の物理ダメージで指の軟骨擦すり切れそうなんですけど!?」
　僅わずかずつだが、愛香とトゥアールのやりとりも戻りつつあるように見える。
　やっほー、と母さんがロッカーの中から現れた。使えとは言ったが本当にあっさり使いこなすとは……。でも、普通の私服姿だ。俺は胸を撫なで下ろす。
　そもそも部室に母さんがいるというだけですごい違和感なのだが、先ほどの映像が強烈すぎて脳が受け容れかけているのがすごい。
　記憶、というか、認識力って結構いい加減なところもあるよな。みん

なでずっと過ごしてきたこの部室でなら、より顕けん著ちょに記憶への疑問が生まれるかもしれない。

「気になるといえば。愛あい香かさん、最近身体からだ、鈍ってません？」
　全員で長机を囲んで着席し、他た愛あいない日常会話を始める。
「そーね、もう暴れる機会もないし」
　愛香の何気ない応こたえに、慧え理り那なが神妙な顔つきで目を細める。
　俺の視線に気付くと、慧理那は繕つくろうように微ほほ笑えんだ。
「何か物足りないって感じませんか？」
「どうかな。今は、結構満足してるかも」
　愛香に意味ありげな視線を送られ、トゥアールは咄とつ嗟さに上体を仰のけ反ぞらせて不可視の視線を躱かわした。
「でも、何かが違うって感じてるあたしもいるの。不思議だけど……」
　俺たちは目立たないよう、互いを見合った。
　記憶への訴えかけは順調に進んでいるように思える。引き続き、焦あせらずにいこう。
「まず、語尾がいつもと違いますよね、愛香さん」
「語尾？」
　唐突なトゥアールの疑問提示に、首を傾かしげる愛香。
　どんな非日常でも即座に順応できることでお馴な染じみの母さんが、即座に乗っかった。
「そうそう愛香ちゃん、特徴のある語尾だったわよね！」
　すごい嫌な予感がしてきた……。
「愛香さん、今まで語尾に〝ムネ〟ってつけてたじゃないですか!!」
　自信満々に言うトゥアール。やばい、俺の記憶も混乱してきたぞ。

「そんな痛いことしてたっけ……」
　ありえない、と一いつ蹴しゆうせず、健けな気げにも疑問をひもとこうとする愛香。
　唐突に話題が切り替わったので、俺はトゥアールに何をしているのか尋ねた。
「記憶に波風を立てない些さ細さいな嘘うそを織り交ぜて、愛香さん自身の疑問を加速させるんです」
「なるほど……」
　小声で補足され、俺は信じることにした。些細な嘘じゃないから
ちょっと不安だが。
「さあ愛香さん、痛くない、痛くなーい！　語尾にムネをつけてください!!」
「……うん、トゥアールがそう言うなら……そうするムネ」
　はにかみながら吐血もののキャラ付けをする愛香。
　いつものトゥアールなら面白がってどんどん悪ノリするところだが、素直すぎるがゆえの恐怖を感じているのか、歯切れが悪い。
「そ、そうだ、愛香さんの好物って何でしたっけ？　好きな食べ物やスイーツ、ステータス欄には必要不可欠ですからね！」
「……え？　わかってるでしょ……トゥア」
「愛あい香かさんはりんご大好き！　いつでもどこでもりんごのことを考えて鞄かばんの中にはいつもりんごが満載でしょっちゅう我慢できなくて『えへへ～りんごおいしいよ～』とか言ってついりんごをつまみ食いしちゃう痛可か愛わいいヒロインを目指しましょう!!」
　滝のように汗をしたたらせ、マシンガンのように捲まくし立てて愛香の言葉を遮さえぎるトゥアール。
　目指しましょう、って、何か趣しゆ旨しが変わってきていないか。
「でもトゥアールちゃん、りんごだと普通じゃない？　ゲームのヒロイ

ンの好物ってもっとこう、フックがあるっていうか……プレイヤーの印象に残りやすいちょっと変わったものが多いと思うんだけど」
　……母さん、今ゲームのヒロインって言った？
　まさにゲームキャラのパラメータをチェックし、そして書き換えるかのように、トゥアールは続ける。
「すみませんお義か母あ様、りんごを丸まる囓かじりどころか丸呑のみしている愛香さんの笑撃映像が忘れられなくて……」
「お前の記憶も書き換わってきてるぞトゥアール!?」
　慧え理り那なが俺の制服の袖そでを引っ張る。
「観み束つか君……!!」
「あ、いや」
　つい条件反射で突っ込んでしまった。
　不思議そうに見てきた愛香に、俺は慌あわてて取り繕つくろった。
　しかし、愛香をアナコンダにするのが最近のトゥアールのトレンドなのか……？
「そういえば愛香ちゃん、いつも放課後に屋上で『へえ、キミ、あたしが見えるんだ』とか言ってたけど、今でもやってるんでしょう!?」
　放課後の屋上でツインテールをなびかせる愛香は想像できるが、その発言は聞き覚えがない。
「そうそう、本当、愛香さんったらギャルゲーのヒロイン！　……ブッチ切り不人気で後回しにされた挙句ＣＧ埋めのために惰だ性せいで攻略される感じの……」
「あたし、恋愛シミュレーションとかならたまにやるけど……ムネ」
　激げつ昂こうすることなく、穏やかな表情で返す愛香。……本人の意志と関係なく聞いていい情報かな、これ。
「またまた！　ゲーセンでゾンビシューティングゲームやり始めても『やっぱり鉛弾より拳こつちよね』とか言って画面にパンチし出すこと

でお馴な染じみの愛香さんが!!」
　ショッピングモールに併設されたゲームセンターのパンチングマシン、中一の頃ころに愛香がトップレコード出しちゃってたけど、あれから記録更新されたかな……。
「じゃあ間をとって、愛香さんの好きなゲームは理不尽難易度の懐ゲー、それもアイテム不使用生身オンリーの縛りプレイで!!」
「縛りぷれい!?　どのようなゲームですの!?」
　はしゃぐ二人に負けまいと焦あせったのか、慧え理り那ながやたらと反応している。
「津つ辺べさんは特撮の劇場版が大好きでしたわ！」
　いつもならやんわりと諌いさめる立場の慧理那が、嘘うそを用いた記憶の刺激に名乗りを上げるとは……。記憶の修復というか、会長の記憶をコピーされそうな危険を孕はらみ始めたぞ。
「会長、あたしが好きなのは恋愛映画だムネ。トゥアールも知ってるでしょ？　ほら……二人でシネコンに行って、座席の手て摺すりの上で手を握り合って……」
「そして私の指を粉々に砕いたんですか？」
「あたしがトゥアールの肩に頭を乗せて……」
「その頭で寸すん勁けいして私の肩の関節を外したんですね？」
「それで、我慢できなくなっちゃって、キス……」
「しようと見せかけて、私を巴ともえ投なげしてスクリーンに突き刺したんでしょう!?」
　愛あい香かの発言のことごとくを遮さえぎり、神に祈るような表情で記憶修正に勤いそしむトゥアール。
「ふふっ……。映画より、トゥアールの顔しか見てなかったムネ……」
　愛香は、頬ほおに朱を差しながら照れ笑いを浮かべた。
「ぎゃ―――――――――――――――す!!」

頭を抱かかえて床を転がり、遠心力で浮上しそうなレベルの猛烈な勢いでブレイクダンスを始めるトゥアール。俺の位置からやたらとパンツが見えるが、あの焦りようを目まの当たりにしては指摘してやることもままならない。

ブレイクダンスを片手倒立でフィニッシュして立ち上がると、トゥアールは息も絶え絶えに愛香に詰め寄る。

「あ、あ、あ、愛香さん！　私も特撮ヒーロー映画が好きなんです！　愛香さんもそうでしたよね⁉　そうしておきましょう！　特殊編集のＯＰで映画の内容ネタバレされる前に観に行こうが口くち癖ぐせでしたよね‼」

「トゥアールが好きなの、Ｚ級のビデオスルー作品じゃなかったムネ……？」

桜さくら川がわ先生も何か言わなければとばかりに、軽く身を乗り出した。

「津辺、お前は私とどちらが早く結婚できるか競争して……」

「それは今の愛香さんには禁句です――――――――――っ‼」

俺と結婚していると嘘をついて愛香の態度が豹ひよう変へんしたことがよほどトラウマなのか、トゥアールは全身で桜川先生に飛びかかって決死のディフェンスを見せる。

慧理那が二人の攻防に巻き込まれそうになり、思わずよろめいた。

「きゃっ……！」

咄とつ嗟さに慧理那を捕まえる。俺の胸に慧理那のツインテールを抱き包む形となった。

「大丈夫か、慧え理り那な？」

「は、はい……すみません……観み束つか君……」

それを目にした愛あい香かが、俺と慧理那を引き剥はがすように詰め寄ってくる。

「ちょっと会長！　そーじから離…………」
　しかしその行動に驚いたのは、外ほかならぬ愛香自身だった。
「……あれ……」
　トゥアールと会長を交互に見つめ、最後に震ふるえる自分の両手の平へと視線を落とす愛香。
「あ、あたし……」
　愛香は脇わき目めも振らず、部室を飛び出していった。
　悲しくたなびくツインテールに、俺は思わず手を伸ばす。
　突然の出来事に皆呆ぼう然ぜんとしていたが、母さんは何かに気付いたようだ。
「……なるほど。ようやく愛香ちゃんの記憶に決定的な矛む盾じゆんが生じたわけね。トゥアールちゃんが総そうちゃんとくっつく分には、トゥアールちゃんに嫉しつ妬とが向くけど……他の女の子だったら、トゥアールちゃんと結ばれる前の条件反射が優先されちゃうから」
　独り言に近い母さんの推論はいまいち要領を得ないが、今はそれどころじゃない。
「追いかけよう！　トゥアール、場所はわかるな⁉」
「は、はい、トゥアルフォンを使えば……！　……ええと……この方向は……」
　俺たちは、一旦母さんと桜さくら川がわ先生に部室の留守を任せ、愛香の後を追った。

◇

「……何、よ……先回りしてたの……？」
　俺たちに十数分遅れで目的地に着いた愛香が、膝ひざに手をついて息を整える。

　愛香の向かう目的地の見当はついたが、そこまでは慧理那には厳しい距離だった。
　そのためトゥアールの転送ペンで先回りをしたのだ。
　目の前に広がるメッセホール──マクシーム宙そら果はて。
　我われを忘れた愛香が向かった先は、俺と、愛香と、トゥアールと、慧理那──俺たちツインテイルズの始まりの場所の一つだったのだ。
　全力で走るうちに、心も落ち着いたのだろうか。愛香は苦笑しながら歩み寄ってきた。
「トゥアール、あたし……」
　彼女の手を取り、自分の指を絡める。
　そして、確信に変わったように切なく笑い──繋つながった指を解ほどいた。
「……これ。もしかして、あたしの夢？」
　空を飛んでいる自分に、「どうやって飛んでいるのだろう」と疑問を抱いだいた時。
　既き知ちの仲のように話していた人が、見知らぬ人間だと気付いた時。
　人は、それを夢だと気付く。
「はい、そうです。ついでに言うと……」
　その先が言えないトゥアール。自分と仲良くなっている、今の愛あい香かを完全に否定できないのだろう。ただの夢だ、現実ではない、と。
　それが、夢から醒さますために必要なことだとしても。
「……そーじ」
　今度は俺に向き直り、自分のツインテールを片房掬すくう愛香。
　意を決して、俺の胸の前へと差し出してきた。その瞳ひとみに、確信の輝きを灯ともして。
「あたしのツインテール、触って」

弾はじいた風船を手の平で受け止めるように、注意深く、そして優しく愛香のツインテールに触れる。
「……やっぱり……そー……」
愛香の声は次第にか細くなっていった。そして、ツインテールがぐらりと揺れる。
「……愛香……？」
しな垂れかかってくる愛香を、もう一方の腕で抱き留とめた。
愛香は穏やかに寝息を立てている。
オーケストラを背に基地を闊かつ歩ぽしていた姿とのギャップに、俺は吹きだしそうになった。
「こんなところで眠るなんて……」
愛香はいつも気を張っているんだ。俺たちが傍そばにいる時ぐらい、安心して眠ってくれてもいいよな。
「もう心配ないでしょう。今度こそ愛香さんは、夢から醒めます」
データを分析するでもなく、直感的な安あん堵どを見せながらそう告げるトゥアール。
「夢見る乙おと女めのふりをしても、愛香さんは愛香さんですね……。さんざん私に発情しておいて……結局は、総そう二じ様の手で目を覚ますんですから、このエロ蛮族は」
安心したのは、愛香のツインテールに触れた俺も同じだった。
ツインテールの感触は変わらない。けれど、喫茶店で触れた時には心細さのようなものが伝わってきた。
トゥアールと仲良くしながらも、初めから愛香は不安を感じていたのかもしれない。
今は違う。仲間おれたちを信頼し、安心してツインテールを委ゆだねてくれている。
安堵の表情から一転──トゥアールは沈着冷静な科学者の貌つきへと変

わり、周囲を見渡す。休日なのにただの一人の姿もない、大型メッセホールの周囲を。
「……驚かないで聞いてください、総二様、慧え理り那なさん。ありえないことなので……ずっと半信半疑でしたが……ようやく確信が持てました」
　奇妙で騒がしく、楽しかった日々と決別するように……あえて淡々と、事実だけを紡つむいだ。
「私たちは今、愛あい香かさんの夢の中にいます」
　驚きよう愕がくすべきことなのだろうが……むしろそんな荒こう唐とう無む稽けいな推論は、単純な俺の方が先に思いついていた。だから、やっぱりそうか、ぐらいにしか思わなかった。
　学園内でも有名人の愛香とトゥアールがこんなに仲良くなっているというのに、クラスメイトや学園中の生徒たちがどんなリアクションをしたか、全く覚えていない。当然だろう、そんな場面は遭遇していない……生徒がいなかったのだから。
　近所にも、学校にも、このマクシーム宙そら果はてにも、俺たち以外人っ子一人いない。
　今この世界にいるのは、あの日ヴァーチャルトゥアールームに足を踏み入れた六人。
　俺と愛香、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生、母さんだけだ。
　俺がそのことを伝えると、トゥアールは苦笑して頷うなずいた。
「ヴァーチャルトゥアールームの誤作動だけでは起こり得ないことです。夢が繋つながるなんて……私の科学知識だけでは不可能です。もっと何か別の力が働いたのでしょうが……」
　あり得ないと断じて、真っ先にその可能性を排したことを悔やむトゥアール。

そして慧理那は、感慨深げにマクシーム宙そら果はてを見上げていた。たびたびこの夢、愛香の発言から何かを類推していたようだったが、それが今はっきりとしたようだ。
「津つ辺べさんが最初に見ていた夢……どうして冬なのだろうと思ったのです」
愛香に、ツインテール部部室で何を会議するのかと、疑問を投げかけられた。
「多分……津辺さんが見た夢ではもう、エレメリアンとの戦いは終わっていたのですわ……」
そしてもう、暴れる機会がないとも告げられた。それは、戦う相手がいなくなったことを意味する。……それで、慧理那は確信したのだろう。
「……慧理那……」
俺たちとアルティメギルの戦いは、桜舞う春に火ひ蓋ぶたを切って落とされた。
今年か、来年か……。再来年、俺たちが三年生になった冬──は、慧理那が卒業しているから違うかもしれないが……。
愛香にとって冬の終わりは、きっとエレメリアンとの戦いの終わりの象徴でもあるんだ。
そしてそれは、世界を渡る復ふく讐しゅう者としてのトゥアールの肩の荷が下り、普通の女学生として笑って日々を過ごせるようになった季節とき──。
愛香が……あれだけ強く強く巨乳になりたいと願っていた愛香が、機械が誤作動するほどに同じぐらい、強く願った日常。
「あの冬空ゆめは、お前が望んだ未来だったんだな、愛香──」
俺の肩に頭を預け、寝息を立てる愛香。そのツインテールを、あやすように撫なでた。

「これは、正夢にしなくちゃな！」
「ええ!!」
　それにしても、いつから俺たちは、愛あい香かの夢と繋つながっていたのか。
　現実の今はまだ初夏。愛香の望む季節には、少し遠い。
「でも、頑張ったことは無駄ではなかったはずです。夢の世界にそもそも時間の概念があるかさえ定かではありません。愛香さんが夢だと自覚してくれなければ、私たちもずっとこの世界で暖の簾れんに腕押しし続けたのかもしれないんですから」
「ああ……そうだな、トゥアール」
　長かったトラブルも、これでようやく一区切りといったところか。
　愛香を支えていることを忘れ、思わず伸びをしそうになった俺は──駐車場の隅で、サッカーボール大の黒い煤すすが浮いているのを見た。
　何かの見間違いかと思ったが、違う。
　むしろ煤は、半紙に垂らした墨汁が滲にじみ広がるように、じわじわと大きくなり始めた。
「何だ!?」
「……総そう二じ様、慧え理り那なさん……。愛香さんの夢には、続きがあったようです」
　きっと唇くちびるを噛かみしめ、トゥアールは今や大火の如ごとく揺らめく煤を睨にらみ据すえる。
　そこに驚きはあまりなく、むしろ「やっぱり」という無念すら見て取れる。
「愛香さんは初めの頃ころ、いつも気にかけていました……。いつ戦いが終わるのか、何体エレメリアンを倒せば戦いは終わるのか、と……」
　確かに、しきりに俺のことを心配していた。敵の規模が膨大すぎて知れないと聞いて、少なからず動揺していたが……。

「エレメリアンとの戦いが終わり、それでも変わらず私たちと過ごす──それが愛香さんの夢だとしたら、その合わせ鏡に」
「──戦いが終わらない悪夢が……!!」
　俺はあらためて、目の前に広がる漆しつ黒こくを見据えた。
「──じゃあ、二度目に夢の再現映像が映らなかったのは……」
　何も映らず真っ暗だったんじゃない。夢の中で夢が見れなかったんじゃない。
「夢の続きに……これが映っていたんだ───!!」
　俺が呟つぶやくと同時、目の前の黒い炎は粘土を成形するようにシルエットを作り上げていった。
「エレメリアン!?」
　慧理那が驚きの声を上げる。
　全身をおどろおどろしい黒色で彩いろどられ、撓しなやかな腕……蹄ひずめの如き爪つま先さき、精せい悍かんな細身の顔。
　軽やかに、しかし力強く揺れる尾……。
　馬を意匠としたエレメリアンであるのは間違いなかった。
「───馬のエレメリアン……」
「どうした、トゥアール!?」
「い、いえ。何でもありません。黒馬ですから……」
　トゥアールは歯切れ悪く言葉を切ると、
「黒い馬の怪物は悪夢の象徴になることもあります。おそらくあれは愛あい香かさんの潜在意識が具現化させたエレメリアン……いわばナイトメアギルディです」
　あれは……愛香のイメージから誕生した、この夢の中の存在だっていうのか。
「ナイトメアギルディ……けど、今まで馬のエレメリアンなんかと戦ったことないぞ!?」

　相当な数のエレメリアンを相手にしてきた。神話の怪物をモチーフとしたエレメリアンとも幾度も戦った。
　その中に、馬……例えばホースギルディといった敵はいなかったはずだが……。
「ええ、確かに夢は脳の休息であり、記憶の整理です。見知らぬ風景や人物を夢に見ても、それはどこかで見聞きした情報を再構成しているだけ。昔から予知夢の勘違いの原因でした」
　再構成っていっても、パーツ単位で全身を見ても、どれにも覚えがないが……。
「津つ辺べさんがいつかこのような相手と戦うことを思い描いていたということでは？」
「なるほど、ありえるな」
　もっともな慧え理り那なの予想に、それでもトゥアールは頷うなずかない。
「──ブルーのテイルギアに刻まれていた記憶───」
「トゥアール？」
「……総そう二じ様。慧理那さん。最後まで迷惑をかけてすみません……」
　トゥアールは一連のトラブルで、随分と参ってしまっている。
　ここは単純明快に仕上げといこうじゃないか。
「とにかくだ。はっきりしてるのはトゥアール……」
　意識を集中させ、右腕のテイルブレスを可視化させる。

「──こいつを倒せば、全部終わるってことだろ？」

　俺たちが愛香の夢の世界に残されたのは、この結末を変えるためだったのかもしれない。

　慧理那もブレスを構え、俺に並び立った。
「トゥアールさん。あのエレメリアンを倒しても、津辺さんの精神に何か影響はありませんわよね？」
「むしろ、愛香さんの悪夢の化身である以上、残しておくのが悪影響でしょう。あのままぼへーっと突っ立っててくれればいいですが……」
　ナイトメアギルディはうたた寝から目を覚ましたかのように、身体からだを強こわ張ばらせ……俺たちに向かい、敵意を剥むき出しにしてきた。
「そうもいかないようですね」
　いや、相手は俺たち全員というよりも、産みの親である──
「総そう二じ様、慧え理り那なさん。夢だからといって油断なさらず。今ここにいる私たちは紛まぎれもない現実。ここでのダメージは現実の精神に繫つながります。実戦そのものとしてかかってください！」
　言われなければそのとおりに油断していたかもしれない。肝に銘じる。
「津つ辺べさん、いつも寝不足のようでしたし……今夜から少しだけ、夢見がよくなると思いますわ」
　お姉さんらしく愛あい香かを気遣う慧理那。
「愛香が生み出したエレメリアン相手なら、隠れる必要はない！　いくぞ慧理那!!」
「あっ……！　はい!!」
　このシチュエーションが何を意味するのか、慧理那も気付いたようだ。
　どうせ、見物人ギヤラリーはいない。俺たちだけの世界だしな。
　怖い夢なんて、俺が上書きしてやるぜ、愛香。
　二度とこんな怪物にうなされないよう、俺のツインテールをお前の心に焼き付けてくれ!!

　俺と慧理那は同時に構え──魂たましいを夢に刻みつけるように、叫んだ。

「「テイルオン!!」」



第十二話　ツインテールの夢。

　競い合うように……包み合うように、赤と黄の光が爆裂する。
　並び立ったシルエットの高低差は逆転し、炎と雷を振り散らして二人の身体からだを装そう甲こうが覆おおう。
　守護の意志のままにはためく、二対のツインテール。
　テイルレッドとテイルイエローに変身した俺と慧え理り那なは、漆しつ黒こくのエレメリアンと対たい峙じした。
「感激ですわ、……普段、敵エレメリアンの前で変身は絶対にできないことでしたから……それも、観み束つか君と一緒に!!」
　身体は成長しても無邪気さは変わらない。イエローの感激に俺もつられて笑う。
　夢の中でエレメリアンと戦うことになるとは思ってもみなかったが……愛あい香かが自分自身で戦うのではないのは不幸中の幸いと言うべきか。
「そのうち津つ辺べさんも一緒に……今度は三人で同時変身ですわ!!」
「そうだな、いつか……」
　言い終わる前に、俺とイエローは左右に跳躍した。
　それまで二人が立っていた地面が、真一文字に斬きり裂さかれていた。斬ざん痕こんから黒い炎が立ち昇り、不気味に揺らめいている。
「鎌かま──」
　すかさずナイトメアギルディへと向き直ると、奴やつは身の丈以上の大振りの鎌を片手で持ち上げ、頭上で構えていた。
　鎌を武器に戦う戦士といえば、ダークグラスパーを連想する。

　唯一の人間の敵……。愛香は、ダークグラスパーを猛烈に敵視していた時期があった。漆黒のオーラをまとい、黒鎌を操る戦闘スタイルは彼女への警戒心が反映されているのだろう。
　ナイトメアギルディはまさしく愛香の思い描く悪夢、負の意識の集合体というわけか。
「ヴォルティックブラスター!!」
　フォースリヴォンを華麗に撫なで触れ、雷光と共に出現させたヴォルティックブラスターを構えるイエロー。
「ブレイザーブレイド……！」
　俺も頬ほおを叩たたき気合いを入れるようにリヴォンを弾はじき、ブレイザーブレイドを出現させる。
　俺とイエローは同時に地を蹴けり、ナイトメアギルディ目掛けて疾しつ駆くした。
　銃を携行していても、基本、インファイトを好むのはイエローのヒーロー像なので仕方がない。俺たちの連係は、徹底した接近戦だ!!
「うおおおおっ!!」
　振り下ろしたブレイザーブレイドと黒くろ鎌かまが交こう錯さくし、火花の代わりに黒炎が噴き散る。
　鎌を上段に構え無防備になったナイトメアギルディの横腹へ、イエローはヴォルティックブラスターを斉射した。
「ゥ――」
　僅わずかな呻うめき声を上げ、ナイトメアギルディはたたらを踏んだ。
「……これが、幻覚ゆめ……!?　重量も手て応ごたえもある」
『お二人とも……今の状況に疑問を抱きすぎると、心が乱れて戦闘に影響します！　普段通り戦ってください!!』
　視界の圏外へ避難したトゥアールが、通信という名の激励エールを

送ってきた。
　夢だって油断して攻撃を食らったりしたら、ただじゃ済まなそうだな……。身体からだはなんともなくても、精神が、だ。
　それにしても……。
「口を利かないエレメリアンってのも、味気ないもんだな……。お前らの主張に教えられることも多いんだが──」
　愛あい香かは俺と逆に、ブルーとして戦う際には敵の言葉に耳を傾けすぎて情を移さないように、というスタンスを徹底している。
　この人造エレメリアンが無言なのは、そんなブルーの主義と無関係ではないだろう。
　そう思った矢先──
「……ムネ……」
「!?」
　俺とイエローは戦せん慄りつした。
　ナイトメアギルディが、言葉を発している……。
「キョニュウ……」
　地獄の底から響いてくるような怨さん嗟さの声。
　絞り出すようなカタコトだが、明確に、明快に心に響いてきたのは、俺たちが日常で飽きるほど聞いてきた単語だった。
「くっ……」
　頬ほおを涙が伝いそうになるのを、懸命にこらえる。
　愛香……それが、お前のもう一つの……隠された悪夢ナイトメアなのか……!!
「ムネ────────────ッ!!」
　獣けもののような叫びが、大気を震ふるわせる。先ほどより遥はるかに鋭さを増した斬ざん撃げきが繰り出され、俺を無視してイエローへと襲おそいかかった。

本能的に大きな胸を求めるのか、ナイトメアギルディ!!
火力重視のイエローの重じゅう装そう甲こうは、機動力の高い相手では分が悪い……！
イエローは咄とつ嗟さに左腕をかざし、属性玉変換機構エレメリーションを発動させた。
「属性玉エレメーラオーブ──眠り属性スリープ!!」
後あと退ずさったことで目の前に浮き上がったイエローのツインテールが、強烈に発光した。
「ムネッ!?」
空中でバランスを崩し、地面に転がり落ちるナイトメアギルディ。
相当眩まぶしかったようだが、至近距離なのを考慮してもそこまで苦しむ光量だったとは思えないが……。
『マスクをしていない私でも平気だったのを見ると、あれは目の前の敵に対してだけ最大限に作用するようですね』
戦いを離れた場所でモニターをチェックしているトゥアールが、そう解説する。
指向性のある閃光弾フラッシユグレネード──眠り属性スリープの属性玉エレメーラオーブの能力は、敵に対してだけ効果を発揮する目め眩くらましといったところか。
眠りから覚ます「眩しさ」が発動効果……眠りに誘いざなうシープギルディ自身の得意技と真逆であるのは、皮肉な話だが……。
胸アーマーのカバーを展開、ミサイルを発射してナイトメアギルディの前面に弾幕を張ると、イエローは俺の隣に着地した。
「わたくし、少しブルーを誤解していたのかもしれませんわ」
「えっ？」
「津つ辺べさんはどんな時でも勇ましく、恐れるものなどないと憧あこがれていましたが……このエレメリアンがブルーの生み出した悪夢その

ものだとすれば、やはり津辺さんも、戦いそのものへの不安や恐怖はあるのですわね」
　まあ、あの我が武む者しや羅らっぷりを見れば怖いものなんてないと思うのも無理はないけど……。
「……そりゃそうだろ。愛あい香かだって俺たちと同じさ。戦いに怖さを感じなかったら、機械と同じだ」
　エレメリアンだって、ブルーに恐怖を感じたりしているぐらいだ。
　俺だって戦いは怖い。
　自分が傷つくことよりも、もし力が及ばずに、ツインテールを守れなかったら……そう考えたのは一度や二度じゃない。
　そんな時に仲間が支えてくれたからこそ、今も俺は戦い続けられているんだ。
「キョニュウウウ……!!」
　ミサイルを発射して胸部分の装甲を脱衣パージしたイエロー。気品ある揺れを見せるその胸に、ナイトメアギルディが視線を馳はせる。
「……ご主人様の温かな眼まな差ざしと違う、突き刺すような視線ですわ……」
　不服そうに、ちらちらと俺にアイコンタクトしてくるイエロー。
　できればコンタクトはツインテールでしてくれないか。目と目では未熟な俺では真意を汲み取れない……。
『慧え理り那なさんは睨にらまれるだけだからいいですけど、私はいつもそれに加えて物理攻撃を受けてますからね……』
　何て修羅な日常なんだ。
　ブルーが唯一イエローの戦法に口を出すのは、〝胸ミサイルだけは滅多に使うな〟だからな……相当気にしているんだろう。
　かつて俺たちは、リヴァイアギルディやクラーケギルディといった、胸を愛するエレメリアンと戦った。

　だが奴やつらには大きい小さいの差はあれ、鋼はがねのような信念と美学を誇りとして抱いだいていた。本能のままに巨乳を求めるナイトメアギルディとの差は、そこだ。
　イエローの胸部装そう甲こうの脱衣パージがトリガーとなり、ナイトメアギルディの殺気が増大していく。
「お前が殺気を高めるなら、俺はツインテールを高めるだけだ!!」
　フォースリヴォンに触れ、右手に意識を集中する。
　自分自身のツインテールと対話し……トゥアールの思いをより深く心に感じ、辿たどり着いた俺の新しい力。
　まさか夢の中で使うことになるとは思わなかったが……。
　実体のない宝箱の蓋ふたを開け、そこから宝物を取り出すように。
　イメージを形作れ。
　ツインテール属性を熱く燃やし、具現化するんだ──!!

「プログレスバレッター!!」

　バレッタ型の強化装備、プログレスバレッターを握り締める。菱ひし形がたに輝くそれを胸の前で構え、一気に割り開く。
　一対の三角型のパーツに分割したバレッターを、フォースリヴォンへと装着した。
　俺のツインテールが、さらなる激しい炎に脈動し、全身に力が漲みなぎっていく。
　腕と肩。胸と背中──。
　攻撃力強化に突出した進化を促うながすように、上半身に加積される装甲。
　これが俺の新たなるツインテール。上結びの強攻形態ライザーチエインだ──!!

「さあいくぞ、ナイトメアギルディ!!」
　ツインテールの昂たかぶりに呼応するように、肩の強化装甲が展開。溢あふれるツインテール属性の力が猛たけり、粒子となって迸ほとばしる。
　フォースリヴォンに同時に両手を触れ、二本のブレイザーブレイドを引き抜く。
　ナイトメアギルディの懐ふところへと迫撃した俺は、左の一刀で大おお鎌がまを撥はね除よけ、その隙すきを逃のがさず右の刃やいばで胴体を袈け裟さに斬きりつけた。
「キョニュ……ウゥ!!」
　聞いているこちらも苦しい苦く悶もんの声を上げるナイトメアギルディ。
　趨すう勢せいを不利と悟ったか、ナイトメアギルディは距離を取ると、禍まが々まがしい黒の揺らめきを全身から迸ほとばしらせた。
　黒い陽炎かげろうは千ち切ぎれるように身体からだを離れ、地面に勢いよく着弾。人間大へと伸長し、ナイトメアギルディと同じ容姿を形取っていった。
「レッド、あれはアラクネギルディの……!!」
「ああ……！」
　男の娘の楽園パ＝ラ＝ダンシ……アラクネギルディの分身技だ！
　これまでの戦いでブルーが最も苦戦した技……それがナイトメアギルディの奥の手として据すえられたということか!!
『アラクネギルディの出す分身スパイダギルデイと異なり、こちらは分身も同じ容姿ですが……属性力エレメーラの強弱で本体と区別できますので、私が誘導します!!』
「そういうことでしたら、倒し方も同じですわ。分身はわたくしが引き受けます、レッドは本体を!!」

「わかった!!」
　経過時間、二〇秒。
　ライザーチェインに形態変化チエインカスタムしていられる限界時間の二二秒を迎える前に、ツインテールを上結びから下結びへと結び直す。
　旋せん風ぷうのような鎌の一太た刀ちを跳躍で躱かわすと、再び俺の身体が炎に包まれた。
　旋風を貫く疾風と化し、炎で大気を焼き焦がしながら飛ひ翔しようする。
　超高速移動に特化せよと、テイルギアが躍動。腰に大型の姿勢制御装置スタビライザーが追加装着されている。
　みんなのツインテールとの絆きずなが生み出した、俺のもう一つの姿。それがこの、下結びの超速フオーラーチエ形態インだ!!
　速度で翻ほん弄ろうしながら、分身体から本体を引き離す。
　翼となって空に舞う下結びのツインテールに合わせるように二刀のブレイザーブレイドを構え、斬ざん撃げきを繰り出す。
　俺に下結びのツインテールを教えてくれたイエローもまた、全力を漲みなぎらせていた。
「夢の中でも、しっかりと見てくださいまし!!」
　イエローのツインテールが硬化し、アンカーのように地面に突き立てられる。
　全武装を一斉解放するイエローの切り札。完全脱衣形態フルブラストモードだ。
　けどすまん、見てる余裕が無い……!!
「津つ辺べさん……悪夢はわたくしたちが吹き飛ばします。今度は……いえ、いつか、わたくしと仲良くする夢を見てくださいね」
『いや絶対やめた方がいいですよ慧え理り那なさん躊躇ためらいなく身

体からだの関係を迫ってきますからこの性豪!!』
　トゥアールの迫真の訴えが届かないほどの全力発射。俺と切り結ぶナイトメアギルディの背後で、閃せん光こうが炸さく裂れつする。
　無機質なる夢む中ちゆうを乱れ咲く、機銃の彩華。
　迫り来る悪夢の群れをものともせず、イエローはナイトメアギルディの分身体を打ち砕いていく。
　あとは俺が本体こいつを倒せば……!!
　ツインテール属性を上半身・下半身へ一極集中する形態変化チエインカスタムは、インターバルが必要不可欠だ。
　基本形態を間に挟んで属性力エレメーラを流動させ、俺は再びライザーチェインへと変化する。
　八の字に二本のブレイザーブレイドを構え、振りかぶろうとした瞬間。
『！　総そう二じ様!!』
　背後からブレイドの刀身を何かに掴つかまれ、バランスを崩す。
「何っ⁉」
　不意打ちに気付いてくれたトゥアールの通信も虚むなしく、二本のブレイザーブレイドが奪われる。
　慌あわてて背後を見やると、分身体がブレイザーブレイドを手に走り去っていくところだった。
「まだ隠れてたのか!!」
　地面に産み落とされた影がそのまま実体化せず、設置型のトラップを思わせる周到さで一体だけ残っていたんだ！
　フォーラーチェインにチェンジし追いかけようとする俺に、ナイトメアギルディの本体が一いつ気き呵か成せいに攻め込んでくる。
　二刀のブレイザーブレイドを奪われ、空手となった俺は殺気のままに繰り出される鎌かまを避けるしか術すべはない。

　その時、テイルギアを通して俺の脳裏に新しい装備の情報が伝えられた。
「……そういえば、初めてここで変身した時……使い方は、こうしてテイルギアが教えてくれたんだったな……」
　背後にそびえるホールを背に、郷愁を覚えたのも一瞬。俺の思考は、武装へと集束した。
「──剣ツインテールならもう一対ひとつあるみたいだぜ……!!」
　ライザーチェインに強化変身することで俺の背中に加積された大型バックパックのパーツ。
　その上部に収納された二本の柄つかを一気に引き抜く。
「ブレイザーエッジ!!」
　面食らうナイトメアギルディへ、交差させながら斬きりつけた。
　二刀のブレイザーブレイドが使用不可能になった時のもう一対の切り札ツインテール、ブレイザーエッジ。
　刃渡りはブレイザーブレイドの半分程度だが、その分この零ぜろ距きょ離り戦では絶妙に取り回しやすい。
　左のブレイザーエッジは逆手に持ち替え、回転しながらの連撃。自らのツインテールと共に踊るように、俺は左右の二刀を次々と浴びせかけていく。
「ムネ……!!」
　ああ、俺も胸が苦しいぜ。けどな──
「お前に言うことじゃないだろうけど、嬉うれしいぜ……。愛あい香かの見た夢は、いつか訪れる未来だった……」
　戦いが終わり、普通の学生としてツインテールをなびかせていた、ある雪降る日。愛香には、明確にそのビジョンが見えていた。
「愛香の生み出した悪夢エレメリアンは、ここで俺たちが倒す！　あとに残るのは……自分の胸のことぐらいだ。外ほかでもない自分自身への

悩みが悪夢なら、きっと愛香なら乗り越えるさ!!」
　だったらまず今日一歩を踏み出して、そこを目指さないとな……!!
「レッドッ!!」
　イエローの言葉に振り向くと、俺に向かってブレイザーブレイドが投とう擲てきされていた。分身体から取り戻してくれたのだ。フォーラーチェインに変化して跳躍し、空中でブレイドを掴つかみ寄せる。
　眼下ではフルブラストで砕かれた分身体が、影に戻り、地面を這はってナイトメアギルディ本体へ戻ろうとしていた。本体を守ろうとしているのか、それともそうすれば本体が力を取り戻すのか……どちらでもいい。これで終わりだ！
　俺とイエローは頷うなずき合い、

「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」

　共に決着の気迫を漲みなぎらせた。
　俺はフォーラーチェインの加速装備を全展開し、最大加速でナイトメアギルディの周囲を旋回する。
　イエローは、全脱衣パージした武装を頭上で合体。完成した合身巨大砲ユナイトウエポンから、無数の弾丸が雷の尾を引いてナイトメアギルディへと殺到した。
　旋回の軌跡が炎の円柱となり、ナイトメアギルディを拘束バインド。
　それをさらに締め上げるように雷の拘束バインドも重なり、二重螺ら旋せんの結界となって閃せん光こうの飛沫しぶきを上げた。
　ツインテールを撥ば条ねに大きく跳躍し、合身巨大砲ユナイトウエポンの砲口へと身を躍らせるイエロー。
　そして俺は十二分に加速を得た状態でライザーチェインへと瞬時にチェンジし、二刀のブレイザーブレイドにプログレスバレッターを合

体。ブレイザーブレイドツインを握り締める。
　背のバックパックがスライド──噴き上がる炎の最終噴射ファイナルブーストに後押しされ、全身全霊を一いち斬ざんに託す。

「ライジングブレイザ───────────────────ッ!!」
「ヴォルティックジャッジメント───────────────ッ!!」

　必殺たる炎の斬ざん撃げきと雷の蹴しゅう撃げきは、まさしくたなびくツインテールのように交こう錯さくし、ナイトメアギルディを貫いた。
「キョニュウウウ─────────────────…………………」
　無念の叫びを爆炎の中に鎮め、ナイトメアギルディは爆散した。
「やったな、イエロー！」
「レッド……ご主人様とわたくしだけの、初の合体技ですわ！　息がぴったりでしたわね……はあ、はあ」
　身体からだをクネクネさせてにじり寄ってくるイエロー。
　策を弄ろうされた時にはヒヤリとしたが、イエローと力を合わせて倒すことができた。
「ああ、ツインテールとツインテールの呼吸が合ったんだ」
「……ツインテールって呼吸するんですのね……」
　え？　そりゃあするだろう。俺たちが呼吸をするように……な。
「ちょーっと待ったあああああああああああ！　お見事でした慧え理り那なさん、今度は私が総そう二じ様と息ぴったりな連係プレイをお見せしましょう！　ベッドで!!」
　戦いが終わり危険がないと判断したからか、トゥアールがこちらへと猛ダッシュしてきた。
「終わったな……」

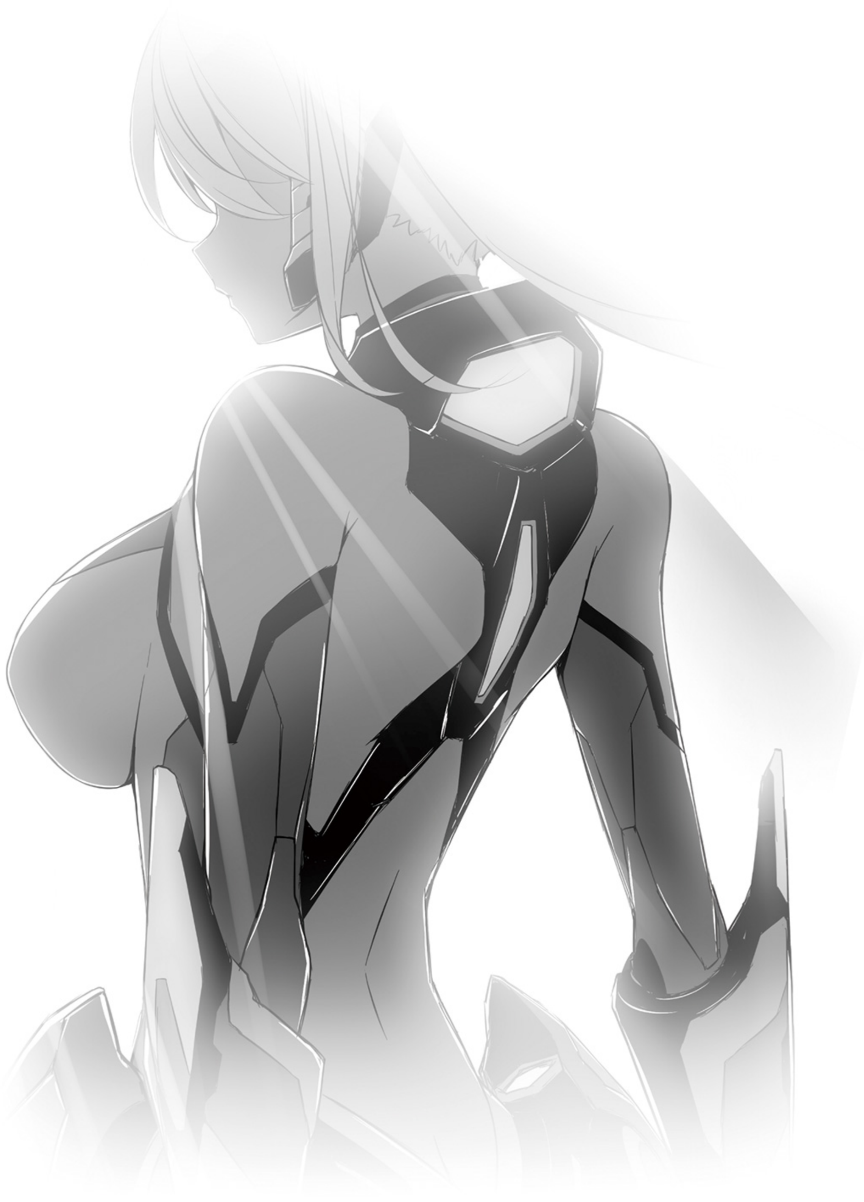
「はい。あとは愛あい香かさんが目を覚ますのを待つだけです。そうすれば、私たちの意識も夢から解放はなれるでしょう」
　マクシーム宙そら果はての入り口までの歩道に設置されたベンチ。愛香はそこに寝かされていた。
　俺は苦笑しながら、ナイトメアギルディが倒れた場所を確認する。
　当然だが、属性玉エレメーラオーブは出現しなかった。
　意思を交わすことのできない敵と戦うのは、やっぱり辛つらい。
　これからまだ続いていくであろう戦いに思いを馳はせ、変身を解除しようとした矢先──俺は、悪夢てきの想像を絶する周到さに驚きよう愕がくした。
「愛あい香かさん！」
　遅れて気付いたトゥアールが叫ぶ。三人の視線の先──。アスファルトを這はい、未いまだ眠る愛香へと迫る薄暗い影。
　地面という湖底から浮上するように、影はナイトメアギルディの形へと変化した。
「しまった、さっきの群体……まだ一体仕留とめ損そこねてたのか──‼」
　自分の進退が窮きわまった局面で、なおもトラップ用に一体を残してたっていうのか⁉　そうか……奴やつの徹底したこの慎重さも、愛香の影響を受けていたのか‼
「どうして津つ辺べさんが狙ねらわれますの……⁉」
　一足先に変身解除していた慧え理り那なが、慌あわてて再変身しようとする。
　慧理那の疑問通り、俺たちを外敵として排除するならともかく、あいつが愛香を狙う理由がない。だが、勘違いではないことは、放たれている殺気でわかる。考えている時間はない！
「うっ……！」

再び俺はバレッターを手にしたが……すり抜けるかのような手て応ごたえの無さに焦しよう燥そうする。
完全解放ブレイクレリーズした直後だからか……!?　フォーラーチェインへとチェンジできない!!
夢の中なんだ、ちょっとくらい無茶を聞けよ、俺の身体からだ……!!
「く、愛香─────────────ッ!!」
注意を引き付けるように大声を上げ、愛香の元へと疾しつ駆くする。
駆けつけて止めるのが間に合うか……何かを投げつけて牽けん制せいするか。
焦しよう慮りよに意識が白滅し、数少ない選択肢に惑う。

瞬間──大気という名の水面みなもに、美しい波紋を幻視した。

産みの親たる愛香の前で最後の力を振り絞ろうとしていたナイトメアギルディは、突とつ如じよとして推参した蒼あおき戦士──テイルブルーの一いつ閃せんに、大きくたじろいだ。
…………テイルブルー!?
愛香の目の前で!?
思わず顔を確認しようとした時……気がつけば俺の周囲は、目を覆おおうような眩まばゆい白一色となっていた。
スローモーションのような、緩やかな時の流れに揺蕩たゆたう。
白い光はテイルブルー自身が放っており、もっとも確認すべきそのツインテールこそが、光に溶け込み視覚の慮りよ外がいに在あった。
だが、俺は見た。
初めて変身してからというもの、愛あい香かが気にしなかった日は無かった、ブルーのテイルギアの胸部。
胸の大きな女の子がまとうためにしつらえられた、胸元が大きく開い

たアンダースーツは、誇るように豊かな胸を抱き包んでいた。



「まさか……!!」
　俺と驚きよう愕がくを共にしたかのように動きを止めたナイトメアギルディに、止とどめの一撃が加えられる。何だ、どんな武器を使った……!?　今、テイルブルーは何も手にしていないが……。
　そうして呆あっ気けなく、ナイトメアギルディの残ざん滓しは消滅した。
「さすがですわレッド、もう駄目かと思いました……。あの距離から追いつくなんて」
「え？」
　慌あわてて駆け寄ってきたイエローの言葉で我われに返るも、新たな疑問に思考停止する。
「イエロー、何も見えなかったのか？」
「ええ、目にも止まらぬ速さでしたので……」
　どうやらイエローは、俺がナイトメアギルディの分身を倒したと勘違いしているようだ。
　俺だけが見えた……錯覚だったのか？
　いや、そんなはずはない。
　挙動を察知させない体術。
　なびく髪のように優雅で鋭い一いつ閃せん。
　あれこそ話に聞いていた、速度を重視した本来のテイルブルーの戦闘スタイル──。
　俺は雷に打たれたように戦せん慄りつし、振り返る。
「焦あせりましたよ～、あの徹底した周到さ、まさに愛あい香かさんの戦闘主義バトルスタイルの化身でしたね」
　夢の中でも変わらず銀髪を煌きらめかせる少女が、屈託なく笑っていた。
「影に擬装して近付いてくる憐あわれなぺったんこぶりも、愛香さんそ

のものですけどね!!」
　目の前の愛香を煽あおるように、両手でたっぷりと持ち上げ、毬まりのように弾ませる豊かな胸。
　それが、あの瞬間──愛香を守るために颯さつ爽そうと身を躍らせた、蒼あおき戦士の双丘に重なった。

　さっき愛香を守ったテイルブルーは──
「愛香がイメージした、先代テイルブルーは……」

　───トゥアール……!!

　　◇

　気が付くと俺は、ヴァーチャルトゥアールームのベッドで上体を起こしていた。
　そうか、愛香の夢が終わって、俺も現実に還かえってきたのか……。
「ああよかった総そう二じ様、無事目を覚まして……!!」
　トゥアールが目に涙を浮かべて抱きついてきた。
「離れなさい、あんたが元凶でしょうが！　……心配したんだからねそーじ!!」
　すかさず愛香が飛びかかり、トゥアールと肩で押し合いながら俺を心配する。
「元凶は愛香さんのエロ妄想じゃないですか！　私が訴えたいぐらいです!!」
「トゥアール─────────────ッ!!」
　ふわりと揺れるツインテールを見て、俺は安あん堵どする。
　──いつもの愛香だ。トゥアールとの間にも、何の遠えん慮りよも無

い。
　トゥアルフォンをポケットから取り出し、現在時刻を確認する。
　最初にヴァーチャルトゥアールームを使った日だ。時間は、一時間も経たっていない。
　何日間もの出来事だったはずなのに。まあ、夢だもんな……。
「□□□□□□？」
　愛香の使っていたベッドサイドにあるスキャナー装置へと視線を移した時。
　──それが無事であるという、異変に気付いた。
　愛香とトゥアールの言い合いを耳にしながらも、俺の意識は装置に釘くぎ付づけになっていた。あれをトゥアールが咄とつ嗟さに壊してしまったことが、事件の始まりだったはずだ。何な故ぜ、あれが無事なままなんだ……？
　愛あい香かの夢の世界に入り込んでしまったのだから、起きがけは特に疑問に思わなかったが……俺がこうしてベッドに寝ていたのも、よく考えると不自然だ。
　もう一度、その時のことをよく思い出す。
　この装置が壊れていないということは……トゥアールが愛香の夢の再現映像に取り乱した直後、俺が覚えているのとは別のことがあったんじゃないのか。
　あの時──
『すみません愛香さん、トゥアールフルスイング！』
　トゥアールは夢を強制終了しようとバット状の武器を振りかぶり。
『待て待て、強制終了は危ないんだろ⁉』

　───俺は、それを止めたんだ。

『……この機械、六人同時に夢を見るためにベッドが六つあるのか？』
『いえ、一人一人専用に作っただけで、今のところ一度に一人が限界です』
　六人全員で眠りについたら、エレメリアンの出現を誰だれも探知できない。当然と言えば当然だ。
　そこで俺は、提案したんだ……。
『じゃあ俺が、この機械で夢を見る。そうすれば、機械を壊して強制終了するよりは安全に、愛香の目を覚ますことが出来るんじゃないか？』
『い、い、い、い、い、いいんですか？　再現映像が流れますけど……う、うふふふふふ』

　そうだ。俺は愛香の次にヴァーチャルトゥアールームを使って、眠りに落ちた。
　じゃあ、装置を壊してからさっきまでの出来事は、みんなが愛香の夢に取り込まれたんじゃなく、俺一人が見ていた夢だったのか……？
　黙り込む俺を見て心配したのだろう。慧え理り那なが、俺が眠っていた時の状況を耳打ちして説明してくれた。
「寝息は安らかでしたからわたくしは心配ないと思っていたのですが……とにかくトゥアールさんが心配なさって」
　桜さくら川がわ先生と母さんも傍そばに歩み寄ってきた。
「揺さぶっても起きんから、心配していたんだぞ。観み束つか」
「本当よ、もう待つのが辛つらくて。せっかくいい機会だから尊みことさんに結婚の素晴らしさを語ってあげようと思ってたところよ」
　諸もろ刃はの剣つるぎすぎるからそれは二人きりの時はまだちょっと勘弁してあげてくれ、母さん。
「……俺の夢、どんな映像だった？　エレメリアンと戦ったのは見たか？」

　愛あい香かに引き剥はがされたトゥアールに尋ねる。
「……それが、総そう二じ様が眠りについても、愛香さんも眠ったままだったんです……。本当についさっき、総二様が目を覚まされる直前に、愛香さんは目を覚ましました」
　ナイトメアギルディが倒れた瞬間、一足先に愛香が目を覚ましたということになるのか。
「総二様が眠りに落ちた途端、モニターの再現映像は真っ暗になって何も見えなくなるし、本当に心配しました……総二様だけ……!!」
　……トゥアールに心配をかけるからこれ以上は言えないが……俺自身の再現映像が見えなかったと言われ、確信した。
　やはり俺は、愛香の見た夢の続きを見たんだ。このヴァーチャルトゥアールームを通じて。
　愛香とトゥアールのやりとりは、とても俺の想像力から生まれたものとは思えない。
　夢の終端──愛香の悪夢が実体化したナイトメアギルディを倒したことで、夢は終わりを迎えたということなのだろう。
　とりあえず、夢は終わった。それでよしとしておこう。

「前々から愛香さんが私を見る目が怪しいと思っていたんです！」
「だからさっきから何言ってんのよ、あたしがあんたとイチャイチャ!?　この機械が不良品なだけでしょ、あたしはそんな夢見ない!!」
　トゥアールは、愛香が目覚めてからずっとあの夢の説明をしていたようだ。
「覚えてないんですか!?　あの地獄のような夢を!!」
「……何よ、エレメリアンがわらわら現れでもしたの？」
　愛香が連想する悪夢……やっぱりそれは、終わらないエレメリアンとの戦いだったんだな。

　夢の中での慧え理り那なの言だが……今日から、少し夢見がよくなるといいな、愛香。
「なあ愛香。トゥアールは愛香の願いを叶かなえてこの機械を作ってくれたんだ。ちょっと思った通りに動かなかったからって、怒らなくてもいいだろ。現にお前、すごくリラックスできてるみたいだぞ」
　俺がそう諭さとすと、慧理那も続けて言う。
「きっと津つ辺べさん、覚えていらっしゃらないだけで、とても素敵な夢を見られていたと思いますわ」
　慧理那は再現映像でトゥアールと仲良くするところまでを見たはずだから、素敵な夢のままだよな。みんなもそうだ。……よかった……。
「いいんですよ総二様、慧理那さん。やっぱ愛香さんはこうでないと。私も身体からだがなまって仕方がありません」
　再現映像の恐怖から解放されたからか、トゥアールの顔の色つやが磨き上げた鏡のようになっている。
「ねえ、トゥアール」
「なんですか全く」
　愛あい香かはそんなトゥアールを見て、一瞬何かを思い出したかのように天井を振り仰いだ。
　そして──

「……ありがとうムネ」

　夢の彼方かなたに置いてきたはずの、すでに懐かしい言葉を口にした。
「……何よこの痛い語尾⁉」
「セルフツッコミですか愛香さん⁉　さすがソロプレイはお手のものぎゃあああああああああああああああああああ‼」

それは、偶然だったのだろうか。
手の平を砂が零こぼれ落ちていくように、夢は起きたあと記憶に残らないものだが……素敵な夢なら、その断片は残ることもある。
きっと、トゥアールと楽しく過ごした記憶は、消えることのない夢の欠片かけらとして、愛香の心に残り続けるだろう。

そしてその夢の欠片は、俺も一つ持ち帰ってきた。
他のみんなには視認さえできず……俺も、生み出した愛香でさえも、在ありし日のツインテールを思い描き具現化させることはできなかったが。
あれは紛まぎれもなく、ツインテールの戦士、テイルブルーとして戦っていたトゥアールだった。

愛香が戦いの終わりを夢見たように。
みんなとの穏やかな日常を望んだように。
それはもちろん、俺の願いでもあるが……もう一つだけ、欲張らせてくれ。

トゥアール。
俺も、あの夢は起きて見ることにするよ。
ツインテールに、夢の欠片を宿して。

君のツインテールを、いつか──。

キャラクター名鑑 EX05



DATA

身長：212㎝

体重：????

属性力：????

愛香の夢の中に出現した謎のエレメリアン。実体が不安定で、全身が煤けている。愛香の悪夢の具現でもあるためか、ダークグラスパー、アラクネギルディなど、苦戦した対戦相手の武器や力を模して使いこなしていた。トゥアールは自分の過去の記憶をテイルブルーのギアが覚えていたことが、ナイトメアギルディがこの見た目で実体化した理由だと推察していた。しかしその記憶のエレメリアンは「黒馬ではない」ようなのだが……？

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

EX-001
イッカクギルディ

属性：八重歯属性（ダブルトゥース）



福島県
八重歯大好きさん(22歳)の作品

水沢夢の選んだポイント

本編のエレメリアン募集は12巻で終了していますが、外伝ということでプチ復活。過去の応募作の中から一体選ばせていただきました。
こちらは、かつてブログでも紹介させて頂いた応募作で、そこでも書いたのですが、コミカライズ版の『俺、ツインテールになります。π』のテイルブルーは八重歯が可愛く、私もちょっとした八重歯属性（ダブルトゥース）に目覚めた経緯があります。
そこで本編でも八重歯属性（ダブルトゥース）の敵の登場を虎視眈々と狙っていたのですが、今回特典小説のまとめに書き下ろしがあるということでチャンスだと思い、満を持しての登場となりました。イッカクギルディはデザインもバッチリ決まっていてかっこよく、理念も武器もわかりやすい。素晴らしい力作だと思います!

というわけで、エレメリアン募集も今回で本当に(多分)一区切り。12巻の募集コーナーと同じ締めとなりますが、皆様、これまで本当にたくさんの力作・怪作の応募ありがとうございました!

ファンレター、作品のご感想のあて先はこちら
〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
小学館第二コミック局　ガガガ文庫編集部
水沢夢　係行　／　春日歩　係行

ＤＲＥＡＭ□ＥＮＤ：大人のお姉さん。

　放課後の廊下を、凛りんとした佇たたずまいの少女が歩いている。
　彼女の髪型はツインテール。王妃のヴェールのように煌きらびやかにたなびく金髪は、ただ存在するだけで──ありふれた学園の校舎を、幻想的な世界へと創り変えていた。
　彼女は陽よう月げつ学園高等部の生徒会長、神しん堂どう慧え理り那な。
　廊下を歩く彼女に目を留とめない生徒はいない。それは、教員でさえも。
　その日本人離れした腰の高さから、モデルと見み紛まがうほど。スカートから覗のぞく足は珠たまのような艶つやを放ち、胸は窮屈だと訴えんばかりにブレザーを押し上げ、主人の意思にかかわらず自己主張を止やめない。
　これだけの美しさを誇りながら、その眦まなじりには一片の威圧感すらない。桃色の唇くちびるは常に穏やかな微ほほ笑えみに彩いろどられており、視界の全てを抱き包むかのような慈愛に満ちている。
　生徒会の腕章をつけ、役員たちと一緒に校舎を巡回する。彼女はただ歩いているだけだというのに、全校生徒の向ける視線は、スタジアムの花道を歩くアイドルへのそれだ。
「……ふふ」
　一年の校舎に差しかかり、慧理那は人知れず笑みを深めた。
　ここには大切な後輩であり、友達であり、仲間であり、そして──可か愛わいい「僕」がいる。

　果たして、ほどなく歩いたところで、見知った男女三名の姿があった。
「あーあ、あたしも会長みたいにおっぱい大きくなりたいなあ……」
　自分の胸を押さえながら落胆しているのは、津つ辺べ愛あい香か。
「うふふ、津辺さんもいつか大きくなりますわ。それに、女性の魅力は胸だけではありません。わたくしたちは、しっかりとツインテールを磨いていきましょう」
　嫋たおやかな微笑みですれ違いざまに愛香を励まし、慧理那は廊下を進む。
　年長者として、後輩の悩みをケアするのも大切な仕事だ。
　何より、彼女は大切な仲間なのだから。
　トゥアール、そして観み束つか総そう二じに会釈をし、慧理那は巡回を続けた。

　夕暮れの木漏もれ日が窓から差し込む。
　すでに慧理那一人となった生徒会室のドアが、控え目に開かれた。
「お疲れ様、慧理那」
　総二は労ねぎらいの言葉をかけ、ドアを閉める。そして、自然に鍵かぎもかけ……慧理那の座る窓際のエグゼクティブデスクへと近づいていく。
「……待っていましたわ、総二」
　慧え理り那なの頬ほおは、何かを期待するかのように淫いん蕩とうに赤らんでいた。
　先ほど廊下ですれ違いざま、総そう二じにだけツインテールで合図を送っていたのだ。
　──逢おう瀬せの合図を。
　慧理那はモールス信号のように、ツインテールの揺れ具合での符ふ丁

ちようを考案、総二と共有している。
　慧理那にとって、観み束つか総二は後輩であり、大切な仲間。
　それだけではなく、唯一特別な関係の男性。許嫁いいなづけだ。
　そして、自分は年上の女。恋に疎うとい初う心ぶな少年を、優しく導かなくては。
　この自慢のツインテールを見つめられ、快悦に打ち震ふるえている胸の内を、気け取どられるわけにはいかない。
「何か、ちょっと後ろめたいな……。みんなに黙って、こんなこと……」
「うふふ……」
　慧理那は席を立つと、エグゼクティブデスクの上に座り、足を組んだ。
　そしてツインテールを一房掬すくい、誘うように淫いん靡びな声で言った。
「さあ、いつものように……ツインテールを触っていいのですわよ」
「ありがとう慧理那……い、いくよ」
　何度やっても慣れない総二は、腫はれ物に触るようにツインテールに手を伸ばす。
　誰だれもが認める世界で一番ツインテールを愛する少年がその実、女体ツインテールの愛あい撫ぶに関しては穢けがれを知らない子供のように稚拙。
　不器用な指使いが、逆に慧理那の情欲を滾たぎらせる。
「大丈夫、ね、そう……。うふふ、ツインテールは怖くありませんわよ」
　母親が子供を優しく躾けるように、総二の手に自分の手を重ねて動きを指南する慧理那。
「あ、ああ……こうか？」

緊張と興奮がせめぎ合う、好すいたらしい面おも持もち……これこそ、年下の男の子の醍だい醐ご味み。

「そう、とっても上じよう手ずですわよ……総二」

しかし、繊せん細さいな、遠えん慮りよがちな指使いであることには変わらない。

総二はいずれ神しん堂どう家の婿むことなるのだ、もっと逞たくましく、荒々しくツインテールを扱う魂こん魄ぱくが求められる。

「けれど、ただ撫なでるだけでは駄目ですわ。もっと、強くしてくださいまし。多少乱暴に扱っても……女の子ツインテールは壊れたりはしませんわよ？」

「わかった……」

空返事が精一杯の総二。指に込める力を慎重に調節し、また、触れ方に緩急をつけていく。

「あ、ん……はぁ……その調子ですわ……」

慧え理り那なの吐と息いきも、そしてツインテールも、徐々に熱を帯おび始める。

総そう二じもまた、狂おしいまでに息を荒らげ始めた。

神しん堂どうの女は、ツインテールで男を惑わす。特にツインテールを用いた舞踊を奥義としており、それは総二のようなツインテールを愛する男をたちどころに滾たぎらせる効果を持つ。

だが、神堂の歴史の中でも最高の才能を開花させた慧理那にはもはや、踊りすら必要ない。

自らのツインテールに触れさせただけで、男を昂たかぶらせる術すべを体得してしまった。

甘い蜜に誘われてやってきた獲物を捕らえて決して放さず、ツインテールという魔性に存分に依存させる。

「もう総二は、わたくしのツインテール無しでは生きていけませんわ

ね……？」
　無む垢くな少年を自分色に染めていく黒い悦びに、慧理那は昂ぶりで身体からだを震ふるわせた。
「さあ、総二……服を脱がせて。今日は――下着まで、全てですわ」
　総二は無言でこくりと頷うなずくと、慧理那のブレザーの胸元へと手を伸ばした。

　ああ、きっと自分は今日、内に秘めた欲望の全てを解放してしまうかもしれない。
　その時総二がどんな目で自分と自分のツインテールを見つめるのか……想像するだけで―



「ふぇ」

　──どうなるのだろう？
　よくわからないまま、慧え理り那なは目を覚ました。
　サイドテーブルに置かれた、ヒーロー番組のキャラクターを模した目覚まし時計を見ると、時間は朝の四時。いつもの起床時間より少し早い程度だ。
「もしかして、わたくし──」
　トゥアールの夢機械を使えなかった未練が、自分に不思議な夢を見せたのかもしれない。
　その時願ったのはちょっとした「お散歩」だったのだが、ヴァーチャルトゥアールームのように望む夢を見れるほど便利ではない。
「素敵な夢でしたわ…………途中までは。……ままならないものですわね……」
　グラマラスな身体からだに成長し、思いを寄せる少年と仲なか睦むつまじくする。
「観み束つか君……わたくしのツインテールをたくさん触って、嬉うれしそうにしてくださっていましたし……」
　そして夢の中の慧理那も、嬉しそうにしていた。
　まさに夢のような夢だったが……慧理那は不服の溜ため息いきをついた。
　自分が総そう二じの心を縛り、支配するかのようにツインテールを差し出すなど──なんという傲ごう慢まん。
　ツインテールを〝触っていい〟などと──なんという驕きよう傲ごう！
　慧理那は、自分から積極的に迫っても満たされない。
　総二から迫ってきてくれなければ、意味がないのだ。
　しかもあの慧理那（大）は、あれだけ熱い眼まな差ざしで見つめられ

ながらも、ずっと衣服をまとったままだった。
　あまつさえ、脱がせて、などと……もはや同じ自分の言葉とは思えない。
　自分で脱ぐからこそいいのではないか。
　寝起きも早々に、慧理那は自分自身にぷんぷんと可か愛わいらしい怒りを向ける。
　あれは成長と引き替えに、大切な信念をどこかに置き忘れてきた紛い物……。
　手放しで喜ぶには、綻ほころびが多すぎる夢だ。
　けれど、小さな嬉しいこともあった。
「そういえばわたくし……総二、と呼んでいましたわね……」
　慧理那はツインテイルズの仲間入りを果たしてほどない頃ころ、初めて総二に電話をかけた。
　厳格に育てられた慧理那からすれば、男の子に電話をかけるのは勇気のいることだったが……何とか総二に電話をかけ、そこでさらに勇気を出し、自分も総二を名前で呼びたいと願ったのだ。
　総そう二じも快諾してくれ、念願のファーストネームで呼び合う関係になるはずが……直後、電話越しに愛あい香かやトゥアールの声が総二の部屋から聞こえたジェラシーで、自分から元の呼び方に戻してしまった。
　あれから数か月、未いまだに慧え理り那なは総二のことを「観み束つか君」と呼んでいる。
　また何か、きっかけがあればよいのだが……一度自分で反ほ故ごにしてしまった呼び方に戻すには、よほどの勇気がいる。少なくとも慧理那にとっては。
　せめて今見た夢のように、女性らしい体型へと成長できれば、心に余裕もできるのだろうが……。

◇

　尊みことと数名のメイドたちと一緒に、通学路を歩く慧理那。
　朝方見た夢のことを思い出して上の空になっていた慧理那は──
「おはよう、慧理那」
　総二が目の前に歩いてくるまで気づかなかった。慌あわてて挨あい拶さつを返す。
「……あ、おはようございますわ、観束君」
　その時不意に強い風が吹き、慧理那はスカートを押さえる。
「……っと、大丈夫か、慧理那」
　風で舞い上がった慧理那のツインテールを、総二がキャッチする。
　大丈夫か、と言いつつ、ツインテールを遠えん慮りよなく触ってくる。おそらく無意識だろう。
　遠慮せず触ってもらえることが、呼び方よりも雄弁に、二人の距離感を教えてくれる。
（ああ、やっぱり……夢よりも、現実の方が素敵ですわ）
　現実の温かな総二の手が、慧理那に多幸感をもたらす。
　都つ合ごうのいい夢を見なくてもいい。
　名前で呼び合えなくても、今はまだいい。
　こうして総二と毎日を一緒に生きるだけで、望むものはちゃんともらえるではないか。
「慧理那、今日もいいツインテールだな！」
「……ありがとうございます、観束君！」
　総二の優しい指使いに──慧理那は、満面の笑みを浮かべた。

　────だけならよかったのだが、はあはあし出した。

あとツインテールがき

　俺ツイの短編集、お楽しみいただけましたでしょうか。水みず沢さわ夢ゆめです。
　こちらはアニメＤＶＤ□Ｂｌｕ-ｒａｙの特典小説の中からの再録に、書き下ろしを加えたものとなっております。
　自分にできることに限りはありますが、それでもこの本が出るにあたり、アニメの特典小説を手にしてくださった方はそれだけの価値がちゃんとあるように、そしてこの本を買ってくださった人は初めて読んでも特典小説を持っていても楽しめるよう、色々考えて構成し直したり書き下ろしたりしました。普段はやれない天丼な展開もやってみました。
　いつもと違う短編ならではの疾走感を感じていただけると嬉うれしいです。
　俺ツイは書きたい過去編や外伝的なエピソードがたくさんあるので、もし機会をもらえればそういうものができたらいいなあと思っております。
　そのためにも是非、今後とも応援をよろしくお願いいたします！

　今回も、完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusaw

北国在住のツインテール作家。アニメ円盤の特典小説からの厳選＋αですが、これを書いてた頃は日帰りで東京と青森の往復を毎週やるという凄まじい生活を送っていたのを思い出します。もちろん楽しくてやっていたんですけどね。またいつかやりたいなあ、エクストリーム往復……。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。

２０１７年３月31日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１７年３月22日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451662-3

※巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。


GAGAGA BUNKO
MARCH 2017
No.119
ガ報
GAHO
ガガガ文庫
3月刊
絶賛発売中!!!
ツイン×ツイン＝∞!?
ツイン前線北上中！
究極パワーで七花満開ガガガの春!!
幻の問題作！
愛香とトゥアールの
禁断の愛。
定価:本体611円+税
著者コメント
アニメで扱った範囲のキャラならほぼ何をやってもいいですよと言われて真に受けて何でもやった力作がこちらです!!
望んだ夢を見ることができるトゥアールの発明品を使用した愛香。そこには恐るべき落とし穴が……。文庫未収録となっていたTVアニメシリーズの特典小説を再構成。さらに、カオスな書き下ろしも加えた珠玉の外伝!!
［俺、ツインテールになります。4.5］
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩
最大の試練！魔星少女の真実!!
定価:本体611円+税
著者コメント
強すぎる前主役を先輩に持ち、報われない新主人公として頑張ってきた遥。彼女のひたむきさを見守ってください!
陽奈たちはおもちゃ販促の次のステップとしてCM撮影に着手するが、ロケ現場は想像を絶するアクシデントに見舞われて事態は急変……!?そして悪の黒幕がついに降臨。地球の魔星少女は今、最大の試練を迎える!!
［ふぉーくーるあふたー4］
著:水沢 夢 イラスト:bun150
異世界だよ全員集合！
大運動会はじまるよ！
定価:本体611円+税
著者コメント
東京への修学旅行だと、観光コースに東京ドームや国技館が選ばれることがよくあるそうですが、建物を見るだけじゃないですよね。異世界修学旅行第五巻、今回はスポ根です。
浩介たち一行は三種族の亜人が住まう城壁都市を訪れる。しかし彼らの様子はおかしいいし、やっぱり裏で生徒会が暗躍しているようで……。騎馬戦、棒倒し、パン食い競争。城壁都市の未来をかけた異世界運動会が始まる!
［異世界修学旅行5］
著:岡本タクヤ イラスト:しらび


競うことは、
争うことなのか。
定価:本体593円+税
著者コメント
ヒロインも登場して、より充実の2巻です。1巻でやりきったその先に、さらに大きく宇宙とスポーツの物語を広げてみました。
史上、類を見ない"ルール違反"。
運営は協議の結果、雄星を二軍練習場へと送りこむ。そこで出会ったのは、
無数の敵意と、たったひとりの味方だった。
──暴動と喧噪の中心で、鷹森雄星の新たな挑戦の日々が始まる。
［ストライクフォール2］
著:長谷敏司 イラスト:筑波マサヒロ


現実で失踪してしまった希。ログをたどってリユニオンの上空を捜索する陽翔たちは、そこに"夢の城"を発見する。グノーシスの脅威が迫るとき、浮かび上がる新たな真実とは──?
革新的青春オンライン、第5弾!
夢幻に奏でるは、
愛憎のラプソディ。
定価:本体593円+税
著者コメント
希が行方不明になった上、"グノーシス"と全面対決!今度は貴法が男を見せます!"スバル"ついに集結?
［七星のスバル5］
著:田尾典丈 イラスト:ぶーた


モンスターたちの
生きる意味。
それは──。
新たな勇者戦。エルブランコが巻き起こしたスキャンダルを機に、解散に追い込まれたゴルディアス軍。その失敗から逃げるように、スラムに身をやつした彼に救いは在るのか?
ファンタジー社畜コメディ完結編。
定価:本体593円+税
著者コメント
最終巻のテーマは「ゲス不倫」です。クライマックスに向かう社畜たちの明日はどっちだ!?
［勇者に期待した僕がバカでした3］
著:ハマカズシ イラスト:Ixy


クズ教師再び!?
限界突破の
エロコメディ!
誠一の行動に悩まされる良二だったが、ある日、学内でも有数の美少女、茜空優妃の秘密を知ってしまったことがきっかけで、まさかの恋愛相談を受けることに!?
エロすぎ注意のクズコメディ第2弾!!
定価:本体611円+税
著者コメント
好きだという気持ちは、自分の思い通りにはならないという悲哀を書きました。記憶喪失系の話が好きな人はどうぞ。
［僕の地味な人生がクズ兄貴のせいでエロコメディになっている。2］
著:赤月カケヤ イラスト:成沢 空

ガガガ文庫イチオシピックアップ 電子書店員さんとガガガくん 電子書籍ストア編

GAGAGA やあ、ボクはガガガくん。いつもガガガ文庫を応援してくれてありがとう! 電子書籍ストアの書店員さんに、最近の電子書籍市場やガガガ文庫の印象を聞いてみたヨ! アツいトークに花が咲いたので、是非チェックしてネ!







今年でガガガ文庫創刊10周年! ガガガの印象を教えてヨ!

角さん　とにかく尖っていて**挑戦的**だと思います。タイトル一つとっても**『下ネタという概念が存在しない退屈な世界』**とか**『キモイマン』**とか…… ものすごい衝撃を受けました(笑)。

遠藤さん　創刊のときから、**「他のレーベルとは違うぞ!」**という印象を感じました。まさに尖っていて、チャレンジ精神旺盛。たくさんのレーベルがある中でも、話題になり続けていますし。

山本さん　えー、尖ってるという印象はもちろんなのですが、**それを次のスタンダードにしている**と思いました! テンプレだけでは次の時代を作れないと思いますし、それがガガガ文庫の強さなのだと感じます。

今の電子書籍(ライトノベルなど)市場を聞かせてヨ!

山本さん　読者さんの**9割以上が男性**ですね。そのあたりは紙の書店さんとあまり差はないかもですけど。表紙のキャラが水着になったりしている**水着回だけDL数が上がったり**しておもしろいです。

遠藤さん　うちではだいたい**男女比6:4**ですかね。**漫画・ライトノベルがうちの主戦力**になっています。

角さん　**男女比は5:5**です。うちは女性読者さんの割合が大きく、そのことを常に意識してキャンペーンなどをしています。

山本さん　実は電子書籍でも**初動がとても大事**で、シリーズなら2巻が出るまでの段階ですぐにしかけられるようにしたいと思っています。**拡散力も売りの一つ**だと思うので。

角さん　一般書店さんでバズった作品は電子書店でも動きますよね。もちろん逆のパターンもあって、**電子書籍で売れているから重版がかかった**という声も聞きます。

ガガガ文庫10周年の年にイチオシしたい、注目シリーズが知りたいナ!

山本さん　**『やがて恋するヴィヴィ・レイン』**がとにかく素晴らしいです。あれだけしっかりしたストーリーの中で、なおかつ1巻の最後の最後に驚かされました。あの衝撃をたくさんの読者にも知ってもらいたいです!

角さん　私は**『妹さえいればいい。』**をぜひ推したいですね。これはもう書店員として「世に出さねば!」と使命を感じるほどおもしろい作品です! ほかにも**『弱キャラ友崎くん』**や**『異世界修学旅行』**などもっと読者に知ってもらいたい作品がいっぱいあります。

遠藤さん　今年売っていきたい作品は**『二度めの夏、二度と会えない君』**です。僕が一番ライトノベルを読んでいた時期が中学校時代なんですけど、そのころを思い出させる良い作品です。青春、タイムリープなど読者をドキドキさせる魅力を持っています。映画もとても楽しみです!

山本さんオススメ本



やがて恋するヴィヴィ・レイン

角さんオススメ本



妹さえいればいい。

遠藤さんオススメ本



二度めの夏、二度と会えない君

皆さん、どうもありがとう! ご意見を大事に受け止めつつ、編集部一同がんばるヨ! 読者の皆も10周年を迎えるガガガ文庫に期待していてネ! GAGAGA

4月刊ラインアップ 4月18日ごろ発売!!

[アトム ザ・ビギニング 僕オモウ故ニ僕アリ]
著:藤咲淳一 イラスト:カサハラテツロー、めばち 原作:『アトム ザ・ビギニング』(ヒーローズ刊)
TVアニメ4月放送開始を控える注目作、シリーズ構成・藤咲淳一が手がける渾身のオリジナルエピソード!

[俺と彼女の恋を超能力が邪魔している。]
著:助供珠樹 イラスト:いつい
男子校に通うボンクラ男子が出会ったのは、超がつくほど特殊な訳あり少女だった。ボーイ・ミーツ・サイキックガールな青春ラブコメ!

[群神アグニ]
著:田中ロミオ イラスト:松竜
遥か未来の地球。最下層にいながらも、生存のために戦う少年少女のSFアドベンチャー!

[青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。]
著:境田吉孝 イラスト:U35
完全無欠の負け犬高校生、狭山明人。痛すぎる青春をおくる彼に「救済」を申し出たのは、謎のボランティア・藤崎で──?

[月とライカと吸血姫2]
著:牧野圭祐 イラスト:かれい
レフは監視役を外れ候補生に復帰。宇宙飛行士選抜試験に臨む。しかし、その裏でイリナの廃棄処分が持ち上がり……。

[魔法医師の診療記録5]
著:手代木正太郎 イラスト:ニリツ
奇怪痛快! 奇想の嵐! ガマエを追って奇妙な島に訪れたクリミアとヴィクターにかつて無い脅威がせまる!

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑫]
著:渡 航 イラスト:ぽんかん⑧
お待たせしました! まちがい続ける青春群像劇は完結へ向けシリーズ最高潮へ!!

[友人キャラは大変ですか?2]
著:伊達 康 イラスト:紅緒
主人公・龍牙のため、魔神トウテツとの同居(?)生活をはじめた一郎。友人キャラへの回帰はなるのか!?

5月刊ラインアップ

[妹さえいればいい。7]──著:平坂 読 イラスト:カントク
[妹さえいればいい。7<ドラマCD付き限定特装版>]──著:平坂 読 イラスト:カントク
[EXMOD 思春期ノ能力者2]──著:神野オキナ イラスト:こぞう
第11回優秀賞受賞 [海新高校ジャナ研の事件簿] ※受賞時のタイトル「翡翠と琥珀」──著:酒井田貫太郎 イラスト:白身魚
[漂海のレクキール(仮)]──著:秋目 人 イラスト:柴乃櫂人
[やがて恋するヴィヴィ・レイン3]──著:犬村小六 イラスト:岩崎美奈子
[勇者と勇者と勇者と勇者5]──著:川岸殴魚 イラスト:すまき俊悟
[妖姫のおとむらい2]──著:希 イラスト:こずみっく

ガガガブックス [最下位職から最強まで成り上がる ~地道な努力はチートでした~]──著:上谷 圭 イラスト:桑島黎音

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

「人類は衰退しました」「AURA」の
田中ロミオ
完全オリジナル書き下ろし
最新作は
SF×冒険×巨大機械兵器!?
生き抜くために、戦う少年少女の物語、乞うご期待!



※イラストは制作中のものです。イラスト:松竜



※イラストは既刊のものです。イラスト:ぽんかん⑧

青春ラブコメの金字塔
「俺ガイル」最新12巻!!
シリーズ累計600万部突破!
圧倒的支持を受ける青春ラブコメの行方から目が離せない!!

ガガガ文庫創刊10周年企画
WEB小説 ガガガブックス、始動!
ガガガ文庫がWEB小説発の作品を世に送り出す!!
物語の新次元がここに!! 続報をしばし待て!!

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

必殺技。それは誰しもが憧れる人類のロマン。老若男女を問わない魅力が詰まっているものですよね。漫画やアニメに登場する必殺技を真似て遊ぶなんてことは一度や二度ではないはず。というわけで今回の質問はこちら。

質問 僕は今、小説を書いていて作中に登場させる必殺技を考案中なのですが、先生方はこれまでにご覧になった小説、漫画、アニメなどで心に残った必殺技はありますか?(奈良県・GAKU・26歳)

●奥義「まんが」昇竜脚!……赤城大空先生『史上最強の弟子ケンイチ』に出てくる『悶虐陣破壊地獄』です。人を殺さないための必殺技です。
陸 凡鳥先生 アバンストラッシュ。語感が抜群に勇者の技っぽい。

●絶技「アニメ」斬波!……夏 緑先生 キュアラブリーのラブリービーム(『ハピネスチャージプリキュア!』)。強力だけど使い勝手が悪い、クセのある技を乗りこなすようなバランス設定が好きです。
ハマカズシ先生 Gガンダムの石破ラブラブ天驚拳。世界一恥ずかしい名前の必殺技だと思います。

●超技「とくさつ」ビーム!……中沢 健先生 ウルトラマンタロウが酔っ払い怪獣ベロンの酔いをさますために使った必殺技「ウルトラバケツ」。酔っ払いに水ぶっかけただけ!
水沢 夢先生 仮面ライダーギルスのギルスヒールクロウが特撮ヒーローの中で一番最初に憧れた必殺技です。もしやその影響で野性味溢れるバトルヒロインを書くように……。

●極技「ゲーム」神拳!!……細音 啓先生 ゲーム『ヴァルキリープロファイル』の大魔法詠唱。名声優さんの演技も相まって、呪文の詠唱のお手本みたいなクオリティです。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。
その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

ガガガ文庫の「最新刊」が電子書籍でもすぐ読める!!

ガガガ文庫「イラスト完全版」電子書籍 同月発売してます!

「Amazon Kindleストア」「紀伊國屋kinoppy」「BOOK☆WALKER」「楽天kobo」「iBooks」などで配信中!! 今後もどんどん取扱店拡大予定です!

作品内のカラー口絵イラストやモノクロイラストを全点再現!

現在、ガガガ文庫の最新刊(毎月18日頃発売)の電子書籍が、その月の最終金曜日に配信中。気になる続刊や話題の新刊がすぐに電子書籍でもお楽しみ頂けます。

第11回小学館ライトノベル大賞[ガガガ部門]

最終結果発表!!!

応募総数1328作品の中から厳正なる審査の結果、5作品が受賞!!! さらに発売予定日も決まりました!

ガガガ大賞 賞金200万円
[平浦ファミリズム] 遍 柳一 7月19日ごろ刊行予定!
母を亡くした高校生の平浦慶一。残されたのはトランスジェンダーの姉、引きこもりの妹、変人フリーターの父。そんな家族の人生模様。

ガガガ賞 賞金100万円
[ひきこもり姫を歌わせたいっ!] 水坂不適合 7月19日ごろ刊行予定!
超歌下手男子・蒼山礼人。ロックバンドの甲子園で優勝を目指す彼が目をつけたのは、天使の歌声を持つひきこもり姫で!?

優秀賞 賞金50万円
[その過去にイピカイエー、この結末にマザーファッカー。] 谺 6月20日ごろ刊行予定!
二足歩行兵器の搭乗者育成学校にテロリストの猛威。整備士として学園を訪れていた稟次に生徒たちの命運は託された!

優秀賞 賞金50万円
[翡翠と琥珀] 酒井田寛太郎 5月18日ごろ刊行予定!
性格に少々難アリの啓介は純真な先輩・雪穂と出会い、学内外で起こる様々な事件を一緒に解決していくことになるが……

審査員特別賞 賞金30万円
[世界の終わりに問う賛歌] 白樺みひゃえる 7月19日ごろ刊行予定!
魔法社会のエネルギー危機に端を発する、次世代型発魔炉の開発プロジェクトをめぐる受難と救済の物語。

来月はゲスト審査員を務めた広江礼威先生の講評をご紹介します!

第12回 小学館ライトノベル大賞

ゲスト審査員は川村元気氏

大賞	ガガガ賞	優秀賞	審査員特別賞
賞金200万円 &デビュー確約!!!	賞金100万円 &デビュー確約!!!	賞金50万円 &デビュー確約!!!	賞金50万円 &デビュー確約!!!

締め切り 2017年9月末日(当日消印有効) 詳しくはガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREをご覧下さい。▶http://gagagabunko.jp/

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミカライズ されど罪人は竜と踊る



「サンデーうぇぶり」にてコミカライズ企画今春始動!

コミカライズを手がけるのは期待の新鋭、三途河ワタル先生! 2017年秋TVアニメ化決定に沸き、ますます勢いづく「され竜」から目が離せない!

原作:浅井ラボ
キャラクター原案:宮城/ざいん
作画:三途河ワタル

コミカライズ アイゼンフリューゲル



コミックス第2巻、3/23発売!

月イチ刊行「スピリッツ」の増刊号「ヒバナ」にて好評連載中、虚淵 玄完全オリジナルの作品のコミカライズ『アイゼンフリューゲル』待望の第2巻が登場! 空に自由を求めた男たちの熱き物語は必見!

原作:虚淵 玄(ニトロプラス) 漫画:七竈アンノ
原作イラスト:中央東口

TVアニメ アトム ザ・ビギニング

2017年春NHK総合にてTVアニメ放送開始!

"鉄腕アトム"に至るエピソードゼロの物語!アニメ放送に合わせ、シリーズ構成・藤咲淳一によるオリジナルストーリーのノベライズがガガガ文庫4月刊にて発売予定! 乞うご期待!

4月15日より毎週土曜23:00 NHK総合テレビにて放送開始!! ※放送時間は変更になる場合があります。
[CAST]天馬午太郎 CV:中村悠一 お茶の水博志 CV:寺島拓篤 A106 CV:井上雄貴



書店員さんとガガガくん

GAGAGA ガガガくん: 今月は特集でも「書店員さんとガガガくん」を実施中! 電子書籍のストアさんだけでなく今月の書店員さんもとっても熱い方だヨ!

今月の書店員さん



八文字屋書店 泉店 菊地加奈さん

住所:宮城県仙台市泉区高玉町4-1 電話番号:022-371-1988 営業時間:10:00~22:00
定休日:年中無休 URL:http://www.hachimonjiya.co.jp/

明るく広い売場でゆっくりとお気に入りの1冊を見つけられる店舗です。是非一度ご来店ください。

菊地さんのオススメ本



[ハナシマさん]
繊細な描写で織り成す雰囲気の新感覚ミステリー。点と点で繋がった結末は背筋にクるものがあります。

▶新刊とオススメの作品が一目瞭然! これなら気になる作品がきっと見つけられちゃうよネ!



編集後記

・使わなくなったワンダーコアとかって皆さんどうしてます?(野)
・夜、一緒にフットサルしてくれるひとを募集してます。(☆)
・うちの近所に「餃子の王将」がオープンした衝撃と喜び。(濱)
・撃滅のセカンドブリッドですかね。あ、特捜部の回答です。(岩)
・マスクが手放せない季節の到来、長い戦いが始まる……!(飯)
・「嬉しい」「楽しい」「大好き」を自然に言えるようになって陽キャになるのが昨今の課題。(小)
・昼間は会社に、深夜はジャパリパークに棲息してるんだー! 夜行性だから大丈夫!(田)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛